
魔法少女リリカルなのはStrikerS 紺碧の姫

non

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers

紺碧の姫

【Nコード】

N7590Q

【作者名】

non

【あらすじ】

ファシナトールからリリカルなのはの世界に迷い込んだアセルス。

半妖となった自分を見つめ、そしてこれからすべき事を探している、そんな少女の物語。

現実逃避（前書き）

はじめまして。nonと申します。今回が処女作で、いろいろ問題があるかと思いますが、頑張りますのでよろしくお願いします。

現実逃避

「はあはあ……」

私はただ必死に逃げた。

追っ手はすぐそこまで来ている。

私はただ逃げ続けた。

千載一遇の機会。逃すはずがない。逃したくない。私はここから逃げ出したい。その一心で私は走っているのだ。

「アセルス様！！ 追っ手が迫っています。ここは私が食い止めますので」

振り返ると、こちらに笑みを浮かべる顔が視界に飛び込んできた。

「白薔薇！！何言ってるんだ、一緒に逃げないと白薔薇が！！」

「アセルス様、私のことはお構いなく。それよりも早くお逃げ下さ……白薔薇が一緒じゃないと意味がない！！」

私は白薔薇を引っ張るとシップと落ち合う予定の崖へと向かった。

「いない！騙されたんだ！」 私は周囲を見渡すが何もなかった。

「このままじゃ……」 私はただ焦るばかりだ。そして追い打ちかのごとく彼が現れた。

「イルドウン！アセルス様ここは私が。」 「イヤだ！私も戦う。」

イルドゥンに勝てるはずがないと分かっている。でも1人で逃げ出すのは嫌だ。それなら一緒に戦ったほうがいい。そんな気持ちを遮るかの様に彼は言葉を投げかけた。

「おままごとはそれぐらいにしていたきましよう。さあ、手間をかけさせないでください。」

「責任は私にあります。罰するなら私を、イルドゥン」

「それは主上が御決めになることです」

「あそこに戻るぐらいなら、ここから飛び降りてやる！」

「アセルス様！」

私は崖に向かい走りだした。あそこに戻るくらいなら死んだほうがいい。私を追いかけてくる二人を気にも留めず私は漆黒の闇へと身体を投げた。

「アセルス様!!」

「あの小娘!!」

二人の声が聞こえる・・・でももう関係ない。もうすぐ楽になれる。そうやって意識を手放しかけたその時だった。

「・・・様」「・・・娘」

最後に見えたのは白い薔薇と碧の髪。私は意識を手放したのだった。

海…？ 波の音が聞こえる。どうして？ここは一体どこなんだろう
疑問が次々と頭を駆け巡る。そして眩しい光に包まれた。

「アセルス様！！やっとお目覚めになりましたね」「やっとか、全くいつまで寝るつもりだ小娘」

「私は小娘じゃない！アセルスだ！！…って私生きてる…」

死んだと思っていた私にすれば一体どうなっているのか見当もつかない。思考を無理やりまとめ問いかけた。

「そういえば…ここは何処？それに白薔薇はともかく、なんでイルドゥンまで！？」「それは私が答えます、アセルス様」

「アセルス様が崖から身体を投げた直後に、私とイルドゥンは追いかけてました。気を失われていたアセルス様に追いついた時、私達は黒い霧のようなものに包まれました」

「そして気が付いたらここに居た訳だ。分かったかアセルス」
白薔薇、イルドゥンの説明は終わり、周りを見渡してみた。

「周囲には他に何か？」「いえ、何もありませんでした。人の気配は当然ありません」

溜め息混じりに頂垂れた。どうやら無人島のようなのだ。

それにここはファシナトゥールではない。このような場所は無い。
海なんて…それに太陽…。

「シュライクに帰ってきたみたい」

私は薄い期待を込めて呟く。しかし現実はそんなに甘くない。

「ここは我等の知る世界ではないな」「どういうこと!？」

私には彼の言っている意味が理解できなかった。

「リージョンの中にこのような世界は知らん。あくまで予想だが、違う世界に飛ばされたのではないか？」

「それに黒い霧の件もある」

彼の言っていることは一理あるはず。でも今はこの状況をなんとかしないと。

私は白薔薇に視線を向ける。白薔薇も首を縦に振った。

「とりあえず、ここから脱出しないとね」

現実逃避（後書き）

文才を磨くため頑張ります。

邂逅

脱出の手段をさがして私達は島を搜索している。自然に溢れたこの島に機械的な物など存在するのだろうか。

「イルドウン」

「何だ」

「そういえば、イルドウンって空間を移動することができたんじゃないかった？」

「残念だが、もう試してみた。何故だか分らんが、力が使えんのだ」

「白薔薇も？」

「残念ながら…アセルス様」

光が見えたと思った矢先にまた闇に覆われてしまい、自分を慰めるように呟く。

「はぁ…イカダでも作ってみる？」「止めておけ」即答で却下された…

「じゃあ、イルドウンは何か方法はあるの？」
怒気を込めて私は問い詰める。

「何を怒っているのだお前は？今はそれよりも島の把握だろう」

「さつきからそれしか言っていないよ。ちゃんと考えてるの?」

焦る私はただ我儘に近い怒りをぶつけるだけだった。

「アセルス様、落ち着いてください。今はイルドゥンのおっしゃる通りです」

白薔薇に説得され渋々納得。不貞腐れていると不意に白薔薇が隣にやって来た。

「アセルス様…今夜は…」

思いがけない言葉に私の顔は紅く染まってしまった。

「ななな…白薔薇、何を言って／＼／」

「冗談です…／＼／アセルス様」

唇に指を当て、微笑を浮かべる白薔薇に私は動揺を隠せなかった。

「おい、何やってる。早く行くぞ。」

イルドゥンがイラつきを抑えながらこちらに声をかける。

「白薔薇姫様、お戯れは程々をお願いします」「なっな、何を…／＼／」

…しまった 動揺が抜けていなかった。二人に揃って笑われる私はただ自分を恨むだけだった。

島は案外狭く、半日程度で探索することができた。

さて…これからどうするのか。そんな思考に私は耽っていた。

「アセルス！！上だ！！」

私はその声に反応し、頭上を見上げる。

「キシヤー！！」

奇声と共に何かが落ちてきた。

潰される。思考よりも先に身体は動いていた。座っていた流木は跡形もなく吹き飛び、舞い上がった砂と共に私に吹き付けた。

「…つつう、一体何？」

砂塵が収まるとそこには逃げてきたあの場所にいた生き物だった。

「大きいサソリ！？」「アセルス様、あれはデスポーカーです」

「デスポーカー？初めて見たよ」「焦るなアセルス、訓練は十分積んできたはずだ。嫌という程な」

「イルドウンに散々やられたからね」「今回は1人で戦え」

「えっ、1人で？」「当たり前だ。私はあるとき敵として居たからな。当然だ。それに白薔薇姫様の手を煩わせる訳にもいかんからな」

「イルドウンが勝手に決めるな。白薔薇、一緒に戦ってくれ」

困った顔でお願いするアセルス様を放っておくことはできません。イルドウン…ごめんなさい。

「分りました、アセルス様」

「ありがとう！白薔薇！」

満面の笑みを浮かべるアセルス様は素敵でした。

「まったく、白薔薇様はアセルスに甘すぎる」

そんなボヤキを背に受け私達は魔物へと対峙する。

「さて、アセルス様。参りましょう」

私はイルドウンから貰ったボーイーナイフを構えた。白薔薇は後ろでサポートを担当してくれている。

「行くぞ、化け物め」

私は正面からデスポーカーへと駆けだした。イルドウンとの訓練が活きているのだろう。

「見える！遅いよ」

なぎ払われた尻尾を空中へ回避すると同時に落下を利用して斬りかかる。

「はあああ！」

裂帛の気合のもとに斬りつけるが

ギンツ！！

まるで金属と金属がぶつかった様な音と同時に、ハサミにナイフが受け止められていた。

「くっ！こいつ…今まで戦った奴よりかなり固い」

ナイフが通用しない相手に格闘なんて通用しない。まして今の私の体術なんかじゃとても…

「馬鹿！戦闘中に考えに耽る奴がいるか」

イルドウンの叫びも空しく、私の眼前には毒針が無数に展開していた。

「しまった！！！」

かしゃーん！！！！

何かが割れるような音がした。何だろう？硝子みたいな音だったけど？

すると目の前で薄い硝子が碎け散り、その破片は魔物へと飛翔していく。硝子片は次々と刺さり、魔物は奇声をあげている。

「間に合って良かったです。アセルス様、お怪我はありませんか？」

陽術 スターライトヒール

暖かい太陽光に包まれ、傷が治療されていく。

「ありがとう、ところであの硝子みたいなのは白薔薇が？」

「あれは硝子の盾です。妖術の一つです。アセルス様もお使いになれますよ」

なんか便利そうだけど、術は苦手なんだよね…ってそれどころじゃない。

「ただ斬るだけじゃあの皮膚は破れない。皮膚が硬いのなら…」

硝子が刺さった為だろう。デスポーカーは激昂している。ハサミや尻尾を振りまわし私に襲いかかる。私は冷静に攻撃を避け、観察していた。

多分、あの皮膚の継ぎ目なら…ナイフでも

私は一気に間合いを詰めた。よし、反応できていない。

「そこだっ！！」

私は継ぎ目を狙いナイフを突き刺した。いや、突き刺せなかった。

「足元が揺れる？」

見ると、尻尾とハサミが地面を激しく打っていた。

グランドヒット

激しい揺れと衝撃に私は昏倒しかけた。視界がぶれる。よほどの衝撃だったんだろう。

「アセルス様!!!」

白薔薇の声が遠くに聞こえる。

「ちい、やはり無理があつたか。そろそろ助けんとまずいな」

白薔薇、イルドウンの心配を背に私は何とか持ちこたえた。

考える。あいつは近づくと今の攻撃で反撃してくる。なら気付かれなければいい。もっと速く速く。

「速く、あいつに突きたてればいい!!」

駆けだした。ダメージは抜けてはいない。でも止まらない、もっと速く、速く駆け抜きたい。

だが空しいかな

こちらに気付いたのか、魔物はハサミを大きく振り上げている。

「くっ、白薔薇姫!!!回復はまだですか!?!」「もう少しで…詠唱が終わります。…アセルス様」

気付かれた。でももう止まらない。あの攻撃にはもう耐えられない。だから!!!

「速く!!!」

その言葉と同時に私の頭の中に電流が流れるように、強烈なイメー

ジが沸き起こる。

無意識にイメージを行動へと変化させる。

「はあああああ」

疾風迅雷とはまさにこのことだろう。振り下ろされるハサミの付け根を吹き飛ばし反対へ突き抜ける。

「閃いた」

言葉が消えるよりも速く私は動いた。的確に継ぎ目を狙い、突き刺していく。

「凄い…アセルス様！あんなに怪我なされているのに」「血から逃れることはできないのだな」

「あっはっはっは…」

ナイフが刺さるごとに私は笑っていた。

私は笑っていたのだ。何故？こんなに笑ってるの？

楽しいからだ。楽しい。楽しいんだ。

そう楽しいから…

血しぶきを浴びながら、また一つ、また一つ、はね飛ばしていく。もはや原型が分らないほど。私が着ている服もさらに染まってしまった。血の色に。

「とどめ」

そういつて首をはね飛ばし、同時にナイフも折れた。この相手に最

後まで耐えたことが不思議だ。

「キイイイイー」

派手な奇声を最後に血を噴き出し、その場に絶命した。

「アセルス様！！」「アセルス」

二人がこちらに向かってくるのが見えた。緊張の糸が切れてしまったのだろうか、私は意識を失った。

そして謎の昂揚感と共に。

邂逅（後書き）

閃いたのは稲妻突きです。
駄文だゝゝ。

現実（前書き）

しばらくオリジナルな話が続きます。

キャラ崩壊はなるべく回避したいですが・・・
頑張ります。

あと、短いです。

現実

第1管理世界クラナガン

「古代遺物管理部 機動六課」

疲れを感じさせるが、どこか満足そうな彼女は居た。

「とりあえず、地盤はできたわけや！これから頑張るでー！！なあ
リイン」

「はいです！はやてちゃん」

八神はやて、そしてユニゾンデバイスであるリインフォース？。二人とも笑みを浮かべている。

「騎士カリムの予言を地上本部が信用してへんからな。私達でなんとか自由に動ける部隊を作りたかったんや。
それに、なのはちゃんとフェイトちゃんとの約束もあるしな！」

「はやてちゃん…最後の眼つきがいやらしいですう」

「そんなことないよーリイン。心配しすぎや」

はやての手の動きに心配が隠せないリインだった。

「さて、部隊もできたことやし、あとはFWを何とかせなあかんの

やけど…」

手元にある資料を再度見直す。大々的に人材を集めるわけにはいかん。優秀な人材が周りに居てくれて感謝してる。でもFWが足りていない。

時間は少ないけど、育てるしかない！！

「リイン。この4人の資料を、隊長達に渡しておいてくれるか？」

「了解ですよ。はやてちゃん」

そう言つてリインは飛び出していった。まだまだ幼いが私の大切な相棒だ。

資料を片づけ、席を立とうとした時だった。

EMERGENCY EMERGENCY

緊急事態を告げる警報が鳴り響く。

「グリフィス君！！一体何が？」

八神はやての副官を勤めるグリフィス・ロウランに緊急通信で呼び掛ける。

「部隊長、首都南西の無人島に強力な魔力反応を確認しました。解析では転移魔法の一種までとしか解ってはいません。どうやら魔法のタイプが異なるみたいです」

異なる？疑問を浮かべるも問題解決の為に指示を飛ばす。

「ヴァイス陸曹にヘリの準備を。あとシグナムに現場に向かってもらつ。すぐにそっちに上がるから、グリフィス君、よろしく」

「了解した。主はやて」「こつちも準備できてますよ。隊長」「了解です」

本当に優秀で助かるわ。思わず笑みがこぼれるが、すぐに気を引き締める。

「機動六課の慣らし運転や！頼むで！みんな」

「了解！！！！」

side out

アセルside

殺せ

「えっ！？何？？？」

殺せ

「一体：何？」

私は恐怖と混乱に支配されている。心と意識に殺意が語りかけてくる。なんで？、そういえば魔物と戦った時も…

「私は殺すことに、喜びを感じた事なんかない！！私は人間だ！！！！」

叫ぶと同時に私は意識を回復した。

周りは暗い。どうやら気絶していたようだ。

「アセルス様：大丈夫ですか？ ひどくうなされてましたが」「白

薔薇：うん、大丈夫」

額の汗を拭い返事を返す。

「あれっ？血が…付いてない」

「お前はもう人間ではないので。人と妖魔の血を持つ者。つまり半妖だ」

「違う！！私は人間だ！！」

認めたくない。半妖だなんて。信じたくない。

「いい加減にせぬか。この小娘が！！」

私の胸に何か刺さっている。えっ？？？なんで？

ばたっ…

「イルドウン！！」「これくらいで死ぬような身体ではもうない。いつまで寝ているつもりだ」

私は死んではない。それに流れ出す血の色は…

「紫の血なんて…おかしいよ…」

現実から目を背けたくても、事実は変わらない。私は死んではないな

い。血は赤ではない、紫だったのだ。

「私、これからどうなるのかな…ねえ白薔薇。どうなっちゃうんだろ？」

弱弱しく語るアセルス様に私は悲しみを覚えました。ですが、あの方の血を受け継いでしまったからには、この宿命からは逃れることはできません。

それならば、アセルス様を、強く、気高い、慈愛に満ちた姫へと導かなくては。

「アセルス様、白薔薇は一緒です。今は我慢せず泣いてくださいませ」

私は白薔薇に身体を預け、泣いた。ただ悲しくて、理解できなくて私は泣くだけだった。

「自分の立場に気付いてもらいたいものだな」

彼はそう呟くと、どこかに行ってしまった。

白薔薇姫様、どうやら何かこちらに向かってきています。私は確認に向かうので、その泣き虫な姫をよろしく頼む

わかりました。アセルス様は任せてください。イルドウンも気を付けて

私とて油断はしない。剣の腕は錆びてはおらん

あの3人の中でも、剣はイルドウンが一番でしたからね。頼りに

しています

そうして「宵闇の覇者」は闇に消えた。

現実（後書き）

なるべく設定は守りたいです。

戦狂（前書き）

またもやバトルです。

言葉の雰囲気は怪しいかも・・・

バトル・・・難しいです

戦狂

side シグナム

今回が私達、機動六課の実質的な初任務というわけだ。現在、現場に出ることができるのは、高町、テストロッサ、ヴィータと私しかない。

幸い、現場の確認が主な任務であり実質、私1人というわけだ。

「俺たちのこと忘れないで下さいよ。姉御」

すっかり忘れていたことは気にしないでおう。しかし、こんな無人島に魔力反応とは…何もなければよいのだが。

「ヴァイス陸曹。私が先行して現場の状況確認を行う。連絡があるまで手前で待機だ。」

「了解しました！今、ハッチ開けますぞ」

ゆっくりと開くハッチの先には闇が広がっている。

もう日も暮れたのだろう。

さて…仕事だ！！

「ライトニング02 シグナム出る！！」

闇夜の空に身体を預け、しばらくの自由落下を楽しむ。そして彼女の持つ紫に輝く魔力に包まれた。

「行くぞ！！レヴァンティン」

「J a w o h l」

アームドデバイスであり相棒のレヴァンティンに声をかけ、騎士甲冑を纏う。

まさしく騎士そのものともいえるバリアジャケットを。

彼女は島へと飛翔したのだ。

上空から島を見下ろす。島自体は広くはない、むしろ狭い部類に入るだろう。

さて、どうしたものか…

幸い月は出ているものの視界は良いとはいえない。
島に降りて搜索するしかないのか…。

「苦手だが、この際仕方がない」

そういうと、魔力を込め、方陣を展開する。

広域のエリアサーチを行うわけだが、あくまで何があるのか分るわけではない。

魔力の波を打ち、それにより魔力反応を確認しようというのだ。

これは潜水艦でもピンガーというものがある。

「レヴァンティン」

魔法陣にレヴァンティンを突き刺すと、島を覆うように魔力の波が広がって行く。

水面に波紋が広がるように。するとすぐに反応があった。

「Entdeckung」

どうやら発見したようだ。数は…3か。

状況は把握できた。そうして島に降り立った。

「Gefahr」

唐突に危険が告げられた。

side out

side イルドウン

「あれは機械か？無粋な物だ」

そんなボヤキを吐きながら、彼は飛来する者に向かっていった。

今は夜。闇が支配する夜こそ我らの日常的な場といっても過言ではない。

森の中を颯爽と駆け抜け、視界が開けようとした時だった。彼は急に身体を隠し、気配を殺した。

「なんだ、今のは？」

思わず口に出してしまった。何か感覚のない何かが身体をすり抜けていった感覚に危機感を覚える。

これは…。この世界には魔術のようなものが存在しているのか？
思考を巡らすなかでも、緊張感と警戒は解かない。気配も完全に消している。

「宵闇の覇者」は伊達ではない。

思考に更けていたその刹那…

来たか！！

彼は気付いた。この疑問をもたらした本人である、シグナムの姿に。

もうその場所には居ない。

疾風の如く、彼は駆けた。アセルスなど比ではない。音も立てず、砂地であるうとも、足跡も付かない。

「宵闇の覇者」たる彼は斬りかかったのだ。

妖艶に輝く「妖魔の剣」を手に。

一撃で決めるつもりだった。いや、決まるはずだった。だが眼前の敵である彼女は生きている。

「ほう…あれを止めるとはな、少しはできるようだな」

シグナムはレヴァンティンの警告に瞬時に反応し、攻撃を防いでいた。

彼女の騎士としての経験、そして烈火の将としての力だろう。

「貴様！！いきなり何をする！？」

困惑と怒りに満ちた声だシグナムは問いかける。

「貴様か？不快な魔力を打ち込んだのは？」

「不快とは失礼ではないか？それよりも貴様、いきなり斬りかかるとはどういうことだ」

やはり魔力…魔術があることを彼は確信した。つまりこの世界も少しばかりは似ているところがあるのかもしれない。
ファシナトウルに戻る方法も探さねばなるまい。
思考をまとめると次の質問に答える。

「敵と判断したからには情けなど一切ない。それに不意打ちなど当然だろう」

剣と剣が激しくぶつかり合う。

ギイイイン

お互いの顔と顔が直ぐそばにある。

「くっ…押されているのか」

「どうした、娘。その程度か？」

剣を打ち払うとそのまま斬り払い、彼女の騎士甲冑を切り裂いた。

side out

side シグナム

はつきりとした痛みを感じる。

斬られた胸に手を当てる。生温かく、ぬめつとした感触。

「血か…」

どうやら私を殺す気のようなのだ。あの剣はデバイスなのか分らんが、どうやら殺傷設定であることは間違いない。

ふっ…どうやら本気らしい。

「ふふふ…はっはっは…」

高らかに笑い声をあげる。久しぶりに胸が高まる。

死合だ。死合ができる。

私の心は湧き上がる感情を抑えきれなかった。

「レヴァンティン！！殺傷設定に変更！！カートリッジロード」

「Jawohl」

私はカートリッジを装填した。すぐにロードされ薬莢が排出される。

さあ、存分に楽しもうではないか。死合を！！

「Schlangenform」

「はあああああ」

剣を振るうと鞭の様に剣が伸び、撓る。正しくは連結刃であるが。縦横無尽に軌道を変え、相對する彼へと押し寄せる。

「やるな、その騎士よ。ただの魔術使いではなかったか」

迫りくる連結刃に彼は動いてはいない。

ただ高速で軌道を変えて襲い来る刃を交わし、打ち払う。

「どうした、こんなものか？これでは掠り傷さえつけることはできませんぞ」

胸躍らせるようなことを言ってくれる。このような強者に会えたことに感謝せねばな。

戦闘狂の一面を持つ彼女は今をただ楽しんでいるかのようだ。

「ならば、これでどうだ！！」

連結刃を砂地へぶつけると、砂を巻き上げ、視界を奪った。

「ほう、少しは考えたな」

イルドゥンもまた同じであつた。アセルスの教官を務めるくらいで、自分以上、または同等の剣を扱う者と戦うことがなかった。彼も飢えていたのだ。シグナムみたくな強者を。

「だが視界を奪つた程度では何も変わらん!!」

実際に、シグナムの位置は掴めていた。上級妖魔の彼になら容易いだろう。

だが、彼女とて無策ではなかった。

「Schwertform」

いつのまにか連結刃は元の剣に戻っていた。そして機械的な音と同時にカートリッジが二発分ロードされた。

「はあああ!! 紫電一閃」

シグナムが持つ魔力変換資質 炎

レヴァンティンに烈火の如き炎を纏い、なぎ払った。

両者の剣が再度交錯する。

だが…拮抗することはなかった。魔力が上乘せされた攻撃に流石の彼も耐えることはできなかった。

「ぐはっ…」

口から息を強制的に漏れる。剣で防御したとはいえ、そのまま吹き

飛ばされてしまった。

「はぁ… かはっ」

内臓系にダメージを負ったのだろっ。

口に溜まった血を吐き出す彼の前に、剣は振り下ろされた。

「終わりだ」

ぶしゅやああああ

まるで噴水のような。

彼の首から上がぼとりと砂浜に落ちた。

そして周りには青い血を撒き散らして。

「ふふふ… 勝った！…！ 勝ったぞ！…！…！」

狂気乱舞。まさしく今の私はそうだ。強者との死合に勝ったこの喜び。

何物にも代えがたい至福。

私は久しぶりにむさぼっていた。

「甘いな…狂気に飲まれし騎士よ」

なにが起こったのか。彼の死体が急に消えた。

そして私の首筋に痛みが走る。

「妖魔の剣よ。力を解放せよ。ブラッドスレイ！」

脱力感に襲われる。まるで血を吸われているようだ…

「最後まで油断しないことだな。我の罠に貴様はかかっていたのだから」

いったい何をされたのか見当も付かない。

ただ、この状況はまずい。

血を吸われているのだ。このままでは、意識を…

急に私は自由となった。

「はぁ…はぁ…」

息が整わない…相当吸われたようだ。さらに彼をみると傷が癒されていく。

「悪いが、回復させてもらった。しかし、貴様人間ではないな？」

いきなり核心に触れられ啞然とする。何故分かったのだ？

「貴様の血は人間の血ではなかった。それに魔力を感じる。あと言

っておくが、私は吸血鬼のような類いではないからな」

こちらの考えを見透かされたような答えだった。思考を読む能力を持っているのかもしれない。

「さて、恨みはないが死んでもらおうか。せめて名前でも聞いておいてやる。名前はなんだ？」

「烈火の将がシグナム」

「では、さらばだシグナム」

剣が首を撥ねようとしたその時だ。

イルドウン！！アセルス様が！！

イルドウンの動きが止まった。

私はその隙に距離を取った。

「最後まで油断すると言ったのはそちらではないのか？」

彼に言い放つも見向きもしない。何かあったのか？

「シグナムとかいったな、少々まずいことになった。貴様に協力してもらいたいことがある」

殺されそうになった相手に協力を申し込まれるとは思ってもいなかったのだらう。

彼女は前のめりに倒れそうになっていた。

「なにを急に言い出す。私達は敵同士だぞ」

「だが、そんなことは関係ない事が起きているのだ。人数が足りん。それに貴様の力ならば役に立つ」

上から言われていることに怒りを感じながらも、私は答える。

「そんなこと信じられん」

「早くしないと、この世界が終ってしまうかもしれないぞ？それでもいいのか？」

冷静になれ。私の任務はなんだ…。そうだ。思い出したか？烈火の将 シグナムよ！！！！

「分かった。協力しよう。ただあとで貴様たちを連行する。いいな？」

「好きにするがいい。我らとて知りたいことがあるからな。それよりも行くぞ」

彼は駆けだした。私も飛翔し、追いかける。

「後で再戦だ！！！！次は絶対に勝つ」

くっく… 戦闘狂の騎士め… まあ我も間違いないがな。

「いいだろう。二度と戦いと思えんまで叩きのめしてやろう」

戦闘狂の二人は闇夜に溶け込んでいった。

s
i
d
e

o
u
t

ヴ
ァ
イ
ス

「俺の出番が
o
r
z
」

戦狂（後書き）

・・・orz

次の話もバトルです。
イルドウンがシグナムに勝った方法はまた後ほど。

覚醒（前書き）

今回もバトルです。

六課のみなさんはもう少しで登場です。

覚醒

side アセルス

白薔薇に抱きつき、泣いた。もう30分くらいは泣いていたのだろう。

認めたくない現実を認めなくてはならない。そんな現実と、まだ覚めない悪夢なのではないか。そんな淡い希望に私の心が揺らいでいた。

「いやだよ…こんなの」

「アセルス様…」

イルドウンもどこかへ行ってしまった。私に呆れたのだろう。それに彼は敵だ。

様々な感情に心を揺さぶられ続ける。なんで私が…なんで？

「こ…これは」

白薔薇が驚いている。何かあったのかな？疑問を抱く私にもその答えはやってきた。

「あ、がああ…がああ。。」

びちゃ びちゃびちゃ

声にならない言葉と共に嘔吐している私。

疑問の「答え」が私を抜けた瞬間から私はこうなのだ。

「アセルス様！！大丈夫ですか！？しつかりなさってください」

かなり焦っている白薔薇の声は届いてはいない。代わりに聞こえるのはこの声だ。

「力が欲しいか？半妖の姫よ」

何を言ってるの？ 力？ 一体何の力？ それよりも私はこの運命から逃げ出したいのに。

「力があれば、逃げ出すことだってできる。どうだ姫よ。力は欲しくないか？」

心が揺れた。なんとか理性を保とうと必死だった。でも後は簡単だった。

逃げたい。もういやだ。逃げたい。逃げたい。逃げたい。

そうだ。欲しい。力が。力が。力が。

「力が欲しい！」

「良からう。だが契約の代償は頂く。それは…お前の人間としての寿命を貰う。」

今の私にはそんなことは関係なかった。そう力を欲する私には。そんなこと関係なかった。

「そんな安い代償、貴様にくれてやる。さあ…私と契約だ」

「よかつ、後で後悔しても遅いぞ。ならば呼ぶがいい。我が名を。」

「

我が名は」

幻魔

私は手を伸ばした。紅い光の中に。

そして現れたのだ。

契約した剣… 幻魔が。

side out

side 白薔薇

アセルス様に異変が起きてかなり時間が経ちました。今は少し落ち着いてはいますが、苦しそうです。

今の私には看病することしかできません。アセルス様…

「・・・」

アセルス様が何か呟いたことに気付きました。しかし、私には何を呟いていたのかは聞き取れませんでした。ですが、それは最悪な形となって分かったのです。

「があああ、あああああああ」

咆哮と共にアセルス様の容姿に変化がありました。髪の色は緑から紺碧へと。紅い瞳は紫紺へと。

妖魔化

私は気付きました。アセルス様が妖魔の力を解放したのだと。そしてあの御方の血に目覚めてしまったということも。異変はもう一つありました。アセルス様が持っているあの紅い剣です。

「もしかして…あれは…！」

すぐにイルドゥンに連絡を取っていました。

イルドゥン！アセルス様が、妖魔の力を

何故だ？アセルスは妖魔の力はまだ使えないはずだが

先ほどの魔力が何かがつっかけでしょう。半妖のお体になられてから月日は浅いです。それに魔力とは無縁の生活をされていらっしやたので

魔力に妖魔の力が誘発して目覚めてしまったか。わかったすぐにそちらに戻る

それと、イルドゥン。アセルス様が紅い剣を持ってらっしゃるのですが、もしや…

イルドゥンから緊張感が感じられました。どうやら予想は当たったようです。

白薔薇姫様、もしや幻魔では

やはりそうですか…イルドゥン！そうであれば大変です。アセルス様を止めなければ！！

くっ…急いで戻ります。白薔薇姫様、決して無理はなさらず

なんとか持ちこたえますから。イルドゥンも早くお願いします

そういつて会話を終了した。

私だけでどのくらいもつでしょうか…

正直心配です。

思いを語ると同時。

アセルス様は斬りかかってきたのです。

s i d e o u t

side イルドウン

この世界に終わりをもたらす存在。可能性が目覚めてしまった。
今はただ止めなければならぬ。

「遅いぞ、シグナムとやら。時間は待つてはくれん」「貴様に吸われた血と傷で魔力が乱れているせいだ。それにまだ名前を聞いていない」

そんな彼女に鼻で笑う。なんてくだらない。まあこれも一興だがな。

「イルドウン」

そう告げただけだ。

「イルドウン：わかった。しかしイルドウン。先ほど言っていた世界が終わるということだが、どういう意味だ？」
彼女の問いかけに笑いながらも冷静に答える。

「誰も逆らえなくなる。ただそれだけだ」

どういことだとも言いたそうだが今はそれどころではない。
言葉が現実となってしまう前に。

「この先だ！行くぞ」

そういつて二人は夜の道を抜けるのだった。

「白薔薇姫！！」

間に合ったようだ。なんとか持ちこたえてくれていた。

「イルドウン！来ないかと思いましたよ」

肩で息をする白薔薇姫を見ると、その大変さがよく分る。あの小娘がここまで追い詰めるとは。

「イルドウン？この方は？」

「今、説明する暇はありませんが、名はシグナム。アセルスを止めるために協力を頼みました。現地の出身だそうです」

「シグナム様、よろしくお願いいたします」
深く礼をする白薔薇。

「こちらこそ、よろしく頼む」
なかなか礼儀正しい二人だ。なんて言っている場合ではない。

「シグナムとやら、よく聞け。あいつの眼は見るな。そして気圧されるな。それだけだ」

「眼を見るな？どういうことだ？分かるように説明しろ」

だがその言葉は空しく響くだけだった。

「がああああ」

狂ったように叫び、かつ正確に斬りつけてくる。

その場にいた全員は散開した。

「速い！！イルドゥン以上だ」

シグナムの率直な感想に少し怒りを感じていた。

「あれは、あやつの本来の力ではない。あの剣と血のおかげだ」

正直な感想を言えば、シグナムの言っていることは正しい。今のあれには追いつけん。
なんとか隙を作らねば…

s i d e o u t

s i d e シグナム

眼前で鬼神の如く暴走する少女。
でたらめな強さだとすら感じる。だが、それでこそ戦う意味があるものだ。

「レヴァンティン」

相棒であるレヴァンティンにカートリッジをロードする。

「さあ、来るがいい。烈火の将がシグナム 推してまいる」

連結刃を持って私は仕掛けた。無限の軌道は少女を追い詰めていった。

「はあああ、斬り裂け！！」

連結刃は彼女を絡め捕ったかのように見えた。しかし紺碧の姫は眼前に迫っていた。

「なっ!!」

思わず声が出る。

疾風迅雷

「稲妻突き」は躊躇なく放たれた。

「Schwertform」

「まだだ、はああああ」

眼前の切っ先にレヴァンティンの切っ先を当て、軌道を変えた。

頬に傷を負うが、首から上が飛ぶことが避けられただけマシである。

「なんて速さだ、ぐう…華奢な体のどこにこんな力が」

罅迫り合いのなか、私は失態を犯したのだ。

「馬鹿者!! 眼を見るな!!」

イルドゥンの言葉を忘れていたわけではない。そこまで私が追い詰められていたのだ。

「か、身体が、動かない…」

眼を見た瞬間、身体の自由が奪われてしまった。それが私が彼に負けた原因でもあったのだが。

眼前の少女が高く跳びあがり、落下してくる。紅い剣：幻魔を振り下ろしながら。

動け！！動かなければ…死しか残されていない。

「舐めるな！！！！」

烈帛の気迫と私はレヴァンティンを振り上げる。

ぎいいんん

激しい金属音が静寂を打ち消している。

しかしそれも一瞬だった。

ザシュッ

レヴァンティンが砂に突き刺さる。

何とか防ぐことができたのだが、力で無理やり持つて行かれたのだ。そして今の状態と言えば…ガラ空きだ。

少女の攻撃は終わってはいない。振り下ろされた幻魔が横に払われた。

「天地二段」

負けた。一日に二人に負けたのだ。そう烈火の将は思っていた。
私は死ぬのだな。

私が生きてきた時間などあつという間だった。

「儚き守り手、硝子の盾よ」

生きていた。

何故生きているのか理解できなかった。

そして次に感じたのは頬への痛みだ。

ばちいーん

「騎士よ、貴様の務めはなんだ？そんなに容易く諦めてよいものだったのか？」「まだ負けてはいない。負けとは死だ」

私は立ち上がり、レヴァンティンを引き抜く。

そうだ負けてはいない。まだ生きている。

「くくつく…そうだな、レヴァンティン！」

最後のカートリッジ2発分をロードする。そして炎がレヴァンティンを包んでいく。

そこにイルドウンから作戦が説明される。

「我と白薔薇姫様で陽動をかける。シグナムには幻魔を引き飛ばし

てもらう。アセルスから放れれば、暴走も収まるだろう」

「了解した」

私は颯爽と駆け抜ける。

「ミラーシエイド」

何人ものイルドウンと白薔薇そしてシグナムが現れた。

実際は混乱しているのだろう。近寄るダミーをただ斬っているだけだ。

そして私はたどり着いた。

「私に合わせる!!」

叫びと同時に三人の身体が輝いた。

「はぁああああ!!」「幻夢陽光一閃」「」

恐怖と魔力光によるノックアウト。そして炎を纏った一閃。

「がぁあああ」

まだ幻魔を手放すことはない。だが今はそんなことは心配ではない。

「私の、いや、私達の勝ちだ!!」

振り切った剣は紅き剣を高々と打ち払ったのだ。

s i d e o u t

覚醒（後書き）

設定を少々変えています。

違和感があると思いますが、ご勘弁を orz

連携の描写がむずかしいですが、サガ・フロンティアは連携楽しいですし。

閃きもですが。

皆様、生温かく見てください。

会話

side ヴァイス

「姐さん…大丈夫かな」

1人待機命令を出されているヴァイスは呟く。もうすぐ2時間が経過しようとしている。彼女なら心配することはないと思うが、やはり心配なのだろう。

そんなもの思いに耽るヴァイスに連絡が届いた。

ヴァイス陸曹聞こえるか？こちら、ライトニング02 当初の目的は果たせなかったが、重要参考人3名を拘束中。指定ポイントに降下を頼む

ポイント座標確認！！了解でさあ！！

こうして久しぶりの出番に燃えるヴァイスだった。

side out

side 白薔薇

私は今、アセルス様とイルドゥンと一緒に「機動六課」という場所に向かっています。どうやらイルドゥンとシグナム様の間で何か交渉があったのでしょうか。

膝枕の状態でアセルス様は眠られています。先ほどの戦いで、幻魔をアセルス様から離すことができ、妖魔化を解除することができま

した。髪の色も緑に、瞳も紅に戻りました。
やはりあの方の力は、アセルス様にはまだ強すぎたようです。いまだ目を覚ますことはありません。

「アセルス様…」

私は優しく、髪を撫で、頬に手を重ねました。あの透き通るお顔が…このようになられて…

ぴちゃ…／／／　　ぴちゃ…／／／

愛しいアセルス様

頬に付いていた、血が消えていく…　　白薔薇によって。

優しく、だが妖艶でもある。何か人ではない気配、威圧感。圧倒される。

「アセルス様…本当に…素敵です」

彼女は頬から首筋へと口を動かしていく。途中からだるか、イルドウンから念話がかかる。

人前では遠慮してください。白薔薇姫様

思わず振り向くも、私は頬笑みを浮かべるだけ。
そのまま、アセルス様と唇を重ねた。

s i d e o u t

s i d e シグナム

「なっ…何をしている。貴様!!」

寝ている少女にいきなりキスをするとは…

「シグナム様、どうか御気になさらず」

彼女はそういうとまた、唇を重ねていた。

「くっ…不埒な」

「シグナム。注意はしているんだがな。気にしないでくれ」

彼は私にそんな言葉を投げかけてきた。納得できる訳がない。

「そうだ、イルドウン!!聞きたいことがある。私は何故負けたのだ?」

理由が知りたかった。あのとき確かに首をはね飛ばしたのだ。だが生きていたのだ、彼は。

「簡単な事だ。私があの小娘、アセルスと戦う前にしたアドバイスはなんだった?」「眼を見るな、気圧されるな」

「そうだ、眼を見てしまった。貴様は、私と罅迫り合いになった時に見てしまった。そして私の詠唱した妖術に捕らわれていた」

何故だ！？彼から眼が離せない、それに彼に…好意を…

「ファッシネイション」

「これが貴様の敗因だ。幻覚に誘惑。いつかつたのかもわからない。ただ近い距離で相手の眼を見ねば、効果はないがな」

彼が指を鳴らすと、効果は解除された。気持ちも大丈夫だ、身体も動く。

「こちらの世界にはそんな魔法は存在せぬ。貴様達はどこから来たのだ？」

「アルハザードとでも言っておくか」

私とヴァイス陸曹は声を同時に出す。

「「アルハザードだと！？」」

「くつくつ…冗談だ。教えてもらったものだ、アルハザードという名前は」

「冗談が過ぎるぞ！！！今、三人とも拘束中の身だということは忘れないでほしいな」

「これは失礼。君の主、八神はやたと話がしたいのでな、つい冗談をヴォルケンリッターの将よ」

驚きのあまり声がでない。何故、主はやてを知っている？それにヴォルケンリッターまで！？

「なに不思議がつている？すべては貴様が教えてくれたことだ」

「なっ！？そんなことは…だいたい貴様には何も話してはいないではないか！！」

焦りと怒りで私の思考は混乱している。一体何故だ???

「その答えを教える義理は私にはないのでな…それに着いたぞ。」
機動六課に」

この男：一体何者なのだろうか。私は武芸においても知略でも負けてしまった。

なぜこれほどの機密がこうも簡単に…

ともかく今は任務を全うすることが優先だ。

へりから降りる。あの少女は白薔薇が背負っている。

主はやて、重要参考人3名連行しました

了解や、御苦労さま、シグナム

何か怒りを感じる、なぜだ主よ…

レヴァンティンを殺傷設定で使ったやろ、シグナム？あとでゆっくりお話しようか

なんて一日だ。

がつくり肩を落とし、私は三人を部隊長室へ連行したのだった。

会話（後書き）

シグナムが翻弄されてるなんて。
イルドゥンは恐ろしいです。

ヘリの後ろでは空気が二極化してましたが。

契約と代償そして力

side ???

「やっと目覚めたか…次の段階に移らねばな」

「奴を投入しろ」

「了解しました」

炎を纏った影が映し出された世界に溶け込んでいく。

「さあ…楽しませてほしいものだな」

side out

side はやて

さて、いろいろ聞きたいことがありすぎて困るんやけどな…

私はシグナムが連行してきたこの三人から事情を聴いている。ただ今は二人だ。アセルスと呼ばれる彼女は今、メディカルルームのポッドの中で治療と検査中。

そのため、イルドゥンと白薔薇姫と呼ばれる二人から経緯を聞かせ

てもらっているわけだ。

「なるほどな。つまり黒い霧に飲まれたら、あの砂浜に居たというわけかな？」

「ああ、そういうことだ」

私達が感知していたのはどうやらその黒い霧のようだ。ただ二人はどうやら違う世界から来たように感じる。もしかして、次元を超えてきたのかもしれない。

そんな疑問を解決するために問いを投げかけた。

「そういえば、三人はどこ出身なん？」

この眼前の男からは予想通りの答えが返ってくる。

「この世界、いやこの次元に我らの世界は存在しない。黒い霧に飛ばされたようだ」

やはり…予想通りだ。なら次の疑問は…

「単刀直入に聞くで。二人とも人間か？アセルスって子は人間やろうし、ただ二人は違和感を感じるんや。どこか冷たいというか…」

質問に対して、二人は少々驚いていた。

「ほう、気付いていたか。組織の頭は伊達ではないわけだ。確かに我也白薔薇姫様も人間ではない。妖魔だ」

妖魔。人間ではないその存在をただ認めるしかなかった。彼らの血

は「青」だから。

「それと、アセルスは人間ではない」

「！？どういうことや？彼女はどう見ても人間やろ？」

答えの中、部屋の扉が開く。どうやら検査結果を持ってきてくれたようだ。

「失礼します」

そこには白衣を着たシャルマルが居た。ただどこか慌てている。

「はやてちゃん、これを」

渡された検査結果に目を通してみた。そして…

「なんや…これ…」

あきらかに人の能力を超えている。さらに血液だ。彼女の血は赤でもない。青でもない。「紫」だった。

「紫ってことはつまり、彼女は…」

「その通りです、はやて様。アセルス様は、人間と妖魔の血を持つ半妖なのです。世界に一人しかいない存在なのです」

あかん…話が急すぎて混乱してきた。だいたい妖魔とか半妖とか言われても困るっちゅうね。

「心の声が漏れてますよ。はやて様」

「あつ…、ま…まあとりあえず事情は分かった。なんとか元の世界に戻る方法を探さんとな！とりあえずものは相談なんやけど」

「機動六課の手伝いをしろとでもいうのか？」

「なんで分かったんや？まあそういうこっちゃ！そのほうが色々調べるにしても便利やろうし」

それに今は、完全な人不足。優秀な人材は是が非でも欲しいところだ。

「断る義務はないな。ただ条件がある。我らは我らで行動させてもらう」

「それなら大丈夫や。よし交渉成立やな。よろしく頼むで。あつ、それと私のことは、はやてでいいから」

「わかった。はやて」「分りました。はやて様」

私は今日、新たな人材の確保に成功したのだ。まあ色々面倒事が起きそうなのは気にしないでおこう。

side out

side イルドウン

アセルスは別に手伝うことには反対ではないだろう。だが気になる

ことがある。

「はやて、その検査結果とやらを貸せ」

私は強引にはやてから奪うと、ある項目を探していた。そしてある項目に目が止まる。

「やはり、伝承どおりか…」

「なんやイルドゥンこっちの文字わかるんか？」

「ああ、シグナムに教わったからな」

「シグナムにいつ教わったんや？あんな短時間でか？」

「秘密だ」

話を終わらせ、白薔薇姫に念話を送る。

やはり伝承通りです。アセルスは、多分…

アセルス様…

アセルスが目覚める前に色々と準備はする必要があるな…

「はやてよ、聞きたい事がある。この世界には魔術は存在するのだな？」

「魔術っていうか魔法文化は存在してる。私も使えるしな」

なるほどな。

「武器はどうしている？」

「武器ってというか、デバイスってのがあるんやけどな」

その後、私ははやてから聞けるだけの情報を聞いた。

「あー、喋り疲れた…。そんなとこでええか？」

「問題ない。感謝する」

デバイスにも種類は色々あるのだな。

「はやて、シャリオ・フィニーノの会わせてほしのだが」

「なんやまた急にやな、ってなんでシャーリーまで知ってるんや。まあ今はいいか。ええで、ちょっと待ってな。」

「シャーリーか？はやてや。ちょっと部隊長室まで来てくれんか？うん、了解。すぐ来てな」

そうしてシャーリーがやってきた。

「急ですまんな、シャーリー、ちょっとこの二人が話たいことがあるらしくてな」

「は、はい。（なんか怖いんですが…）」

「あと、はやて。悪い話は聞かないでほしい」

そっいつて私の聴力は謎の力によって封印されてしまった。

頼みは二つ

一つはアセルス用のデバイスの作成。もう一つは…

「本当に言ってるの？そんなことしたらあなたたちが…」

「かまわん、白薔薇姫も納得している。あの小娘は大事な存在だからな」

「…分かりました。協力します。その代わり二人も協力してくださいね？」

「もちろんだ」「もちろんです。シャーリー様」

side out

side アセルス

なんだろう…ここ。なにも見えないや。それに水の中みたい。

「貴様の人間としての寿命を頂く」

いったいなんのことなんだろう…

そうして、深い思考に落ちていく。

「…う…ん」

眼をあげると薔薇が見えた。白い薔薇が…

「白薔薇…」

「アセルス様！やっとお目覚めになられたんですね」
白薔薇はともうれしそうだ。心配かけたようだ。

「ごめんよ、白薔薇。私はいままでどうしていた？」

「アセルス様はこちらの世界に飛ばされてから、一か月眠られておりました」

「そんなに…心配かけたね、白薔薇」

私は白薔薇の頬を撫でほほ笑む。そして軽く唇を重ねた。

…／／／

「アセルス、もういいか？話しておきたいことがある」

いつのまにかイルドウンが居た。やっぱり気付けないな。

「それで話たいことって？」

「この世界の事について、それにお前の武器のことについてだ」

私はイルドウンと白薔薇から事情を聴いた。

「なるほどね、分かった。それとこの世界の種族は？」

「前の貴様と同じ、人間が主だ」

「えっ、イルドウン、何言ってるの？私が人間なわけないでしょ？私は妖魔だよ？忘れたの？」

やはり、伝承通りだった。

半妖にしか扱えない「妖魔」

契約の代償として、人間としての寿命を奪う。しかし命ではない。つまりは人間だった記憶。記憶を奪われてしまった。だから自分が人間とも半妖とも思っていない。そう、人間の記憶がないのだから。

「ああ、すまない。忘れていた」

やはりこうなっていました、白薔薇姫様

伝承を覆すことはできませんでしたが、まだなにか手段はあると思います。それまでアセルス様をお守り致さないと

現在、妖魔には幾多のプロテクトを施している。これ以上、アセルスから人間としてのアセルスを奪わせないために。

「アセルス、これから先ほど渡した、デバイスを用いて戦え。機能は説明したが、自分で実践しろ」

私の手には二丁の銃型デバイスがある。

「リーサルドラグーン？&？」

少々大きい気にはならない。そして待機状態のピラスへと戻した。

「便利だね、そういえばイルドウンと白薔薇にはないの？」

「必要ないだろう。我にも白薔薇姫にも」

「二人は私よりもどうせ強いですよ!!」

そういつて私は部屋を出た。

「我らに戦う力はもはや存在せぬからな…アセルス」「アセルス様…一緒に守り致します」

二人の決意はまだ私は知らない。そして影がここ、機動六課に迫っていた。

s i d e o u t

契約と代償そして力（後書き）

文才の無さが憎い。

いろいろ設定を改変していますが、お許しください。

從騎士

side はやて

なんか色々あり過ぎで、よう分からんわ…。でもとりあえずみんなに報告と紹介はせんとな。

- - 機動六課全局員に連絡 - -

30分後、ロビーで緊急集会を行います。繰り返します連絡します。緊急集会を行います。

「これで、よし」

椅子にかけておいたコートを羽織り、ロビーへと向かう。

「リイン。行こうか!」「はいです!」

そうして部隊長室を後にした。

side out

side アセルス

私は放送があったとおり、ロビーへと集合していた。どうやら、この機動六課に協力することになったらしい。

そんなこんなで、30分が過ぎ、集会が始まる。

「忙しいなか、急に集まってもらつて、みんなごめんな。今回、民間の協力者をとってこちらの三名が力を貸してくれることになりました。それでは自己紹介よろしく」

「アセルスです。よろしく……」 「イルドウンだ」 「白薔薇と申します。皆様よろしく願います」

白薔薇は万人が惚れるであろう笑みを浮かべ、深く礼をする。それを見た、男性局員からは、歓声が沸き起こる。

「「「「「
おおお！……可愛ー……………！」「」

白薔薇は手を振って答えている。なんだろう。…すぐムカムカする。

私は叫ぶ集団を睨んでいた。しかし、力に目覚めたことは知らない。

あの魅惑の君と呼ばれる者の血からに……

「なんだ……身体が動かないぞ！！！！」

騒がしい集団はその場に倒れこんでいる。さらに……その横では顔を紅く染める女性局員が居た。

(彼女に見られると、なんだか…どぎどぎする)

そんな局員の様子を不思議がるアセルスだった。

そんなハプニングもあつたが無事に紹介は終わり、隊長陣と話をしていた。

「よろしくね。三人とも」「よろしく、分からないことがあれば遠慮なく聞いてね」

「高町なのは一等空尉」「フェイト・Ｔ・ハラオウン 執務管」
スターズ分隊、ライトニング分隊の隊長達。なんだろうこの二人…
凄い力を感じる。

それに、綺麗だな…

そのなこと思っている矢先だ。

「どこ見てんだ？スターズ分隊副隊長、ヴィータ三等空尉だ。よろしくな」

ものすごい勢いで握手をされてしまった…。なんか子どもだな。

「ガキ扱いすんなよ！！！」

心を読むとは…やるね。

そんな少し抜けたことを考えていたりする私だった。

「あとは、謹慎中のシグナムやな」

「主、謹慎を解いてくれ！！！！！」

自室謹慎中のシグナムから悲痛の叫びが聞こえる。

「駄目や。殺傷設定を使うなんて冷静さが足りてないでシグナム。」

罰として甘ったるい昼ドラでも見ときや」

「それだけは勘弁……」

あれっ？

そういつて、シグナムに甘々な昼ドラを見せ続ける。この隊長…鬼畜。

そんなはやてから私にこんな話が舞い込んだ。

「あんなアセルス、実はアセルスに訓練を受けて欲しいんよ。アセルスのデバイスとセンスがあれば、どのポジションもこなせるオールラウンダーになれると思うんよ！」

「隊長みんながマンツーマンで指導してあげるから」

なんかすごい条件を出されたが、私も自分の力を磨きたい。だから私は首を縦に振る。

「イルドウンも白薔薇も教えてよ！」

二人はそんな私の声に笑みを浮かべ、答えていた。

ちなみに、私のことはアセルスと呼んでもらうことにした。そのほうが楽だから。

「じゃあ、いきなりで悪いんやけど、色々データを集めたいから、訓練スペースに先に行つていてくれるか？」

「分かりました」

ぎこちない敬語で答える私。なんか苦手だな…

ひとり訓練スペースへと向かう私。その途中途中で周りを見渡す。

（あっちとは全然違うな…）

思考に耽ながらも、訓練スペースに到着した。

「勝手に入っても大丈夫だよね…」

ドアが開き、中に足を踏み入れる。

とくに何かあるわけでもなく、ただ広い空間がある。

「広いけど、なんか殺風景というか…」

- - - C a u t i o n . E m e r g e n c y - - -

急にデバイスから警告が発せられる。

その瞬間、なにか重苦しい空間がこの部屋に充満するのを感じた。

「なに…これ。とにかく出なきゃ…って開かない!？」

どうやらこの空間の影響だろう。とにかく情報が足りない。私は部屋の真ん中へと足を進めた。

「アセルス様」

「うわぁ!？」

急に白薔薇に呼ばれ、思わず尻もちをつく。：恥ずかしい。

「急に声出さないでよ、白薔薇!―それよりも白薔薇はどうやって?」

「これは妖魔にしか作ることができない結界です。機械などに影響は及びませんが、人間はこの結界に関与できません」

「じゃあ出ることもできるの?」「入ることは簡単なのですが、出るとなると、結界を張っている張本人を倒すしかありません」

白薔薇との会話により状況は把握できてきた。つまりは妖魔が犯人であると。

「白薔薇姫様、針の城に御戻り下さい。あの御方に逆らうおつもりですか?」

私は思考を止めた。どうやら現れたようだ。

「そんな、逆らうだなんて、誤解です」

「言い訳は、御帰りになってからにしてくださいましょう」

そんな会話が繰り広げられ、その妖魔は白薔薇を連れて行くところ。

「ダメだ、白薔薇！白薔薇に触れるな！」

我慢できない。汚い手で白薔薇に触るな……！白薔薇は私の…

「邪魔する者は殺して良いと言われております」

その言葉と共に、紅蓮の炎を纏った「炎の従騎士」が姿を現した。

「アセルス様！戦うしかありません。バリアジャケットを！」

「分かってるよ、白薔薇……！説明は聞いているから！」

「Standby ready」「セットアップ」

声と共に真紅のバリアジャケットが展開される。

（これって……あつちで作ってもらった服とそっくりだな）

待機状態のリーサルドラグーンを起動し戦闘体制へと移行する。

「いきなりだけど……やるしかない！」

「白薔薇！援護お願いね」

そういつて間合いを取り始める。

銃型デバイスでありながら複数の形態を備えているこのデバイス。

（きちんと扱えるかな…）

駆けだすと同時に引き金を引く。打ち出されるのは、実弾ではなく、魔力弾である。

ぱぁーん

甲高い音と共に放たれる弾丸。炎を纏う妖魔は簡単に避ける。そして魔力弾は壁に到達する。

そして…壁に亀裂が走る。

（威力強すぎない？これ？）

戸惑いつつも、私は二発打ち込む。がそれも避けると、距離を詰め斬りかかる。

「ヒートスマッシュ」

しまった。一瞬の出来事で回避できていない。ドラグーンで防ごうとしたが間に合いそうもない。

だが…

「儚き守り手、硝子の盾よ」

景色が砕けた。そして崩れた景色は騎士へと飛翔した。

「助かったよ、白薔薇」「私は何も…」

その声は私には聞こえてはいない。

「さて、白薔薇姫様、覚悟を決めてください」

「黙れ！！貴様に白薔薇は連れては行かせない」

「ごさかしい娘だ。黙っていてもらおうか」

騎士を中心に熱風が発生する

「ヒートウェイブ」

熱風をもろに受けてしまった。硝子の盾もこれは防げない。そしてそのまま壁に吹き飛ばされる。

「かはあっ……」

あまりの衝撃に肺から息が強制的に吐き出される。そして紫の血と共に。

ぴちゃ…ぴちゃ…

血が止まらない…どこかやられたかな…

「これでわかったか、小娘！！さあ白薔薇姫、行きましょう」

白薔薇を連れて行くとするあの炎の騎士。そして抵抗しない白薔薇…

何故？白薔薇？抵抗しないの？何故？？？

いやだ…行っちゃいやだ…白薔薇…

「白薔薇を絶対に渡さない！！もう一度言っ！私の白薔薇に触れるな！！！！」

その瞬間、私の容姿は変わっていた。

紫紺の瞳そして…紺碧の髪

そう紺碧の姫としてのある姿に

「セーフティリリース。リーサルドラグーン、モードバスター」

？と？を連結させる。するとロングバレルを展開した長銃へと形態を変えていた。

「貴様は許さない！絶対に！！この世に存在のひとかけらも残さない！！」

「ロードフルカートリッジ」

「Load Cartridge」

二丁分の薬莖、10発が排出される。

砲身には小さい魔力弾頭が形成されている。しかしそこに凝縮され

ている魔力量は半端ではない。

「A f i r i n g l o c k i s c a n c e l e d」

そして引き金を引く。慈悲などない。

「消えろ」

炎を纏う騎士は言葉を発することなく消えていた。
彼が行動を起こすことに合わせて撃ったのだ。

反応射撃

行動を封じるかの如く放たれた弾丸は、体内に留まると同時に爆発。
無慈悲にも消しさった。存在すら簡単に。

ブシュー

大量の魔力を排出し、モードを解除する。
そして、私は息を切らしていた。

「はあ、はあ、」

私は知らないことだが、どうやら妖魔化の反動、そしてバスターモードを使ったことだろうか？

周りを見ると、結界は解除されている。それに…

「白薔薇…よかったあ」

私は白薔薇に駆けよって行く。しかし

ばさっ…

「白薔薇…？」

彼女は…白薔薇は倒れた。

「白薔薇————！！！！！！」

私の声だけが無常にも響きわたる。そしてそれに答えるように、デ
バイスが光るだけであった。

side out

從騎士（後書き）

なんかぐだぐだで申し訳ないです。

口調とか変な感じがするかもですが許してください。

バスターのイメージはストームライダーをもう少し大きくした感じ
です。

誤字、脱字、指摘とつありましたら、よろしく願います。

秘密（前書き）

遅くなりました。

もし、ご覧になられているかたがいらっしゃれば、すみませんでした。

秘密

side なのは

「はあはあはあ…」

書類をまとめている最中にものすごい爆発音と揺れを私のデバイス「レijingグハート」が感知したわけで、こうして訓練スペースへと向かっているところなの。

廊下は走っちゃ駄目だけど、緊急時は仕方ないよね。

「マスター、何を言ってるんですか？」

「あつ…なんでもないよ…。ははは…」

なんてやり取りをしているうちに、現場にたどり着いたわけで…

「にやははは…」

ただ乾いた笑いしかでない。壁とか床とか…亀裂は入ってるし、所々、クレーターみたいなのできてるし…

「一体なにがあつたんだろ？」

状況を把握する為、部屋に入ることにした。幸いドアは無事のようだ。

「マスター、どうやら質量兵器ではありません。汚染物質も確認されませんので、どうやら魔力による物と推測されます」

「分析ありがとう、レイジングハート」

レイジングハートが輝きそれに答えた。それにしても、視界が良くないね。電気系統は完全にいっちゃてるみたいだし。そんななか、私は駆けだした。部屋の隅で倒れている二つの影を私の視線は捉えていた。

「アセルス！！白薔薇姫！！」

倒れている二人に近づき声をかける。しかし二人からは反応がない。

「レイジングハート、二人はどう？」

「大丈夫です。しかし白薔薇姫は少し変です」

「変ってどういうこと」

「それはあとで話します。それより二人の搬送を」

確かにその通りだ。今は二人の手当てが先決みたい。

はやてちゃん、フェイトちゃん、聞こえる？

聞こえてるで、なのはちゃん

こっちも聞こえてるよ、なのは

はやてちゃんは、シャマル先生に連絡お願い、フェイトちゃんは運搬を手伝ってほしいの

了解や、任せとき！！

今、ちょうど向かってるから、待ってて！！

すぐにフェイトちゃんがやってきて二人を医務室まで運んだ。訓練やってたおかげかな。なんなく運べちゃった。

シャル先生はすぐに治療を行った。二人とも消耗が激しかったみたい。

二人は治療用のポッドの中。

ふと、レイジングハートの言葉を思い出し、聞いてみることにした。

「ねえ、レイジングハート。さっき言ってたことなんだけど。変って何が変なの？」

「そのことなんですけど、三人がこちらに来られた時の身体データがあるのですが」

そういつてレイジングハートはデータを展開する。

「なのは、やっぱりこのデータ凄いのよ。アセルスは魔力量は少ないけど、二人はかなりの量を持つてるよ」

フェイトちゃんが感想を述べているなかレイジングハートは続ける。

「では、先ほどスキャンしたデータをご覧ください」

そうして、先ほどのデータを重ねて表示した。示されるデータに私は驚きを隠せなかった。

「これって…どうなってるの…」

「それは、私と彼が説明します」

振り返ると、そこにはイルドウンと、シャーリーが居た。

「レイジングハート、データそのままにしといてね」

「了解しました」

大きめに展開されたデータの前に彼女は立った。

「このデータのことなんだけど…あまり知られたくはなかったの。あまりいいものではないから…」

シャーリーの顔が暗い。まるで後悔しているかのような。そんな感じがする。

「そんなに気にすることなのか？なら私が代わりに説明しよう。君達にある魔力の元、つまりリンカーコアと呼ばれるものか？あれをデバイスに移植しただけだ」

全くついていけない…どういうこと…

私とフェイトちゃんは、ポカーンとしている。さらに説明は続く。

「検査の結果、我ら妖魔はリンカーコアがなくても生きていけることが分かった。まあ貴様らには無理らしいがな。アセルスは半妖ゆえに、魔力が少ない。

だから、妖魔たる我らのリンカーコアをアセルスが持つデバイス「リーサルドラグーン」へと移植したのだ」

なんとか情報を整理できた。つまり、レイジングハートが出していたデータで、イルドウンと白薔薇姫の魔力値がほとんどなかったのは、そのためである。

でも、どうやってそんなことを…

その答えもすぐに解決した。

「この移植の提案を受けた時、もちろん断ったは。できるはずないし、なにより死んでしまうかもしれない。でもこの二人の知識に、蒐集にシャルマル先生的能力があればそれは可能だったの」

「それに、二人のどうしてもってという意志に負けたの」

振り返るとデバイス調整槽にリーサルドラグーンが浮かんでいる。

「だからこの子たちに託したのよ、二人の魔力を」

しかし、シャルリーの顔はまだ暗い。

「シャルリー、まだ何かあるんだよね、多分…リスクを背負ってるんでしょ？」

どこか隠すことを止めたようにシャーリーは答える。

「流石です、なのはさん。実は、デバイスに負荷がかかると、お二人に反映してしまうんです」

「だから、こんなデータが出るわけやな」

いつのまにか、はやてちゃんが居た。…いつの間にいたんだろ？

「さっきの戦闘のデータが回収できたんや。ついでに解析してみたんやけど見てみい、この映像」

そういつて先ほど行われていた戦闘の映像が映し出される。

「このシーンよく見てや、アセルスのデバイスから、薬莖が十発分排出されとる。つまりカートリッジシステムを扱ったことない素人がいきなりこんな量のカートリッジ使こうたら、どないなことになる？」

「慣れないうちにこんなにカートリッジを使うなんて…暴発しちゃうよ…」

「でも、アセルスは魔力量も少ないのに、暴発させんかった。センスはただもんやない。けどセンスでは片付かへん。多分、デバイスに相当な負担がかかってる。さらに暴発させんために、デバイスの…二人の移植した魔力を使って制御したわけや」

「そのとおりです、はやて部隊長。アセルスさんはセーフティを解除してバスターモードを使った。それに、カートリッジ十発使用。その膨大な魔力のコントローलと負荷を、白薔薇姫が受けてしま

ったわけです」

私は、黙って聞いていた。フェイトちゃんも何も言えなかった。

「今回は、白薔薇姫様のコアを移植したドラグーン？をメインに使ったから、白薔薇姫様に反映されているが、？ならば、私もしかりだ」

「そこまでして、彼女のために尽くす必要があるんですか！？」

フェイトちゃん…

彼女は沈黙を破り言葉を発した。自分の身を犠牲にする理由が分からなかった。

「我らは、アセルスを守り、鍛える必要がある。それだけだ」

「そんな理由じゃありません！！」

イルドゥンは何も答えず、ただ頬笑み…長い沈黙を経て答えた。

「アセルスは、我らの世界を変革する可能性のある唯一の存在。それだけだ。だから、アセルスを鍛えるのだ」

そうして彼は部屋から出た。

「納得はまだできないけど、どうやら、みんなアセルスを鍛えるために頑張らないといけないみたいだね」

フェイトちゃんの声にみんなが頷く。今度隊長達で話しくちや。

そんななか、こっそり部屋から抜けようとするはやてがいた。

「どうやら、はやてちゃんは、このこと知ってたみたいだね。」

私は逃げないようにくぎを刺す。

「あっ…ばれてた？」

「そうじゃないと、全ポジションできるように鍛えるなんて言わないでしょ？」

「あ、あははは…」

なんとか笑ってごまかすはやてだが、なのは、フェイトの顔は怖かった…

「はやてちゃん…隠しことはいけないよ…」「そうだよ、はやて…」

「か、堪忍や…二人とも…なっ？」

「駄目だよ」「駄目」

いやや————！！！！！！

二人に、はやては連れて行かれたのだった。

シャーリーから暗さはまだ取れてはいない。語られたことはすべてではないことを知る者は少ない。

まだ、語るべきでない事実を残して。

皆、解散した。

医務室

そこには医療ポッドに浮かぶ、二人の姿が残されているだけだった。

s i d e o u t

連敗中

side アセルス

白薔薇を連れ去ろうとした、炎の従騎士との戦いから3日。私と白薔薇は目覚めなかった。私は自分の弱さに怒りを感じていた。強ければ、白薔薇が傷つくこともない。だから私は強くならなければならない。

今、私は機動六課の隊長達と、マンツーマンの特訓の最中だ。朝、昼、晩。毎日のように、全ポジションの特訓を行った。正直、大変だ。みんな容赦ない攻撃ばかりだし…。実際のところ、魔力量の少ない私にとっては防御に魔力を費やす余裕などなかった。なので隊長陣の中で参考とするのは、フェイト隊長。

選ぶ道は一つ。回避能力の向上である。高機動、そして見切りを駆使すれば、防御面には心配はない。まあ…多少なりと防御の練習はするが。

「はあはあ…なのは隊長、強いなあ…」

そんな感想を漏らす理由としては現在、スターズ分隊隊長の、なのはさんと模擬戦の真っ最中なわけである。私のデバイスの基本形態は銃であるため、度々なのはさんとやっているわけだが…。

「Accel Shooter」

前方に対峙するなのはさんから、アクセルシューターが飛来する。

「しかし、数が無茶苦茶だ…」

飛来する弾は20発。もちろん防御するつもりはない。

「ルナ、ソル！！迎撃いくよ」

ドラグーン？にルナ、？にはソルと呼称を付けている。理由はデバイスのコアの色から月と太陽を連想したからだ。その月と太陽は答える。

「All right, my master」

「はぁぁぁ！！！」

シューターを次々と撃ち落としていく。何度も痛い目にあえば、いやでも覚える。

「やるね、アセルス。じゃあこれならどう？」

急にシューターの速度が上がる。これまでは…やっぱり加減してたんですね。でも、負けたくない。

「Sonic Move」

脚に最低限の魔力を込め、そして動きを見切り、回避する。私は空を飛ぶことは無理だ。でも、飛べなくても負ける理由はない！！！！シューター同士の誤爆、撃墜。そしてついにシューターは無くなった。

「ルナ、ソル。モード変更。モードブレイズ」

「Blaze Mode」

二丁の銃から、名の如き紅き刃が伸びる。

モードブレイズ。近接戦闘特化形態。

紅き双刃を携えた私はそのまま一気に間合いを詰める。

「もらったあああああ！！！！」

「Protection」

刃は届いてはいない。なにか壁のような物で、なのは隊長は守られている。

「アセルス、本当にすごいよ！短期間でここまで出来るようになるなんて！」

なぜか褒められた。うれしいけど、今はそれどころじゃない。気付いてしまった。器用なことに、防御しながらも、魔力をチャージしている。

一度間合いを取るべきか…いや、無理だ。距離はあまり意味がない。遠距離型なら尚更だ。なら…

「ここでシールドを砕くよ」

シールドとの競り合いは休憩。双刃を真つすぐ突きつける。そう、これは双剣でもあり、銃剣でもある。

カートリッジをロードせずに詰まった魔力を弾丸として放つ。小気味良い音と共に、5発の弾丸を発射する。上下左右に打ち込み、そして中央に最後の一発が撃ち込まれることで完成する。

十字砲火

隊長陣最高の防御力を持つシールドは跡形もなく消え去った。だが、それは終焉でもあった。

「まさか、シールドが破られるなんて思わなかったよ。でも、余力は残さないと…後が続かないよ！」

「Starlight Breaker」

隊長最高の砲撃が迫る。ただもう、余力なんてあるわけなく。

「はあはあ…負けたあ」

連敗はいつになったら止まるのか。リベンジを誓い私の意識は刈り取られた。

side out

sideなのは

びっくりした。まさかシールドが破られるなんて。

「お疲れ様、なのは」

「ご苦労だったな、高町」

「フェイトちゃん、シグナムさん、見てたんですか？」

「はやてが見てこいって。それに私達の教導が活きてるかなって気になったのもあるし」

「どうだった、高町。アセルスの戦い方は？」

「だから…なんか二人に似てると思ったよ。」

「回避力に速度、突破力。それに判断力も順調に育ってると思うの。でも、防御面がね」

「なのはも、そう感じる？私も同じ感想なんだけど、ただ私達と話をした結果、防御に魔力は使いたくないって」

「だから、我ら二人が高機動戦闘を教えているわけだ。ただスタミナと魔力のバランスがまだ甘いかな」

そんな話題の中心のアセルスは今、シグナム副隊長に背負われている。

「じゃあ、二人とも、先に医務室に行つて。後で行くから」

「ん、分かったよ、なのは」

「了解だ」

二人の姿が見えなくなると私は膝を付いた。

「最後の一発、貰っちゃったな」

血の味がする…やせ我慢も大変だよ。

「カートリッジのあんな使い方…本当に弾丸だよ…」

そうしてデータをまとめ医務室へと向かった。

「あとで、ばれないように治療しなきゃ…」

s i d e o u t

連敗中（後書き）

そろそろ、StSが始めることができそうです。

しかし、他の作者さんは凄いです。

頑張ります。

準備

アセルスが機動六課に来てから、1ヶ月が経過。最初は戦い方や、魔力の扱いにもかなり慣れたようだ。彼らとの約束もあるが、こちらも組織で動いている以上、アセルスにも、試験を受けてもらう必要がある。囑託扱いだが、上を誤魔化すには、これくらいする必要があるのだ。さて、今日は試験と階級とかの説明をすることとする。

部隊長報告書

side はやて

「急に呼び出して悪いんやけど、アセルスには試験を受けてもらわないかんのや。と、いうわけで、早速試験受けてもらうで!!」

アセルスには悪いが、そろそろ隠しきれそうにないからな。早くこっちに正式な形で所属させな…

「部隊長、話が急でいまいち分からないのですが」

「私の事は、「はやて」でええって。まあ資料を渡すから」

そういつて、数枚の資料をアセルスとイルドゥン、白薔薇姫に渡した。

「はやて、我らは単独で動く条件を付けたはずだが？」

「やっぱ！ってまだ事情を話してないし、そんな怒らんでも…」

「この機動六課は色々問題も山積みなんよ。そこに上には隠してる三人もおるやろ？加えて、1週間後に査察に来るとか言いはじめてな…本当、なんか恨みでもあるんかいなって話なんやけど」

その話は軽く三人に無視されたようだ。私の威厳って…

「この資料を読む限りでは、ある程度自由にするには階級とか軍属といったものが必要になるわけですね？」

白薔薇姫、物分かりが早くて助かります。

「ふーん。それで私は何の試験を受ければいいの？」

「お！その質問待ったで。」

「やっと話が進むで…そういつてモニターにデータを展開する。」

「今回受けてもらうのは、陸戦魔導師Bランクへの昇格試験や。いままでのデータからみると、多分この試験くらいがちょうど思うんよ。ただ戦技のレベルは、遥か上になるんやろうから、色々ハズレを背負ってもらうことになるし、試験が終わるまでは、あくまで他人のふりや」

「どうやら納得はしてくれているが、色々不満がありそうな様子だ。」

「はやて、まずハンデについての説明。それに受験するこの二人は？それに試験を受けるってどこ所属で受けるの？」

色々と感じづきの早いな。見込んだだけのことはあるで。

「魔力のランク的には相応なんやけど、それを上回る戦闘技術をアセルスはもつとるから、怪しまれる可能性もある。だから、今回はソルとルナは使用禁止で！！」

三人がめっちゃ睨んでるんですけど…仕方ないやん…。だからこれ説明するの嫌やったんや。…あそこで、グーを出していれば。

大丈夫か、機動六課。

「ま、まあ決定事項やから。それに同時受験者の二人はフロントタイプにセンタータイプや。だから、センターが被るのもなんやから。今回はサポートメインで！」

「戦闘技術はなるべく使うなということか？はやてよ」

あいかわらず、核心に触れてくるな…

「そういうこつちや。だから、代用品のものを渡すことになってるんやけど…おつ来た来た」

扉が開くと、1人はシャーリーと分かったが、もう一人の初老の男性は面識がないため分からないようだった。イルドゥンを除いては。

「なるほど、時空管理局陸上警備隊第108部隊所属になってしまうことで問題を解決したわけだ」

なんで、イルドゥンはなんでもしつとるんや？ほら、ゲンヤさんもびつくりしとるやん。

「こいつは驚いた。私は君と会うのは初めてのはずだが？」

「常識では測る事ができないことは、常に存在しているものだ」

「そいつは聞いてみてえもんだ」

何故か馬が合いそうなこの二人：危険すぎる。

「まあ、とりあえず、そのなんだ。俺はゲンヤ・ナカジマ。時空管理局陸上警備隊第108部隊の隊長をやつてらあ。よろしく頼む」

「と、いうわけや。アセルスには、第108部隊に所属していて試験後、スカウトされ、機動六課つて予定になつとるから。それと、シャーリー」

シャーリーが私に新しいデバイスと、カードの様なものをくれた。なんだろ？

「これが、バックアップ用に作ったデバイス、通称フォートレス（要塞）。ストレージですが、アセルスさんの防御面や移動に凄く役立つと思います。それと、カードなんですけど、これはイルドゥンさんと白薔薇姫さんから、情報をもらつて作った試作品です。今回、作る事ができたのは、剣と盾だけです。それに一回しか使えません

ので」

説明をうけたあと、せっくなのでセットアップしてみることにした。ちなみに監修には白薔薇も参加したらしい…何故？

答えはすぐに分かった。

「フォートレス、セットアップ」

バリアジャケットの展開が完了し、鏡を見てみた。

「これって、白薔薇？」

いつもの紅いドレスではなく、純白のドレス。そして腕と脚には、純白の小手と具足が装着されている。さすがに薔薇はなかったが。

「はい。私も参加したいのですが、私達はロングアーチでバックアップという形になりましたので、是非と思ひまして。お気に召しませんでしたか？アセルス様」

「ううん。全然。白薔薇、うれしいよ」

そういうなり、私達は唇を重ねる。周囲に人が居ようが関係ないことだ。私は白薔薇に感謝しているだけなのだから。

「ゲンヤさん。日常茶飯事やから」

「あ、ああ」

やっぱり誰が初めて見てもそう思っのが当たり前やな。

「うちの娘二人も、ああだったんだが、やっぱりあれが普通なんかね？」

なんという爆弾発言。ああ、この部隊はどうなるんやろ。だってスカウトする一人って…はあああ。

「試験日は明日や。よろしくな。アセルス」

なぜかサムズアップで返すアセルス。もういやや。

帰って、リンやみんなと…やな。

さて、連絡回しとこか。

s i d e o u t

準備（後書き）

すみません。キャラ壊れてます。百合化は止まりません。
今回は秘術を選びました。理由はカードだからですwwww

いろいろ感じることはあるとおもいますが、許してください。
頑張ります。

次から、StSが始まります。

始動（前書き）

StSが始まります。ただ原作をぶち壊し気味なので、原作の感じが損ないたくない方はご覧にならないほうがよいと思います。

始動

時空管理局陸上警備隊第108部隊所属、アセルス二等陸士。

これが私の仮の所属と階級らしい。なんか、組織っているいろいろ面倒だね。

アセルスの独り言より。

新暦75年の春。ミッドチルダ臨界第8空港近隣。廃棄され佇むだけの都市のビルから新たな物語は始まった。

魔法少女リリカルなのはStrikers 紺碧の姫

やっと始まります。

side アセルス

乾いた風が頬を撫でる。今、私は陸戦魔導師Bランクへの昇格試験を受けるため、スタート地点にいるところだ。私の後ろでは、ボーイッシュな蒼い髪の少女、そしてオレンジの髪が似合う少女が身体をほぐすようにストレッチをしている。

蒼い髪の彼女は、スバル＝ナカジマ。昨日あったゲンヤ隊長の娘さんらしい。そしてオレンジの髪の彼女は、ティアナ＝ランスター二等陸士。スバルとは古い付き合いらしい。

そんなこんなで軽い挨拶をしたのだった。

「私は、アセルス二等陸士。陸士108部隊所属です。よろしく」

なんかぎこちないな。ほんと苦手だよ。試験が終わるまで我慢我慢。

そんなことを思っていたら、見事に二人は食いついた。

「えっ！！お父さん（ゲンヤさん）の部隊なんですか！？知りませんでした」

まあその反応は正しいです。私は偽りなので。

「目立つのは苦手なんです。それよりも、今回の試験スリーマンセル（三人一組）での試験と伺ったのですが、見たところスバルはフロントアタッカー、ティアナはセンターガードに見えますが、相違はありませんね？」

私の言いたいことにティアナは気付いたようだ。鋭いな、この子。

「お互い、初対面ということだし、スキルを確認したいわけね？分かったわ」

そして3分ほどお互いの能力や、タイプの確認を取った。今回は、はやてにも言われたとおり、スバルがフロント、ティアナがセンター、私がフルバックとなる。ただ、強化系はほとんど使えないのに……はやて……覚悟しといてね。

今、ティアナが時間を確認する。そしてブザーがなり、空中にパネルが現れた。挨拶をしているのは……ってリイン空曹長ですか。試験監督やるんだ。。少し笑いを堪えながら、説明を聞くことにした。

「おはようございます。さて！！魔導師試験を受ける受験者3人。揃ってますか？」

リイン……なんか可愛いよ。二人は返事をしそうなので、合わせて返事をする。

「はい!!」

「確認しますね！時空管理局陸士386部隊所属のスバルⅡナカジ
マ二等陸士」

「はい!!」

「ティアナⅡランスター二等陸士」

「はい!!」

「それに時空管理局陸士108部隊所属のアセルス二等陸士で間違
いありませんか？」

「はい!!」

リイン、ちょっと笑ってる…他人の振りつて難しいよね。

「保有している魔導師ランクは陸戦Cランク、本日受験するのは、
陸戦魔導師Bランクへの昇格試験で間違いないですね？」

「はい!!」

「間違いありません」

二人とも、真面目だね。私は苦手だから、ちょっとうらやましいな。

なんで羨ましいの？…なんか忘れてる…そんな気がする。

何か引っかかるが、今はリインの説明を聞かないと。

「本日の試験を担当するのは、わたくし、リインホース？（ツヴァイ）空曹長です。よろしくお願いしますよ」

そつ言いながら敬礼するリイン。

こちらも敬礼で返す。

「よろしくお願いします」

さてと、とにかく無事に終わりますように。

side out

side 隊長達

上空にヘリが一機。そこには、はやてとフェイトが居た。

「この二人が、はやてが見つけてきた二人？…はやて！ナカジマ隊長の娘さんだよね？スバルって」

「そうや、それにティアナって子と付き合いも長くて、相性もいいやろ。それに色々あるしな！この試験の結果で引き抜くつもりやから」

なのはちゃん、判断頼むで。

そのころ、試験会場の準備をなのはが行っていた。

「準備完了。レイジングハート、ありがとう」

「いえ、マスターも大変でしょう」

「ありがとう。監視用のサーチャや障害のオートスフィアもセット完了したし、私達は全体を見てようか」

「Yes・My Master」

side out

side アセルス

さてこちらは、試験の内容の説明中。ここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊。ダメージターゲットもあるらしいので注意が必要らしい。妨害攻撃はもちろんあるらしいので、気を付けつつ、全ターゲット破壊。制限時間内にゴールを目指すとのことだ。

「以上で説明は終わりますが、何か質問はありますですか？」

スバルは何か言いたそうにティアナを見るが、ティアナはスバルを見て「ありません」と答え、スバルも続けた。私もなかったが、今回の試験にはやてから条件をつけてもらった。それは…

ばれなきゃ大丈夫！！

この約束があれば何とかなりそうだ。

「それじゃあ、スタートまで、あと少し。ゴール地点で会いましょう…ですよ」

そういつてモニタのパネルが消えた。やっぱり可愛いな。

そうこうするうちにライトが染まりそして消える。

「さあ、みんな行くよー！！」

こうして思い思いの試験がスタートした。

最初のターゲットがどうやら前方のビルの中にあるらしい。そうこ
うするうちに、二人はビルへと登って行く。おきざりですか？

「アセルス！スバルと先行して叩くから！下のターゲットよろしく」
そういつてスバルはガラスを破り中に入って行く。ティアナの姿も
分かんなくなった。

「二人なら大丈夫だと思うし…準備運動をかねてやりますか」

「フォートレス、セットアップ」

待機状態（指輪）のフォートレスを機動させる。まだ慣れないな、
このバリアジャケット…

「さて、サーチャーもないし。ばれなきや大丈夫だし…」

そういつて、ポイントターゲットを守るスフィアとの距離を一気に
詰める。こちらに気付いたスフィアが砲撃してきたが、すぐにスラ
イディングで回避、そのまま破壊した。すぐさま起き上がると、回
し蹴りと、裏拳のコンビネーションによりたちまちスフィアとポイ
ントターゲットはスクラップとなった。

「派手にやりすぎたかな？」

自分に疑問を投げかけながらも、合流ポイントへと向かった。

「二人とも、大丈夫？」

二人とも大丈夫そうだが、びっくりしている。ああ、バリアジャケットか…

「なにそのジャケット…凄く綺麗…」

「関心してる時じゃないよ、二人とも！」

周りを見てみると、スフィアの残骸がたくさんある。二人とも相性はもちろん、これから伸びそうだな。

「ところで次は真上なはずだけど、どうする？」

ティアナに相談を持ちかける。一人で突破は簡単だけど、二人の前ではフルバックだし、色々秘密にしないと。

「あがったら集中砲火が来る。だからここはオプティックハイドを使つての私とスバルのクロスシフトで瞬殺。いい？」

「了解！！」

そいつって二人の姿が消える。結構便利そう。

「二人のバックアップも大変だよ、ほんとに」

私の姿も消え、違う道で上がった。

パシユン！

天井にティアナのアンカーガンからのアンカーが刺さり、下からあがってくる。それにスフィアは気付き、集中砲火を仕掛けてきた。しかしそこにはアンカーガンしかない。そして掛け声とともに、音が近づく。

5・・・4・・・

スフィアが落ちていく。ローラー音と共に。

3・・・

そして音の正体が姿を表す。スバルだ。スフィアはスバルに気付く。だがスバルは止まらない。そして、カートリッジをロードする。

2・・・

スフィアから砲撃が来る。が、彼女は被弾することなく避け、弾く。

1・・・

そして、おもいつきり踏切、高く跳んだ。同時に魔力スフィアを3発形成したティアナの姿が。

0。時は満ちたようだ。

「クロスファイアー」

「リボルバー」

「シューーーート!!!!」

彼女たちのクロスシフトで、スフィアは殲滅。

できたかに見えた。しかし、忘れてはいけない。今回はスリーマンセル。スフィアの数も多いのだ。少しの安堵が油断となり、二人は気付かない。そして物陰から今まさに砲撃を開始しようとするスフィアが三体が躍り出た。

「ティア！危ない！！」

とっさに気付いたスバルはティアナに声をかける。だが二人ともクロスシフトの影響が少し疲れていた。とっさには回避できない。

しまった。やられる…

「秘められし力を解放せん。祖は力の象徴なり。出でよ」

私は剣のカードに魔力を込め、スフィアに投げた。詠唱が完了すると剣3本がそれぞれスフィアを貫いていた。

「二人とも、油断大敵。だね」

私はオプティックハイドを解除し、二人の前に。試験用だし、出し惜しみは駄目だね。

「助かった。ありがとうアセルス」

「ありがとう。助かったわ」

「二人のバックアップだからね、気にしないで」

礼を言う二人だが、どうやら剣について聞いたそうだ。

「あの剣は、アセルスの？」

やっぱりか。あんまり答えることできないしなあ…そうだと困ったらこう言えればいいって言われたこと思い出した。

「とりあえず、今は時間がないよ。まあはぐらかすのもだから、簡単に言うと、他の人とちょっと違うんだ。だからね」

納得できないかもしれないけど許してね。二人とも。

side out

side 隊長達

「なかなか伸びそうだね。アセルスとはかくこの二人、いい動きしてるよ。」

「そうやる！！フルバックでアセルスも上手いことやってくれとるし、二人とも狙いどおりや」

二人は率直な感想を述べる。そしてこれをモニターで観察していたなののも、どこか嬉しそうだ。

「さて、残すは最終関門だね。大型スフィア。今の二人には難しい相手かもしれないけど。それに今回は…はやて、やっぱりやり過ぎじゃあ…」

とても心配そうなフェイト。一体何が。それは、この御方のせいである。

「大丈夫やて！スリーマンセルなら一体なら余裕やろ。だから今回は…」

悪だくみが好きな部隊長八神はやて。大丈夫か機動六課。

side out

side ティアナ

私は囷に使ったアンカーガンを回収していた。スバルが「ティアナは本番強いな」って言いながら滑っている。

「うつさいわよ。さっさと片付けて次に行く…はっ!？」

スバルの背後に大型のスフィアを確認した。まずい、スバルが…私は駆けだした。

「スバル!! 防御!!」

間一髪砲撃を回避。そのまま両サイドに走り出した。

「くっ!!」

走りながら、一発スフィアに打ち込む。そのとき、床の隙間に足がかかり、捻挫してしまった。

「くっくっ…」

スバルが叫んでるけど、今はそれどころじゃない。身体を回転させ砲撃を回避する。そして壁の隙間からスフィアへの射撃。しかし後で知ったのだが、監視用サーチャーに流れ弾が当たってしまった。た。

サーチャーが壊れたため、なのはが動くこととなった。念の為：バリアジャケットを展開して。

「ティア！」

「騒がないで、なんでもないから」

嘘を付いていることはスバルには分かったようだ。まあ私が見ても嘘だって分かるくらい足首が腫れているんだけど…痛っ

「捻挫してんでしょう？」

「だから何にもないって。くう…」

やっぱり立ち上がれない。結構重症かな…

「ごめん。油断してた。私が油断してなかったら、こんなことには…」

ったくこのスバルはどうしてこうなんだか…

「ほんとに謝ってばかりね。いつもの事でしょ。これくらい平気よ！」

強がってみたけど、これじゃあゴールは無理ね。なんとかスバルとアセルスだけでも…

「ティアナ。あなたも一緒じゃないと、意味ないんですよ。それに、フルバックの役目を果たさないと」

そういつてアセルスは私の足首に手をかざす。見たことのない、法陣が展開される。

「癒しの光よ。スターライトヒール」

暖かい。まるで太陽の光に包まれるような柔らかな光。そして光が引くと、腫れは無くなっていた。

「アセルス…ほんと凄いわね。」

「未熟だから、効果は完全じゃないけど、なんとかやれそう?」

2、3回足首を動かし、確かめる。少し痛みがあるが、我慢できそうだ。

「心配かけて、ごめん。三人で絶対ゴールするわよ!」

「了解!!!!!!」

作戦は説明した通り。スバル、こっちはあんまり長く持たないから、一発で仕留めなさいよ

任せといて。ティア

時間がない…行くわよ。

瓦礫の影に隠れて、私はある魔法を使う。

フェイクシルエット

魔力をかなり使っけど陽動とかには最適なのよね。

スバル頼むわよ

案の定、スフィアはフェイクに反応し、気を取られている。

そして、反対のビルの屋上には、スバルがいた。

「私は、空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃もない。私にできるのは、全力で走る事と、クロスレンジの一発だけ」

でも、決めたんだ。

あの人みたいになるんだって。

負けない。強くなるんだ。

何かを守る自分になるんだって。

決意を言葉とし、拳を振り下ろす。

「ウイングロード!!!!」

拳を床に叩きつけると、魔力光と同じ水色の道がスフィアがあるであろうビルへと到達する。しかしスフィアは気付き、スバルが来るであろう壁に注意を向ける。だが、ティアナのフェイクにより注意は逸らされた。

今よ、行つて!!

s i d e o u t

s i d e スバル

ガシャン

カートリッジをロードした音が鳴り、私は突撃する。

「行iiiiiiiiくぞーーーーー」

ローラーをフル回転させ、ウイングロードを全力で駆ける。そして

壁を壊し内部へと侵入した。

「うおおおお」

スフィアに渾身の右ストレートを繰り出す。しかし、スフィアは防御する。

「おおおおおお！！！！」

私は構う事なく、拳を付きつける。

「くうううう、いいいいやあああああ」

気迫とともに、カートリッジが二発ロードされる。そして、指が防御の中に。そして中から防御を破壊した。しかし、スフィアの反撃にをくらい、後ろに回避する。

そして二発分がロードされ、法陣が展開される。

「これで、決める！！一撃必倒！！！！」

「デイベイン・バスター！！！！」

振りぬかれた拳から、圧縮された砲撃が繰り出される。それは易々とスフィアを破壊したのだった。

s i d e o u t

side アセルス

二人とも凄いな。実力的には、苦しいのに。やっぱり相性抜群だね。ただ、このまま終わらせてくれそうにないんだよね。はやてのことだから。

二人とも、時間ないから急いで

そして、駆けだしていった。

ゴールで待つリインはいつ来るのかと、心配している。時間を再度確認し、再度前方を見ると、三人の姿が見えた。

「来たですね。時間もありますし、大丈夫でしょうです」

しかし、リインは知らなかった。知っていたのは、隊長達だけでリインは知らない。まだ大型スフィアがあることを

「ティア大丈夫？」

スバルはティアを背負って走っている。やはり足は完全ではなかったみたいで、痛みが再発したみたいだ。

とにかく、早くゴールして治療しないと。だがここに最後の罠があった。大型スフィアが背後に現れたのだ。

「やっぱりね。こんなこと思ったよ」

「あわわわ、あれなんですか？」

はやてのやりそうなことは分かってたけど、これは卑怯だよ、はやて。このさい合格のためには、仕方ないか…それに、ラインもパニック起こしてるし。

「二人とも、先に早く。あいつは私が仕留めるから」

「そんな無茶よ、私達でなんとかなったのに」

「今の二人は、満身創痍。はやくゴールすることが先決だよ。大丈夫、絶対に間に合わせるから」

二人をなんとか納得させ先に行かせる。だが、この大型スフィアの様子はおかしかった。

この魔力量は…さっきの奴とは全然違う。しかも、私を狙っていない。

そう、この狂ってしまったスフィアは、二人を狙っている。

二人とも、避けて

二人はどうやら寸前に回避できた。だが、スピードを落とさせるわけにはいかない。

もう一枚を使うしかないみたいだね。ごめんシャーリー。

「秘められし力を解放せん。祖は守りの象徴なり。出でよ」

もう一枚の盾が描かれたカードに魔力を込め、二人に投げる。二人の背後に、盾が出現し、二度目の砲撃を防いだ。

「さて、悪い子にはお仕置きしなきゃ」

壁を蹴り三角飛びの容量で、攻撃箇所を破壊する。そして、背後に回り込み、掌をスフィアに密着させる。純白の小手が淡い光を帯びた。

「終わりだよ！」

短剣

内部に気を送り内部からの破壊。最近の模擬戦で閃いたものだ。

狂ったスフィアは爆散。やれやれと思い時間を確認すると、もう10秒しかない。ゴールをみれば、二人が何故かネットに絡まっている。止まる事考えてなかったのか…

「仕方ないね。私もあの二人と一緒にの罰を受けますか」

Sonic Move

10秒かつちりに私はゴールし、そのままネットへと突っ込んだのだった。

その後、三人そろって、リイン空曹長に怒られたのは言うまでもない。それにスバルとティアにも色々聞かれることとなり、まだ誤魔化す必要があつたため、大変だった。

でも、スバルとなのは隊長との出会いも聞けたし良かったかな。

はやて、覚悟しててね

ちよつ、アセルス、あれは違うつて。あんな強い置くわけないやん

ちよつとほんとおっぱいけど、まああとでお仕置きだね。

でも、そうなら原因は一体…

手がかりになりそうな、スフィアを爆散させてしまった、少し抜けた一面をも見せるアセルスだった。

side out

始動（後書き）

いきなり話に変更が：orz
アセルスが試験を受けるので、これくらいは…

勘弁してください。

実力

たまには、羽目を外したっていいと思いますう。でもやりすぎると、後々こわいですよ。

$3 \times 1 / 3$ って不思議な計算なんだよね。数学ってふしぎだね。

リンとフェイトの全く関係のない何気ない一言より。

side リン

「思ったより怪我はひどくなさそうです」

治療が終わり、なのはさんに報告してるです。どうやらアセルスさんが治療してくれてたみたいで、こうして軽傷ですんだわけです。

アセルスさんも訓練の成果ばっちり出てるです。さてと、アセルスさんも含めて説教はしましたし、帰りますですよ。

「なのはさん、以上で報告おわりです」

「リインもお疲れさま。ちゃんと試験監できてたよ」

やった～です。なのはさんに褒められました。嬉しすぎてその場で回っちゃいますう。

side out

side なのは

嬉しそうに回るリインを見て、なんか疲れも吹き飛んじやった。

「にやははは…とりあえず、みんな今日はお疲れ様。試験の結果はまた後日に私から通達します」

二人とも、これからがほんと楽しみだな…。

試験会場から帰って行く二人を見送り、アセルスと話すことにした。

「アセルス、お疲れ様。どうだった？あの二人？」

「二人ともまだまだ荒いけど、コンビとしては凄く能力高いと思う。それに伸びるよ、かなり！」

やっぱりアセルスも同意見みたい。これから教導楽しみだな。

「データも整理できたし、帰ろっか。あっ！まだアセルスのことは秘密だったね。。。」「

「なのはさん。気を付けてくださいよ。偽るの大変なんです」

「プライベートでは、なのはでいいよ。アセルス」

そういつて額に軽くKissを落とす。あつ、慌ててる。なんか新鮮だな…慌ててるアセルス。いつも白薔薇姫といちゃいちゃしてるのに。

「なのは…／＼／＼私には白薔薇が…」

む…なんか妬けちゃうな。私にはフェイトちゃんがいるけど、アセルスにもなんか魅力的なものあるし…

「なのはさん！！アセルスさん！！惚気てる場合じゃありません！！もう。。。先に帰りますですよ？」

リン…ごめん。心の中では必死に謝る私でした。

side out

side スバル

「なのはさん、覚えてくれてたんだ。それに、なのはさんに憧れてここまで来たってことも言えた！」

テンションMAXな私。ティアが絶賛溜め息、呆れてる。ひどいよ、

ティア〜。

「うつさい、スバル。とにかく、最後の暴走の減点痛すぎよ!! もう…落ちたらどうすんのよ!!」

ティアが足を捻挫しなかったら、こんなことには。。。なんて言えない。絶対。

「きつと。。。大丈夫。。。だよ…はああ」

溜め息が移っちゃった…気にしてても仕方ないよね。うん、帰ろう。結構大変だったし、早く帰ろう。止めていた足を繰り出したそのときだった。

ここに居たか。覚悟!!

どこからか、声が聞こえた。そして後ろを振り返ると同時に、三人の居た場所に、結界が展開されていた。

side out

side はやて

試験の内容について、フェイトちゃんと会話してる最中やった。訓練スペースにできたあの結界がまた現れたんや。

「フェイトちゃん！あれって、訓練スペースのときの結界とちやうか？」

「たぶん、そうだと思う。でも、なんでここに？」

なんで、こんなところに結界が…こんなところ狙っても仕方ないやろし…。いや、アセルス？多分そうだ。アセルスを狙ってる。

「こちら、ロングアーチ00。ロングアーチ、聞こえる？」

「はやてか。どうやらそちらに、従騎士が来たようだな」

従騎士？もしかしてあの結界の正体！？

「我らの元いた世界から、アセルスを倒し、白薔薇様を連れ戻そうとする騎士たちだ。このまえば炎の従騎士だったはずだ」

詳しい話を聞いてなかったから分かんかったけど、こういうことやったんか。なるほど。

「その結界に関与できるのは、妖魔だけだ。中には誰が？」

「多分、アセルスとなのはちゃんとラインの中に」

モニター越しにイルドウンと白薔薇姫が笑ってる。笑いごつちゃんい。

「心配しないでください、はやて様。アセルス様には十分教育しておりますので。それにフェイト様も安心しています」

横を見ると確かに心配してなさそうな、フェイトちゃんが。

「はやて、大丈夫だよ。あの三人なら、そうそう負けやしないよ。オールラウンダーに最強のセンター、そして、はやての大事な家族だって一緒だからね！」

たしかに。心配すぎやったな。連絡はとれへんけど、きっと、大丈夫や。

「三人とも、無事に帰ってきてや」

s i d e o u t

s i d e アセルス

この感じは、前にも経験した。あるときだ。白薔薇を連れていこうとした。あいつの時と一緒にだ。また白薔薇を狙ってるの…？嫌だ。絶対に白薔薇は渡さない。

感情がいやでも高ぶる。駄目！抑えないと。

少し深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。よし、大丈夫だ。

「アセルス、これって…映像で見たのと同じ？」

「多分そうです。奴らは白薔薇を狙って…」

「いや、今回はお前の命を頂く

「!!!!????なんですか〜今の声は〜」

ラインが慌てるの同時に、声の主が現れた。

「我は、水の従騎士。お前の命、貰い受ける！」

「簡単にそうですかってやられるわけにはいかないよ!!!なのは、ライン、力を貸して!!!」

「もちろん!!!こんなところで死ぬわけにはいかないよ!!!」

「私ですよ!!!」

視線で合図し、三人はバリアジャケットを装着する。

ソルとルナは今は手元がない。今はフォートレスでやるしかない。

なのは、リイン。設定は殺傷に変更。殺るしかないよ

二人とも、戸惑ってる。多分二人の正義なんだろうな。

ごめん、二人とも。私が止めを刺すから、二人は動きを止めて！
！

ごめん、アセルス。こっちは任せて

アセルスさん、お願いしますです

そうして、フォートレスの設定を殺傷に変更する。貴様は塵一つこの世には残さないからね。

「さあ、いくですよ」

古代ベルカ式の法陣を展開するリインは自らも一部ともいえるストレージデバイス「蒼天の書」を開き、相対する。

「フリジットダガー」

リインの眼前に30本以上の水色の短剣が現れる。そしてそれらは、従騎士へと飛翔した。

「小癪な！！！」

従騎士は盾と剣を使い、飛来する短剣を次々に撃ち落としていく。

だが、盾に刺さった短剣の周りは短剣の名の如く凍結している。

その攻防から少し距離を置いて、なのはは機会をうかがっていた。

「アクセルシューター、ワンショットで精密射撃。いくよ!!」

「Acceler Shooter」

普段より大きいアクセルシューターが打ち出される。放たれた弾丸は寸分の狂いもなく、盾に刺さった短剣を捉えた。そして、その衝撃に耐えることのできない盾は無残にも砕け散った。

「おのれえええ!!!」

まさか人間如きにここまでされるとは思わなかったのだろう。怒声と共に、なのはに突っ込んでいく。だが…

「油断しすぎだよ」

なのはに向かって走る、従騎士の前に宙返りで割りこみ、そのまま角にかかと落とし。あびせ蹴りでそのまま角を折ってやった。怒りすぎると逆に冷静になるのだから？水の従騎士たる敵は水を使った。

「水が、やつの周りに…一体なにを」

何もなかった地面から突如、水が湧き出し、従騎士の周りに円状の水溜まりが形成された。

「ここまでコケにされたのは、はじめてだぞ、人間ども!!!!!!楽

には殺さんからな……！」

剣を振り上げると、水溜りから、水球が形成される。そして無数の水球が襲ってきた。

水撃

狙いはもちろん、リインだった。だが、考えが単調すぎたようだ。アセルス、そしてなのにも読まれていた。

「リイン、私の後ろに。なのは……リイン……！任せろよ……！」

気を練り、魔力と混ぜ、障壁を展開する。

プロテクション

魔力が足りない分、気功で補うことにより、強度や、凡庸性が増した。だがフォートレスを使っている場合しか、この強度は無理だが。なんとか水撃を防ぐことはできている。だが、水の従騎士は伊達ではなく、プロテクションにもヒビが見える。

二人とも……早く……

結界面ギリギリの上空。

薬莢が二発分排出される。

「チャージ完了！レイジングハート、デイベインバスターいくよ！」

「Divine Buster」

魔力が凝縮される。そう高町なのはが得意とするこの砲撃。

「デイベインバスターー」

プロテクションが破られると同時に、桃色の巨大な魔力が従騎士を飲み込んでいく。流石に不意を突かれ、直撃の為、非殺傷とはいえ、意識を刈り取る寸前までおいこんだ。

「逃がしません！！捕らえよ、凍てつく足枷！フリーレンフェッセルン」

そう、水の従騎士は最大のミスを犯した。リインの凍結魔法は周囲に水があれば、発生速度は上昇し、強度も増す。水さえなければ、まだなんとかなっていただろうが、一瞬にして、氷檻に固定された。

「ぬうう、何たる失態」

「へえ、まだ喋れるんだ。でも、言ったよね。塵も残さないって。」

身体の中を電流が駆け抜ける。イメージが湧き上がる。私は魔力の変換資質があるらしい。だからこのイメージが成り立つのだ。

これでとどめだよ。

右の小手が紅く燃え上がる。

「知ってる？冷めたものを急激に温めると、壊れやすくなるんだよね。だから、試してみようか。もちろん、貴様でな」

脱兎のごとく駆け、正面に対峙、そして、その加速を利用した、正拳突きを放った。炎を纏った一撃は、氷の中の騎士を捉えた瞬間、爆炎を放ち、碎き飛ばした。

金剛神掌

「まだ、生きてるなんて、さすが妖魔」

私は、残った騎士の頭を足で踏みつけている。

「貴様如きに…だが忘れるな…次の騎士が貴様等を…」

他の部分が消滅していく。そして、残るは頭だ。

「では、言っておこう」

私は、二人を見て頷く。そして…

「…私達は負けない（ですう）！！！！」

そうして、頭を踏みつぶした。

騎士が完全に消滅したようだ。結界が解かれた。

「アセルスって、この時は、凄く恐いんだね…」

「なのはさん…リインも怖かったです…」

そこには青く染まった純白のドレスに身を包むアセルスがただ、笑っていた。

side out

side フェイト

結界が発生してから、私とはやては、結界近くで待機していた。すると、後ろから、スバルとティアナが来たようだ。

「スバル」ナカジマ二等陸士とティアナ「ランスター」二等陸士だね。フェイト「T」ハラOWN執務管です。今は危険なので、二人とも下がってて」

「せや、危ないし、怪我しとるやろ。ここは任せといてや!!」

二人ともびつくりしてる。どうしたのかな？

「フェイト執務管!!、それに、八神はやて二等陸佐!!何故お二人がここに？」

ティアナが慌てて尋ねる。そんなに緊張しなくてもいいのに。

「試験を見せてもらってたの。そしたら、急にこんなことになっち

やって」

経緯を説明していると、急に結界が解除され、そこには青に染まり、笑うアセルスと少し困っている、なのはとリインがいた。

「なのは、リイン、アセルス、無事だった？」

なのはの元へと駆けよる。どうやら無事みたいだ。思わず抱きついてしまった。

「無事でよかった…／＼／＼」

「フェイトちゃん…ごめんね。心配かけて」

リインもはやてのところに飛んでいった。やっぱり怖かったのだろうか？再びアセルスに視線をやると、バリアジャケットが解除されると同時に倒れた。

「アセルス！！！」

なのはが駆け寄り、支える。

「今の戦闘で魔力を使いきったみたい。とりあえず、検査だけでもしないと」

結界中で一体何があったのだろうか。今は、治療と休憩が必要そうだ。

「スバルにティアナ。試験結果は三日後に伝えるから。アセルスのために時間頂戴ね」

なのはがそう言うと、二人は敬礼して答える。

「了解しました」

「じゃあ二人とも、私達は、アセルスを病院に連れていくから、気を付けて帰ってね」

そういつてアセルスをヘリに寄せ、飛び立った。もちろん病院ではなく、機動六課にだが。

「私達つて乗せてくれないんだね、ティア」

「我慢なさい、スバル」

残された二人、寂しく帰るのだった。

s i d e o u t

実力（後書き）

またしても、ブレイクorz

訓練が成果か、従騎士を簡単にやっちゃいましたwww

いろいろありますが、ご了承ください。

勧誘（前書き）

大変遅くなりました・・・
しばらく書き貯めが続きそう・・・です。

勧誘

今という一瞬の為に、全力の努力をぶつけることができる才能は高く評価するべきである。

シグナムのありがたい呟きより。

side 白薔薇

アセルス様が従騎士との戦いで倒れたと聞いてから、医務室でアセルス様に付き添っています。幸い、魔力の使いすぎと、疲労とのことでした。デバイスからの補助がなくてもここまで戦えるようになり本当に嬉しく思います。

「アセルス様：／／お強くなりましたね」

優しく頬を撫でkissを落とし、そしてその美しい寝顔をただ見つめていました。

side out

side ティアナ

現在、私とスバルは、試験の結果を聞くために、機動六課のオフィスに居る。ここでびっくりしたんだけど、私達を機動六課のFWとしてスカウトしたいと、はやて二等陸佐から話があったの。私達が

…。

「ええと…取り込み中かな？」

高町なのは一等空尉。どうやら試験の結果を持ってきたようだ。

「二人とも技術はほぼ問題なし。でも危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを超えています。自分やパートナーの安全だとか、試験のルールを守れない魔導師が、人を守るなんてできないよね？だから残念ながら二人とも不合格」

やっぱり…不合格。落ち込む私の考えはすぐに吹き飛ぶ。

「なんだけど、二人の魔力値や能力を考えると、次の試験まで半年間もCランク扱いにしておくのはかえって危ないかも。というのが私と試験監の共通見解」

「ですう」

つまり…どういうことなのかしら？そこに手紙のようなものが二人分手渡される。

「はい、これ、特別講習に参加するための申請用紙と推薦状ね。これをもって本局武装隊で三日間の特別講習を受ければ、四日目に再試験を受けられるから」

えっ！？えええ！？

「来週から、本局の厳しい先輩たちにもしっかりもまれて、安全とルールをよく学んでこよう！そうしたらBランクなんてきつと楽勝だ

よ。ねっ！！はやて二等陸佐？」

つまり…まだチャンスはあるんだ。

「あ、ありがとうございます！！」

でも…なんか…はやて二等陸佐が…冷や汗だらだらなんですけど…

「まああ、二人とも試験に集中したいやろうから、この話の返答は試験後でかまへんよ！じゃ、後はよろしく」

あつ、逃げた。よっぽど怖いんだろうな。そういえばアセルスはどうなったんだろ？

「高町一尉、「なのはでいいよ、ティアナ」では、なのはさん、アセルスは怎么样了ですか？」

ここにアセルスは来ていない。まだ回復していないのか？しかし答えはただただ驚愕するものだった。

s i d e o u t

s i d e なのは

アセルスのことは、はやてちゃんや、イルドウンさん、白薔薇姫さんと話して、もうばらしてもいいことになっていた。二人とも、機動六課には来るだろうし。

「実は、アセルスのことなんだけど…まだ詳しくはちゃんと離せないんだけど、アセルスは陸士108部隊所属でもないし、二等陸士でもないんだ」

やっぱり二人とも固まってる。スバルはまだ内容が掴めてないみたい。でもティアナは気付いているみたい。

「なのはさん、つまりはどういうことですか？」

この際だしちゃんと言っとかないとね。

「アセルスは機動六課所属で本来の階級は准陸尉。それに魔導師ランクはBランク相当だけど、戦技はAAAに近いものがあるの。総合ではAAに近いと思うよ」

また固まっちゃった。今回の試験は上層部に怪しまれないようにするためだったから仕方なかったし、スカウトする予定の二人を見てもらいたかった。

「これも深く話せないんだけど、そういうことなの」

はやてちゃん…私に押し付けるなんて酷いよ。そこにスバルが呟く。

「だから、一人で簡単にあのスフィアを壊せたんだ…」

「今回の試験は特別だったからね。でも、二人とも！問題点も多かったからしつかり、本局で勉強してきてね。話はまたそれからね！」

二人して頭を深く垂れるのだった。

s i d e o u t

s i d e スバル

中庭の芝生に思わず寝ころぶ。試験のこと、新部隊のこと、アセルスのこと。色々あり過ぎて頭いっぱいだよ。

「ティア。ティアは新部隊、どうする？」

「遺失物管理部なんてエリート部署じゃない？そんな中で、ちゃんと働けるのかしら……」

またティアの悪い癖がでた。もう……しょうがないなあ……

チュツ……／／／

ティアが赤くなってる……効果てきめん！！

「なな……何してんの馬鹿！！！」

「ティアならできるよ！！絶対に。それに執務官になるにもこっちのほうが近いよ！」

少し元気でできたかな？私達はまだ二人で一人前だから。いつか一人で一人前になる日まで。

「ティア！頑張ろう！！」

頬笑みながら、ティアにハイタッチを求める。それにティアも答え、そこに決意と共に、乾いた音が響いた。

side out

side シグナム

私は、テストロッサが面倒を見る二人のフォワード候補の二人を迎えに来ている。紅色が映える少年「エリオ」モンディアル三等陸士」竜使い「キャロル」ルシエ三等陸士」。

ただ色々あってな。エリオ…隅におけん奴だ。

さて、二人とも自己紹介は済んでいる様だな。

「二人とも、そろそろ行くぞ！隊舎に案内する」

まだあどけない二人は揃って敬礼を返す。

「はい！！」

side out

side シヤマル

市街地に結界が展開されている。今、ガジェットの掃討中である。

ヴィータちゃん、ザフィーラ、追い込んだ。ガジェット？型、そ
うちに三体

ガジェットが三体、細い路地を逃けている。しかし、その前方には、
ザフィーラが立ちふさがる。

「ておおおおおおわああああ」

気迫を込めた叫びと共に地面から白銀の軀が飛び出し、ガジェット
を一体貫き、破壊した。爆発と同時に起きた土煙を抜け、残りの二
体が依然逃亡する。

しかし逃がすわけがない。赤き騎士が渾身の一振りと共に急降下し
てきたのだ。

「でええええいいいい！！！！！！」

振り下ろされた鎚はガジェットの側面に振り下ろし、壁へと吹き飛
ばした。もちろんガジェットが耐えることなく、爆散した。

残るは後一体。その一体はザフィーラの頭上を通過し逃亡する。し
かし、追撃の準備は完了している。

「アイゼン！！！！」

「Schwalbefliegen」

ヴィータが魔力球を一個生成する。そして、グラーフアイゼンで勢いよく打ち出せばそのままガジェットを捉え、そして爆発した。

「片付いたか」

「シャマル残りは？」

広域にサーチをかけ反応を確認する。

「残存反応無し。全部潰したわ」

反応を確認し、二人と合流する。今日はこれで終わりそうね。

「最近、出現の頻度が増えてきているな。それに、最近色々と妙だ」

「ああ、だんだん賢くなってきた。それに影で何かこそこそしている連中がいそうだ」

二人とも気付いているみたいね。センサーに掛からないギリギリから観察している何かもいたようだ。

「まだ私達で何とかできるけれど、そろそろきつくなってきたわね」

「ひよっこ達には任せてらんねー。まだ私達でなんとかしねーと」

「そうだな、それに我らだけでは手が足らん」

三人は同時に頷く。

「そのための新部隊。はやての…いや、私達の新部隊」

こうして機動六課という大きなピースが、できあがろうとしていた。

s i d e o u t

異変

私って、最近病院送り多くないですか…作者（…）

アセルスの小言より

気のせいだと思いますよwww

side アセルス

「ううん…」

ぼやけた意識が少しずつこちらの世界に引き戻される。最近の中では意識失った時間が一番長かったのではないか？それだけ私の心身は極度の疲労を受けていた。

「ここは…そっか。また疲れて倒れちゃったんだ…スタミナ無いな、ほんと」

ようやくはつきりしてきた視界の中、ベッドから起き上がった。幸い疲れは抜けているようだ。

そんなとき、タイミングを見透かしたように、はやてにもらった携帯端末に連絡が入る。イルドウンからみたいだ。

ロビーで挨拶があるから出席しろとのことだ。。。。そういえばあの二人にもあれ以来会ってないしね。

少し身体を伸ばして、自分の部屋に戻りシャワーを浴びる。ずっと寝てたのに、汚れてないな。白薔薇：／／／ 感謝しなきゃ。

シャワールームから出て、タオル一枚で鏡の前に立つ。絹のような身体には無数の痣、傷が目立つ。それだけ彼女が過ごしている時間は濃密なのだ。

「さてと、そろそろ行かなきゃ」

しかし肝心なことを忘れていた。そう制服が無いのだ。さすがにバリアジャケットでロビーに行くには少し気が引ける…

それも部屋に戻れば取り越し苦労に終わることとなった。

「白薔薇：／／／」

部屋には機動六課の制服が掛けられていた。私の事をほんとに分かってきている…

「ありがとう…白薔薇」

素早く制服に着替えれば、鏡の前で身だしなみを整える。うん、似合ってる。

「さあ、行こうか！」

s i d e o u t

s i d e はやて

部隊長オフィス

真新しい机を指で二度なぞる。ついにこの日がやってきたのだから。隣でリインも喜んでいようだ。

「この部屋もようやく隊長室らしくなっただですね」

「そうやね、リインのデスクもちょうどのがあって良かったな」

「えへへ、リインにぴったりです」

リインも嬉しそうだな…おっ、誰か来たようや。

「失礼します」

「あつ！お着替え終了やな 二人とも似合ってるよ」

機動六課の制服に着替えた、なのはちゃんとフェイトちゃん。うん、とっても似合ってる。

「三人で同じ制服なんて中学校くらいだね。なんや懐かしいなあ…。まあ、なのはちゃんは飛んだり跳ねたりが楽な教導隊の制服のほうが多くなるかもしれんけど」

それになのはも笑って返す。

「まあ、事務仕事とか、公式の場はこっち。ねっ…」

三人で少し笑う。あの約束がついに実現したのだから。

「なのは、そろそろ…」

フェイトがなのはの切り出す。仕事上必要なことは例えこの三人の仲であっても疎かにしてはいけない。

まず敬礼したなのはが答える。

「本日、只今より高町なのはは一等空尉」

それにフェイトも続く。

「フェイト・T・ハラOWN執務管」

「両名とも機動六課に出向となります。どうぞよろしく願います」

私もこれに敬礼で返す。

「はい、よろしくお願いしますう」

少しの間ができ、そしてまた笑みがこぼれる。やはりこの三人の仲は素晴らしいものだ。

「ブーーーー」

そうこうしているうちに、ブザーが鳴る。どうやら来客者が来たようだ。

「どうぞ」

ドアが開くとそこには、成長した懐かしい青年の姿があった。

「失礼します。あつ、高町一等空尉、テストロッサ・ハラウン執務管。御無沙汰しています」

礼儀よく敬礼し、蒼髪の青年は挨拶をする。ただ、二人とも少し困惑していた。が、二人とも気付いたようだ。

「ええつと、」「もしかして、グリフィス君？」

よかった、覚えていてくれていたみたいだ。

「はい、グリフィス・ローランです」

しかし、彼の前の二人は大はしゃぎしている。

「うわわ…凄い！凄いよグリフィス君！！すごい成長してる！！」

「前見た時は、もっとちっちゃかったのに」

「二人とも。。。昔の話は・・・／／／」

「その節はお世話になりました。今はこの部隊の副官を務めています」

「そうや、アセルスがこつちの世界に来た時にも、グリフィス君はかなり頑張ってくれたんや」

ほんと、優秀な人材や。

「母も元気でやっています。それと、報告よろしいでしょうか。新規のフォワード4名、それに機動六課のスタッフ、それとアセルスさんも揃いました。現在、ロビーに集合しています」

「そうかあ、早かったな。それにアセルスも復調してなによりやな。それじゃあ、なのはちゃん、フェイトちゃん。みんなに御挨拶や！！」

「うん！！」

side out

side アセルス

ロビーでは、はやてやみんなの挨拶が行われている。ただ病み上がりな私には、ただただ辛い訳で…あつ、次は私の番かな。

「アセルス准陸尉です。階級とか関係なく接してください。」

簡単な挨拶で話を終わる。実のところを言えば、体調がいまいちなのですぐに切り上げることとなった。

挨拶が終わり、解散となった後、シグナムとフェイトと一緒に歩いていた。どうやらこの二人は色々あったみたい。そんな妄想している私に、二人は気付いたようだ。

「アセルス！！もう大丈夫なの？みんな心配してたよ。」

「そうだアセルス、もう身体はいいのか？」

二人とも…心配してくれてたんだ。…ありがとう。

「もう大丈夫。二人とも、ありがとう」

少し照れながらも二人に頬笑みかける。ただ二人は少し赤面していたけど。

「まだまだ、二人みたいにはいかないな。二人とも、また教導お願いね」

強くならなきゃいけないから。守るため、勝つためには・・・そんな思いに耽っていると、二人に手を握られていた。

「喜んで！！！」

二人とも…ちょっと怖いよ…

そんなこんなで、時間を潰していると、フェイトがあること思いました。

「アセルス、実はフォワードの4名が模擬戦を行ってるんだ。それでね、アセルスにも模擬戦に参加しておいてほしいんだ。」

「模擬戦って…隊長達といつもやってるやつ？」

「それもあるけど…アセルスも聞いたことあるでしょ？」「ガジェット・ドローン」。私達はこれとも戦わないといけないの」

ガジェット・ドローン 話は聞いているけど、実際にまだ戦ったことはない。経験を得るためにも戦っておくべきだろう。

「わかった。で、どこで模擬戦やってるの？訓練スペースはまだ…壊したままだし…」

壊した本人は全く気にしない。

「それなら大丈夫！さあ、案内するから！行くよアセルス。リハビ

りついでに、身体動かそう」

二人に引っ張られながら、私は外に連れ出された。

〃〃移動〃〃

隊舎の外に移動し、しばらく歩くと眼前には、荒廃したビル群が立っていた。しかし、以前ここはただの人工の土地だったはずだ。

いつのまにこんなものができたんだろう…

ビル群を眺めながら歩いていると、そこにデータを整理しているシャーリーが居た。

「あつ、アセルス！もう身体は大丈夫？なのはさんも心配してましたよ」

コンソールを操作しながら、シャーリーは淡々と話している。どうやら原因はデータを取っている為の様だ。

「シャーリー、なんのデータ取ってるの？」

何気ない疑問だが、これがフェイトがここに連れてきた理由である。

「いま、フォワード4人のデバイスのデータを取っているんです。

みんな良く走りますからね。みんないい子に仕上がりますよ」

なるほど…だからシャーリーが楽しそうなんだ。そういや、私もこの模擬戦に混ざらないと…

「シャーリー、私のデバイスのデータを取っておいて。最近、ルナとソルを使ってなかったから、調整を兼ねてお願いしたいんだけど」

「言われなくてもそのつもりでしたよ、アセルス。妖魔とのデータはありますが、ガジェットのデータはまだありませんから。ドラグーンもしっかり調整しますよ…!!」

頼むよ…シャーリー。さて、私も訓練に混ざろうかな。

「アセルス、頑張ってね！無茶はしちゃだめだよ」「アセルス、無理はするな」

やはり、少し心配なのだろう。大丈夫だよ…二人とも。

待機形態のルナ、ソルに触れる。それに答えるように、二機は光る。^{ピアス}久しぶりに使う相棒達だけど…きっと大丈夫!!

「Standby ready」「セットアップ」

待機中のピアスが銃形態へと変化する。同時に紅きバリアジャケットが展開される。

魔方阵が消えるとそこには、紅き姫が舞い降りた。

「ふう… やっぱりこれがじっくりくるかな？さてと、みんなに混ぜられないと」

[S o n i c m o v e]

一瞬にして、私は模擬戦が行われている、ビル群へと駆けて行った。

s i d e o u t

紅姫

side エリオ

第一回模擬戦

逃走するターゲット8体の撃墜、または捕獲。これが今回のミッション。スターズの二人や、キャロに迷惑をかけないように頑張らないと。

「それじゃあ、第一回模擬戦、元気に行こうか！！ミッションスタート」

なのは隊長の合図と同時にターゲットが逃走を開始する。今回のターゲットは、接近すると攻撃をしてくるタイプらしい。

らしいのだが…

向こうから、スバルさんがガジェットを追いかけながら、魔力弾による撃墜を試みていた。しかし、逃走していた4機ともに簡単に避けられていた。

「うわ！？なにこれ、速過ぎ！！」

確かに、速そうだ。だけど僕だってスピードには自信がある。逃走経路に陣取り、撃墜を試みる。

ガジェットからの攻撃を確認と同時に跳躍、ビルを使い三角飛びの要領で回避、そしてデバイス「ストラーダ」を振りぬき、魔力刃を飛ばす。が、それもひらひらと舞う木の葉のように、簡単に避けられてしまった。

「駄目だ…ふわふわ避けられて、全然当たらない…」

何度か追いかけて、攻撃を仕掛けるも、すべて避けられてしまった。するとティアナさんから念話が来た。しまった…後ろとの距離…考えてなかった。

前衛の二人、分散しすぎ！！ちょっとは後ろのことも考えて

あつ、はい。すみません

ごめん、ティア！！

一度、スバルさんと合流することが先決みたいだ。

追撃はあきらめ、一度スバルさんと連絡を取る。

スバルさん、この先のビルの下で合流します

スバルさんもそのつもりだったようだ。

OK、私も向かってるから

時間も少ないので急いで合流地点へと向かった。

合流ポイントへの移動の最中、ビルの屋上から、追いついたティアナさんとキャロガがジェットに攻撃を仕掛けているのが見えた。

side out

side ティアナ

「ちびっこ、威力強化お願い」

「はい！ケリユケイオン」

「Boost up」

「Barret power」

ちびっこの補助により、私の魔力弾が一回り大きくなった。これならいける。

眼下を走る4体のガジェットに狙いをつける…そして強化された4発の弾丸を解き放った。

「シューーーー！……」

オレンジの弾丸はターゲット目がけ正確に飛来する。だが着弾の寸前、4発の弾丸は打ち消された。

「バリア！？」「違います、あれはフィールド系……」「魔力が消

された!？」

三者三様の感想、意見を述べる。初見ではびっくりするのも無理はない。

「そんなものであるなんて…早く合流しないと」

先を急ぐ中、なのは隊長からの説明が入った。

ガジェットには少々やつかいな性質があつてね。攻撃魔力を打ち消すアンチ・マギリング・フィールド「AMF」。普通の射撃は通しない。それに、AMFを前回にされると、飛翔系、足場作り。移動系魔法の発動も難しくなる。だから…

どうやら遅かったようだ。合流前にスバルさんがガジェットを追いかけたらしく、AMFの影響を受け、綺麗な前方三回転を決め、ビルにぶつかる。足場が消えたのが原因らしい。

「スバルさんーーーー大丈夫ですか??？」

「エリオ…なんとか…いたたた…」

どうやら実戦でもこんなやつかいな性質をもった敵を相手にしないといけないとなると先が暗くなりそうだ。

「対抗する手段はいくつかあるよ!素早く考えて、素早く動いて!」

そう、これは思考のトレーニングでもあるのだから。どうやらみんな考えはまとまったみたいだ。

ティアナとキャラがまず動いた。

「ちびっこ、名前なんていったっけ？」

「キャラであります」

「手持ちの魔法とそのチビ竜の技でなんとかできそうなのある？」

チビ竜が馬鹿にするなよといわんばかりに、羽を広げる。

「いくつか…ためしてみたいものが」

その答えを聞くと同時にパネルを閉じる。意見は同じのようだ。さて、この手段が上手くいけばいいけど…

side out

side エリオ

スバル、あいつらの足どめお願い

了解！エリオ、先にあいつらの足止めお願いできる？

正直、あまり考えがまとまっていなかった僕は困惑している。だけど、ティアさんがなにか考えてくれてるみたいだし、ここはなんと

か足止めをしなきゃ。

なんとかやってみます

どうやらこの近くに空中で繋がったビルの廊下がある。それを利用すれば足止めもできるはずだ。

幸い、そのポイントはすぐに発見でき、ガジェットが到達する前に用意することができた。するとスバルさんも遅れながらやってきた。

「エリオ！前衛二人で足止め頑張ろ！！」

スバルさん…そうですね！

「はい！！！！」

元気よく返事を返すと同時に、ストラダにカートリッジをロードさせる。

「ストラダ！カートリッジロード」

「Explosion」

カートリッジがロードされると、魔力が溢れだす。ストラダを風車の如く回転させ、勢いのままビルを破壊する。崩れるビルの残骸に、うまくガジェットを巻き込むことができた。

「まだ残ってる！！！！スバルさん」

瓦礫から難を逃れたガジェット逃走を続ける。しかし、二度も失敗を続ける者をいない。頭上を越えて逃走しようとするが、そこにスバルが割って入った。

「潰れてろーーーー！！！！」

力任せに殴りつけ、たたき落とす。だがAMFの影響が、破壊することには至らない。

「なら……」

これまたフランケンシュタイナーよろしくとばかりに、足でガジェットの地面に叩き付ける。そして今度は直接殴りつける。ジワリジワリと装甲を貫通、そして破壊した。

「スバルさん！！すごいです。足止めも成功ですね」

「エリオも良かったよ！」

二人で拳をこつんと合わせる。その瞬間……

5機の新たなガジェットが現れ、そのまま二人を追い越して行った。

「しまった！？まだ居たなんて！！」

その方向はボックス組の方角。早く追いかねなければ、二人にこの数は多すぎる。

二人して疲労困憊したなか、駆けだしていった。

s i d e o u t

s i d e キヤロ&ティアナ

エリオ達が足止めをしてくれたおかげで、ボックス二人はそれぞれ試したいことの準備ができていた。

「ティアナさん、先に仕掛けます」

ティアナに告げると、幼き召喚士は使役竜「フリードリヒ」に命じる。

「フリード！ブラストフレア」

「きゅく」

小さき竜は口元に火炎球を形成していく…そして命令を下す。

「ファイア！！」

真下を逃走するガジェットに火球が迫り、地面に直撃する。その後火球は地面を火の海へと変えた。火炎に巻き込まれたガジェットは耐えることができず、そのまま爆散した。

だが全てを爆散させることはできず、数体は上空へ逃げようとする。

だが…

「逃がしません。連続行きます！！！」

「我が求めるは、戒める物、捕える物。言の葉に答えよ。鋼鉄の縛鎖。鍊鉄召喚、アルケミックチェーン！！！」

ガジェットの真下に法陣が展開されると、まるで生きているかのような鎖が現れ、ガジェットの捕えていった。

それを見ていたなのは。

器用だなこの子。。。無機物を召喚・・・それに無機物操作も組み合わせるなんて。フェイトちゃんも面白い子連れてきたね。

だがその竜召喚士のとなりではさらに、驚くべきことを今まさに成そうとしていた。

「射撃型が、射撃が通じないからって引き下がるわけにはいかないのよ……！」

カートリッジをロード、魔力弾を形成する。

「ティアナさん！魔力弾は通用しませんでしたよ……！」

「キャロ……いいから黙って見てなさい……！」

本命の魔力弾がAMFを抜けるまで……通り抜けるまでの間、本命を保護する魔力の膜を……

イメージ……集中

集中。集中。固まれ……固まれ……固まれ……！！！！

裂帛の気迫が多重弾殻を完成させる。そして逃げ続けるガジェットに止めを刺さんがため、発射する。

「ヴァリアブルシュート……！！！」

放たれた弾丸はガジェットに着弾するもAMFに阻まれる。しかし、本命を包んだ魔力を無効化する間にAMFを突き進み続け、そして……

本命の魔力弾はガジェットを貫通、奥に居たもう一体のガジェット

も貰いた。

s i d e o u t

s i d e なのは

本当はA Aランク魔導師の技術なんだけどな…みんな鍛えがいがあ
るよ。。

模擬戦を眺めていたなのはつくづく感心していた。だが、ここで
イレギュラーな事態が発生した。

これでミッションコンプリートのはずだが…

まだ5機残ってる！？

「シャーリー！この5機は！？」

シャーリーも慌てているようだ。

「なのはさん、これは・・・新型です。性能はもちろんですが、破
壊しようとした職員が数名負傷しています！！！！？なのはさん、
このままだとバックス二人にエンカウントします！！！」

新型…

機動六課直々に送り込んでくるなんて…それに性能が上がってるとなると…フォワードのみんなが危ない。

「シャーリー！！エンカウトまでの時間は！？」

もう30秒ありません！！それに二人とも疲労してます…！！！！」

まずい…このままじゃあ怪我だけではすまない…

エンカウト目前まで迫ったその時。なのはの眼にあるものが映る。

それは目覚めた紅き閃光だった。

「アセルス！！」

アセルス！！今の状況分かってる！？

なのは隊長、シャーリーから情報は貰ってます。あの5機を止めればいいんでしょう？

そう、新型だし、データは何とかするから…全力で破壊して！！

了解！！！！

現在のフォワードでは太刀打ちできない。疲労しているなら尚更である。だから…紅き姫は全速力で、新型へと駆けて行った。

side out

side アセルス

見えた。あそこにティアナとキャロがいる。二人とも疲弊しきっているとのことだ。そんな状況では当然太刀打ちできない。

アセルス、AMFに気を付けて！！魔力弾は無効化されるから！

了解です。なのは隊長

AMF…一体どんなものなのか分からないけど。。。やるしかないね。

ティアナ！大丈夫？そっちに新型ガジェットが三体向かってる！

！殺傷行動にでる恐れがあるから、そこで動かないで！！

あなた…アセルスなの？いままで何してたの？それより新型って
詳しいことは後で！！エンカウント！！

軽い念話を終えらるとついに、視界に捕捉する。

「見つけた！！さあ…いくよ、ルナ、ソル！」

二丁の相棒を構え、魔力弾を放ちながら距離を詰める。

だが、情報どおりAMFにより無効化される。それにはティアナが
怒っていた気がするが…

やっぱりだめか…それなら

ルナ、ソルからロードせずそのまま詰めておいた魔力を打ち出す。

小気味良い音と共に2発発射される。トリガーもいつも通りの軽さ
だ…

放たれた圧縮された魔力弾は新型へと飛来…そしてAMFを貫通。
どうやらこの方法はAMFにも通用するらしい。

それを見ていたティアナが驚愕していたが。一体目を撃破した時、
向こうからスバルとエリオがやってくるのが見えた。だが今は二人

に話しかける暇もなく…

次、いくよ!!

モードブレイズ

形態を双剣へと変更する。だがそのまま斬って壊すだけでは意味がない…だから

「はああああ!!」

気合いを込め、魔力を練る。少しずつだが、アセルスの周りに空気の渦が巻き始める。

イルドゥンに教えてもらったこの技、試す価値はありそうだ。

そして、跳躍。同時に風を纏った魔力刃を飛ばす。

二刀烈風剣

二本の魔力刃は一瞬で目標に到達、4当分に綺麗に切り裂いた。

これを見たエリオもまた驚愕していた。

まだまだ!!!

キヤロやティアナがいるビルに攻撃しようとする新型が一体。私は躊躇なくスライディングと同時に蹴りあげ跳躍し、スープレックス（スウィングDDT）。足で掴み、地面に叩き付けた。

ここまで3体を瞬時に破壊したの見るや否や、残りの2機が逃亡を図る。だがこちらにも逃がすわけにはいかない。

まだ、こちらの術が通用するのかデータを取らなくては。

詠唱を開始。そして紅き法陣が展開される。

「光の焰よ、眼前の敵を焼き尽くせ!!!」

陽術 フラッシュファイア

光の爆炎がガジェットを飲み込んでいく。だが、魔力の量や資質的なものか・・・中心にいた一体は破壊することができたが、最期の一体はかろうじて難を逃れていた。

「まだまだ、威力に難ありか…さて、最期はと。。。」

モード変更

モードバスター

見晴らしの良いビルの屋上に陣取ると、バスターに変更し、狙撃に移る。

あの従騎士にも効果あったんだからこいつらでも効果はあるはず。

「ルナ、徹甲弾形成」

「Armor Piercing」

銃口には、細長い魔力弾が形成される。

アセルスはスコープは使用しない。妖魔の血の恩恵を受けたため…必要がないのだ。いやでも見えてしまうのだから。

逃走経路を予測そして、トリガーを引く。精密射撃により、新型のコアと思われる部分を正確に徹甲弾は打ち抜いた。

「弾が全然見えなかった…」

気付くとティアナとなのは隊長がいた。

「なのは隊長！ティアナ！！大丈夫でしたか？」

「それはこっちのセリフよアセルス！！！！今まで何してたのよ……つてそれよりも今のガジェットって…」

確かに、あのガジェットの事は気になる。そこになのは隊長が割って入る。

まあまあ二人とも。今は六課に戻ってデータ解析と会議が大切だよ。それに模擬戦だったし、みんな疲れも溜まってると思うんだ。だからこの件については明日ということで！」

その通りだ。みんな疲れているのが見てとれる。それに私も、病み上がりだ。

「アセルスは事務仕事溜まってるからやってね！」

…えええっ！？

ショックのあまりに落ち込む私。そう、事務仕事は苦手なのだ。疲れ果てた4人（アセルスの実力を見せられ落ち込み50%、疲労50%）と事務仕事に憂鬱になっている1人はとぼとぼと帰って行くのであった。

「アセルス！！あとで色々聞かせてもらうからね！！！」

「そうだよ、アセルス！！！」

「アセルスさん、色々教えてください！」

「私もお願いします！」

秘密にしていたことが明るみになると、こうなることは分かっていたが…

また、治療ポット送りになるのが怖くなるアセルスだった。

一方

「アセルスの馬鹿……！！ここまで壊すことないでしょう……！！」

原因は、フラッシュファイア。

広域に広がる爆炎によりところどころが故障している。

「データは取れたけど、修理する側の身になってよーーーー！！！！」

シャーリーの叫びがこだまするなか、第一回模擬戦は幕を閉じた。

だが新型のガジェットの件など、謎が残る一日となった。

s
i
d
e

o
u
t

紅姫（後書き）

いろいろとおかしな部分が多いですが・・・目をつぶってやってください。

原作ブレイクが多すぎる…気がする

次回も少々ブレイクします。

ご覧になっていた方には本当に申し訳ございませんでした。
また遅くとも頑張ります。

烈火（前書き）

今回は少々やりたい放題です…

烈火

最近、夢の中で私が私に話しかけてくるの。なんか不思議だね。
フェイトの日記より。

s i d e アセルス

「つ・・・かれ・・・た」

何故こんなに疲れているのか・・・それは前回の模擬戦での出来事が原因であるのは言うまでもない。

みんなには黙ってたからこうなることは分かってたけど...

模擬戦のあと溜まりに溜まった書類を片付け、睡眠を取ろうとした時、FW4人に捉まり質問攻めにあっていた。

「だから、言ってるでしょ...黙ってたのは悪かったって」

そうこうしながらも1時間以上は捉まっていた。結果だけ言えば、今までのことを話した。妖魔についてはまだ触れていないが。

「最後に！私のことはアセルスでいいから。同じチームなんだし。

よろしくね、4人とも… / / /」

「!!!!!!?????」

4人がともに顔を赤らめる。そうこの姫は少々天然なのだ。だが本人はこの力に気が付いているわけもなく…

「みんな可笑しいな…よろしくね」

「よろしく… / / /」

そんなこんなで私はやっと睡眠を取る事ができた。

side out

翌日

side スバル

お父さん…元気ですか？私は元気です。毎日が大変だけど、少しずつだけ強くなっていると思います。もう少しして落ち着いたら帰りたいと思います。


~~~~屋外訓練場~~~~

「うわぁぁぁ…」

なんか間抜けな声を出しているがそれは目の前の出来事が原因である。

「ほらアセルス！そんなことじゃ魔力が持たないよ！！もっと感じて、動いて！！！」

もの凄い数のシューターがアセルスに降り注ぐ。きりもみ回転で避けたり、ビルを三角飛びで駆けあがったりでアセルスは何とか、避けつつ接近を試みる。だが…

「ほら、回避した後のことを考えてない！！！」

背後の建物からシューターが飛び出してきた。

「くっ、ソル！！！」

「Protection」

シューターを間一髪で防御することに成功した…が

背後にチャージを終えた、なのはさんがいた。

「いつの間に!?!」

「アセルス、高速戦も私だってできるんだよ。だからね…」

ものすごい笑みを浮かべるのは。しかしそれを見ているアセルス、そして4人は顔から汗を流す。

「まだまだ訓練不足だよ!!!」

「Divine Buster」

万人が落ちるであろう類笑みとともに放たれた零距离からの砲撃をアセルスが耐えられるわけもなく…

「きゃーーーーーああ」

ビルを4棟突き抜けたところでようやくアセルスが止まった。

……………この訓練何？

私達の早朝訓練の休憩中に行われていた、アセルスとなのはさんの模擬戦。ただ模擬戦と言えるのか分からないくらいのやられっぷりだった。

そこになのはがやってくる。

「さあ、みんな！早朝訓練のラスト一本。みんな頑張れる？」

「はっ、はい！！！」

内心、みんな冷や汗なはずだ。そのせいか、みんなの顔が若干ひきつっている。

「よし！じゃあラスト一本！！シュートインベージョンやるよ。5分間完全回避か、私に一本入れることができれば終了。みんな頑張ろう！！」

今さっきのことを思うととてもじゃないけど、5分間避け続けるなんて無理だよ。それにティアも同じ意見だったみたい。

「みんな、聞くまでもないけど、なんとかして一発入れるわよ！！目標2分以内。分かつってアセルス、大丈夫なの？」

あっ、アセルス。あんだけブツ飛ばされてたのに…タフネスだね…。

「なんとか…でも私も避けきるの無理。だからティアの意見に賛成だ。それに借りは返さないかね。。。」

ルナとソルを構え、笑みを浮かべるアセルスを見て全員は思ったに違いない。

凄く怖いよ…アセルス。

「ほら、話はここまで、来るわよ！！全員、散回、完全回避！！」

「了解！！！！」

なのはさんのシューターをが飛来するのをかわきりに、ラスト一本がスタートした。

まずは、私とティアが仕掛ける。

ウィングロード

蒼き魔力道が無尽に展開される。そして、私は滑走したのはさんへと迫る。そしてちょうど反対側のビルからティアとの同時攻撃を行う。しかし、その攻撃はシューターによって防がれた…ように見えた。

二人を正確にとらえた瞬間、霧散した。

「シルエット…やるね」

そう、そんな単純な攻撃は通用しない。そこでシルエットを用いて陽動をかけることにしたのだ。そして本命の私かというと…

「でやあああー」

頭上から一気に滑りおりそのまま殴りつける。だが相手はエースオブエースのなのはさんだ。簡単に防がれてしまった。

「うん、スバルもティアナも悪くないよ。二人ともいいコンビネーションだね」

褒めてもらったのは嬉しい…がなにかに気付き、とつさに後ろに飛び退く。そこにはシルエットを攻撃していたシューターが先ほどいた場所を高速で通過していた。

いったん後退して、なんとか機会を伺わなきゃ…

ティア、援護お願い！

スバル、出すぎよ！！こっちの身にもなってよね！！！！

シューターに追われるスバルを援護すべく、カートリッジをロードしようとしたその時だった。

「ジャムった！？こんなときに」

急いで薬莢を取りだし、新しいカートリッジと交換し、すぐに撃墜

する。ただスバルが「援護まだ――??」って叫んでいたけど気にしない。

ごめん、こっちは失敗しちゃった。エリオ、キャラ、アセルス、後は任せるわよ

3人ともお願いね!!

わかったよ

「エリオ、キャラ、やるよ!」

「はい、アセルスさん」

「やりましょう」

side out

side アセルス

手はずはこうだ。アセルスがなのはさんを追い込み、キャラがエリオにブースト、そのままエリオが突撃する。うん、なんて簡単なんだろう。

「アセルスさん…あの…」

エリオが凄く心配そうに話しかけてくる。そんなに心配かな？

いえ、貴女からでているオーラが怖いんです

「二人とも、スバルとティアナが撃墜される前にけりをつけるよ。私がひきつけるから、後はお願い」

「なんとか頑張ります」

「了解です」

やっぱり緊張してるみたい…エリオやキャラなんて戦うような年齢じゃないよ…

貴女にビビってるんです。

なのはさんが接近してくるまで、時間がない。…そうだ!!

首にかけてある紫紺のペンダントを外し、キャラにかけてあげる。

「これは…?」

キャラが不思議そうに首を傾げている…うん、可愛いよ、キャラ。

「向こうの世界で作ってもらった物なんだけど、キャラにあげるよ。お守り代わりに持っていてくれたらうれしいな…」

かけてもらった、ネックレスを見て、少し考えた後、服の内側にしまった。

「アセルスさん！大事にしますね！！」

満面の笑みを浮かべて、頭を下げて感謝していると、そこに、シューターが割って入ってきた。

へえー、そんなことしてる余裕あるんだ…

びくっ

死の宣告が突然やってきたかのように感じるこの一言。しかし、俄然やる気な方がここに1名。そう、アセルスである。

「さっきの借りは返させてもらいますよ！！！！」

回避したシューターをすぐさま撃墜すると、一気に距離を詰めていった。それを見ていた二人はというと…

「あははは・・・」



笑っていた。

二人は予め打ち合わせしたポイントへ移動することとなった。シューターに気を配りながら移動になると思われたが、完全にアセルスさんに引きつけられた形になっていて、無事に移動することができた。

そのころ…

「シューーーート!!」

ざっと見て20はあるであろうシューターがアセルスを撃墜せんがために、飛来する。

さっきは回避して失敗したけど、次は全部撃ち落とす!!!

試してみたいものがあるし、みんなの為に絶対成功させる。

~~~~昨日~~~~

「あつ、アセルス!ちょうどいいところに!!」

廊下を歩いていると、はやてに呼び止められた。

「はやて、どうしたの？」

「あんな、このゲームやってみてほしいんやけど」

そういつて渡されたのは、TOGであった。

「私達の世界で作られたやつなんやけどな、面白くて、みんなに勧めてるんよ！！なんか私にそっくりな声のキャラもおつてな。なんか親身になつてしまつてな…ああ弟君…健気やな」

「はあ…まあ嫌いじゃないんで時間があればやってみます…」

「弟君はアセルスの参考になるんやないかな？まあ感想よろしゅう！！」

そんなこんなで、実は結構はまつてしまい、やりこんでいた。

~~~~~

「ルナ、ソル、いくよー！！」

紅き法陣を展開すると、デバイスが焰に包まれる。

「真似したら意外にできるんじゃないかってねー！！」

飛来するシューターを確認すると、一種のフィールドを展開する。

周りに被害を広げないため、そして相手の動きを封じ込めるため。

「セリフも真似してみよっかな」

そうして、フィールド内に飛び込み、カートリッジをロードする。  
勢いよく、空葉莢が二発地面に落ちた…そして

「派手に踊れ!!!」

ルナとソルから無数の魔力弾を打ち出す。一歩も動くことなく、焰を纏う弾丸が次々にシューターを落としていく。

そして最後のシューターを撃墜、フィールドが硝子のように砕け散った。

「アンスタンヴァルス」

辺りはただ焼け野原のようになってしまった。

また、怒られる…

こうなったら…

「なのはさんに八つ当たりだーーーーー」

とんでもない発言と共に、モードをブレイズへと変更し、なのはさんに斬りかかる。

「はあああーーーー」

ぎしぎしぎしぎし

激しい魔力のぶつかりあいにより、火花のように魔力が飛び散っていた。

「アセルス、また強くなったね！」

「また、私が怒られるじゃないですかーーーー！！！」

「まあまあ、アセルスが悪いんだし」

「なのはさんの馬鹿ーーーー！！！！！」

縦に切りつけ、回転と同時になぎ払うように切りつける。

## 二刀十字斬

だが、やはり最強といわれるシールドである。ただ押し込む程度に  
しかなかった。

「八つ当たりは駄目だよ、アセルス!!」

なんだかんだで、またチャージを終えている。やばい…

「Divine Buster」

またしても、桃色の巨大な魔力に飲まれていった。

そこには荒廃した土地しか残らなかった。

「ふう、やり過ぎちゃったかな…!？」

「Warning」

レイジングハートの警告とともに、焰を纏った、矢が飛んできた。

「これは、避けないと、抜かれちゃうな…」

ギリギリ、回避すると、飛来した方向を見る。そこには先ほどまで戦っていたアセルスがいた。

「シルエツト…二回使うとは思わなかったよ」

ティアナがぎりぎり間に合ったようで、上手く事が進んでいる。あとは、もう少しでエリオ達のところの追い込める…！

現在、ルナとソルは双刃の状態になっている。

モードアサルト

「シグナムさんと弟君を参考にやってみたけど、うまくいくとは思わなかったよ…」

双刃は弓のようになっている。魔力の弦によって今すぐにでも、引くことができる。

「これで、私の役目は最期だよ。はああああ」

右手に魔力を集中させる、焰の矢を完成させる。

弦を引き、そして放つ。

「ヴァンフレーシュ」

弟君の技をそのまま真似してみたけど、意外に上手くいくもんだね。それに、ソルとルナがこんなに高性能だなんて…感謝しなきゃ。

回避したばかりの、なのはさん目がけて、さらに、もう一発撃ち込む。予想通り、なのはさんは回避し、予定通りのポイントまで、誘導できた。

後は頼むよ…二人とも…

s i d e o u t

s i d e エリオ

「来たっ！…！キャロ！お願い」

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

「Boost up Acceleration」

詠唱が完了すると同時にストラダから推進力を得て突撃を開始する。アセルスさんが引きつけてくれたおかげで、まだこっちに気付いてない。

「でやああああー！！！！」

完全に不意を突いた形となって、なのはさんに激突することとなった。しかし…隊長の肩書、ましては「エースオブエース」は伊達ではない。

ほぼ無意識に近い状態で、防御に成功していた。

なんとかシールドを突破しようとしたがそのまま数秒間の均衡が続いた。その後、爆発が起きた。

「うわー！ー！ああー！ー」

よほどの衝撃だったのだろうか、体勢を立て直すのが、後ろへ滑ってしまった。

タイミングは完璧だったのに…まさか防がれるなんて…



土煙でまだなのはさんの姿は確認できていない。ただ油断せずに前をただじつと見ていた。

エリオ！

外した？

アセルスさんやティアナさんからの念話も来る…そして土煙の向こうになのはさんの姿が見えた。

「なっ、無傷！？」

驚くしかなかった。完全に不意打ちで、キャロの補助も使ってたのに…

「ミッシェンコンプリート。エリオ、そんな顔しないの！ちゃんとシールドを抜けてたよ。ほら、ここ。破れてるでしょ…」

なのはさんが指し示す場所をよく見てみると、穴が開いていた。よかった…

「やったー」

みんなが集まってきた。どうやら、無事に早朝訓練を終えることができてホッとしているようだ。

「はい、みんなお疲れさま。みんな動きも少しずつよくなってきているよ」

機動六課の制服に着替えたのはさんと一緒に反省会を開始する。みんな色々と感じることは多かったようだ。話の中ごろ、急にフリードが鳴いた。

「フリード、どうしたの？」

キャラが疑問に思ったようで、フリードに聞いてみた。

「そういえば…」

「なにか焦げたような…」

ティアナさんがきよろきよる周りを見渡していると、何かに気付いたようだ。

「スバル、あんたのローラー！」

みんなが視線を集めると、そこには明らかにショートして煙をあげるローラーがあった。

「うわ！無茶させすぎちゃったかな」

「オーバーヒートかな？後でメンテナンスッに見てもらおう」

「はい…」

スバルさん、ちょっと落ち込んでるかな…

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はい、騙し騙しです…」

どうやら二人ともデバイスにガタが来ていたようだ。だが二人とも丁寧に手入れをしてきたためか、ここまでもったのだろう。

「そろそろ、みんな訓練にも慣れてきたようだし…うん、決めた」

新デバイスに切り替える時だね。

「みんな、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えするね。」

「新…デバイス？」

「まあまあ…それは、後で実際に見てもらってから。いったん着替えてロビーに集合ね！」

「はい！…！」

後ろを振り返れば焦土と化した人工島があった。そこには泣くシャリーリーの姿があったとか。

s i d e o u t

s i d e      アセルス

隊舎に帰ってる最中に、黒いスポーツカーに乗ったフェイトとはやてを見た。話によると、教会方面でカリムと話があるようだ。ちなみにカリムとは一応だが面識はある。

「ふう…シャーリーは頼んであったもの作ってくれてるかな？」

独り言を終えると、制服に着替えロビーへと移動した。

ロビーで集合を終えると、そのままデバイスルームへと移動した。

「これが、私達のデバイス…」

宝石、そしてカードが浮いている。

「そーでーすー！」

シャーリー…元気だね、相変わらず…　ってなんで睨むの!?

「かなりの人に協力してもらいましたよ!そのぶんみんないい子に仕上がってますよ」

「ストラーダとケリュケイオンは変化なしかな？」

「そうなのかな??」

エリオとキャラは自分たちのデバイスみて率直な感想を述べる。しかしその意見は違いますですよと言わんばかりの声が聞こえた。はい、リイン。どうぞ。

「セリフ取らないでくださいよ、アセルスさん!!」

ぷんぷん怒りながらも、何故か可愛さしかみえない、リイン。うん、可愛い。

「もう…では説明しますですよ。以前のお二人のデバイスは最低限のフレームと、機能しか持たせていなかったんです。でも今回は色々な内面を強化してるわけですよ。それに形状が変わらない分扱いやすいと思いますです。」

「そうだったんだ…」

二人とも凄く驚いてる。私もそれを聞いたらびっくりするよ。

それぞれのデバイスを一度リインが受け取ると、リインからの助言を聞くこととなった。

「この子たちはまだみんな生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです。」

デバイスをそれぞれの持ち主へと優しく返していく。

「ただの道具や思わないで、大切に。でも、性能の限界まで思いっきり使ってあげて欲しいです」

わかってるよ。リイン。みんなだって分かってる。

周りを見れば、みんなデバイスを優しくも決意を込めて握るのだった。

「そうぞう、この子たちには何段階かのリミッターをかけてあるのだから初期では今までとはあまり変わらないかな」

「みんなが確実に扱えるようになったら、私や、フェイト隊長やリイン、シャーリーの判断で解除していくから」

「ちょうど一緒にレベルアップしていく感じですね」

「ちなみに、アセルスのデバイスにも掛かってるからね!」

初めて聞いたんですけど…

「アセルスのはちょっと特別でね…解除はかなり難しいと思うけど、アセルスが成長してくれば、なんとか外せれると思うよ」

はあ…そうだったんだ。

そこにティアナが思い出したかのように尋ねた。

「出力リミッターっていうと、なのはさん達にもかかってますよね？」

「私達はデバイスだけじゃなくて、本人にもだけど」

私は知っていたけど、それを知らなかったFW4人は愕然としている。無理もないけど。

どうやら決まりごとの為にリミッターが掛けられているとのことらしい。ただそんなこととして何の意味があるのか私には理解できない。

「解除にも色々条件が厳しくてね…はあ…」

絶賛溜め息の中、斬り裂くようにアラートが鳴り響く。

「一級警戒体制！？」

「グリフィス君」

モニターに現れたと同時に説明が始まる。

「教会の方から出動命令です」

「こちらはやて。なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君、聞こえてる？」

返事を返しすぐに状況を確認する。

どうやらレリックらしい物が見つかったらしい。山岳リニアレールで移動中にガジェットに襲われた模様。車両制御もガジェットにより奪われている。

「新型も出てくるかもしれない。それに数もなかなかや。ハードな初戦になるけど、いけるか？」

「大丈夫！」「大丈夫だよ」

「みんなもいけるか？」

「はい！……！」

声を揃え判事を返す。

「現場はなのは、フェイト両隊長に、ロングアーチは私が戻るまでは、グリフィス君に指揮権を委ねます」

「それじゃ、機動六課FW部隊出動」

「はい！……！」

みんなが部屋を出ていくなか、私はシャーリーに呼び止められた。

「はい、頼まれていたもの。白薔薇姫とイルドウンが徹夜で完成させてくれたの」

シャーリーからカードとマガジンを受け取る。



「このマガジンに入ってるのは・・・」

「分かってる。こつちの世界は使用は駄目なんですよ。大丈夫」

受け取ったカードとマガジンを収納すると、はやてから通信が入る。

「アセルス、今回は別行動や。白薔薇姫とイルドウンの三人で、山岳にある廃墟の調査をお願いしたいんや」

一瞬、何故か聞こうとしたが、表情をみるかぎりなにかあるようだ。

「はやて、その裏は・・・」

「さすがやな。実は妖魔がまた現れる可能性があるんよ。最近微量ながらリーダーに反応が見られてる。だから方向も一緒やから調査を頼もうかと思ってお願いしたいんよ」

妖魔…まだ諦めていないのか…

高ぶる感情を抑え、返事を返す。

「分かった、すぐに行く」

「頼むで、アセルス！」

通信を終えると後ろには二人が待っていた。

「久しぶりの実戦だな、アセルス」

「アセルス様、さあ行きましょう」

一緒に戦うことができなかった二人と一緒に戦うことができる。うん、頑張ろう。そして成長ことを認めさせないとね。

「行くよ！二人とも」

そして、静かに山岳の廃墟へと向かうのだった。

side out

「はやて部隊長…二人を行かせて良かったのですか？」

「二人がどうしてもって言うから仕方なかったんや。それに条件で自由にさせるって約束してしもつたからな…」

「ですが、あの二人はもう…魔法すら使えないんですよ！！！」

「分かってるよ…でもな二人ともみすみす倒れるわけないよ。二人とも…強いんやからな…」

不安は拭い切れない。しかしそれでも二人は信用して送り出すしかなかった。

side out

side 白薔薇姫

アセルス様と一緒に現地での任務…あの日くらい、裏方として支えて来ましたが、今回は一緒に居ることができます。

「アセルス様、もうすぐ目的の廃墟です」

ファーストアラートの後、私達のはやて様に頼まれていた、山岳の廃墟へと向かっていました。

「アセルス様、イルドウン、なにか感じませんか？」

「ああ、これはそうですね」

「うん、妖魔だね…」

目前に迫った、廃墟から妖魔の気配が感じられる。水の従騎士と戦って以来、妖魔が現れたことはなかったが、ここ最近になってまた活動を開始したようだ。

アセルス様、突入の先陣お願いできますか？

わかったよ、フォローお願い

任せておけ

ルナとソルを構え、入口に張り付き、中の様子を伺う。しかし、ここにきてから、何も感じられなくなった。

変だ…

二人とも、行くよ。3 / 2 / 1

3カウントと同時に中に突入し、索敵を行うもすでに、もぬけのからのようだ。

しばらく中を搜すと、一台のパソコンのようなものがあつた。

「二人とも…これは…?」

そこにやってきた白薔薇が操作を開始する。どうやらこっちにきてから慣れたようだ。もちろん文字も読めるようになっていいる。

「データはほとんど消されてますね…」

白薔薇が手際よくデータを解析している。そこに一つだけ残っていたデータを見つけた。

「っ!?アセルス様、どうやらレリックを狙っているのは、ガジェットだけではないかもしれません」

残っていた、データをこちらの端末に転送してくれた。

データを見てみると、どうやら何者かが妖魔と接触している可能性があることが分かった。

「アセルス、白薔薇姫様、どうやら急ぐ必要があるようだ。急いでリニアレールへ向かう」

「そうだね、みんなに妖魔の相手は…急ごう!」

三人は頷くとすぐに、廃墟から出る…しかし…

3…2…1…0…

轟音とともに廃墟は爆発したのだった。

そしてそれを遠くから眺める影が。

「くっくっ…餌に直ぐに食いついてくるとは…愚かな」

その影はそのままリニアレールの方へと姿を消したのだった。

s i d e o u t

## 烈火（後書き）

やってみたかったことをやってみました。  
ただテイルズはこれからは使わない…と思います。

## 決意（前書き）

ほぼ内容は変わっていませんが、セリフが少し変わっています。

## 決意

side なのは

現在、ヘリに乗って、リニアールへと向かっている。FW4人とリインと私。フェイトちゃんは現在、こちらにむかっている。今回、アセルスは別任務であることは伝えてある。

「新デバイス：ぶつつけ本番になっちゃったけど、訓練通りで大丈夫だから」

やはり不安は隠せないようだ。機動六課としての初任務であり、エリオ、キャロにおいては、人生初だから尚更だ。

「はい」「頑張ります」

二人は返事を返すが少しの緊張感は感じられる。

ただ、エリオとキャロはまだ表情が硬い。

それを察してか、リインが声をかけてくれる。

「エリオ、キャロ、フリードもしっかりですよ！」

「はい」

二人とも少しは緊張感が解けたようだ。

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがいるから、おっかなびっ



くりじゃなくて思いっきりやってみよう」

「はい!」

うん、なんとか大丈夫そう。

ふと、キャラを見てみると、ペンダントを握っている。

それにエリオが気付いたようだ。

「キャラ、それは？」

「アセルスさんから貰ったんです。お守り代わりにって」

紫紺のペンダントをギュッと握るキャラ。

「こうすると凄く落ち着くんです。エリオ君…頑張ろうね」

「うん、頑張ろう、キャラ!」

うん、二人とも、やっと打ち解けてきたみたい。さてと、どうやら私達の出番みたい。

「ヴァイス君、私とフェイト隊長で空を抑えるから」

「やっと出番が…って了解っす。なのはさんお願いします」

後方のハッチを開放する。

「みんな、先に出るけど、みんなズバツとやっつけちゃおう!!」

「はい」

そして、キャロの元に…

「遠くに居ても通信で繋がってる。一人じゃないから。みんな、ピ  
ンチの時は助け合えるし、キャロの魔法は、みんなを守ってあげら  
れる優しくて、強い力なんだから…ね」

改めて、FWを確認すると、そのままハッチから降下。空中でバリ  
アジャケットを展開すると、そのままガジェット殲滅へと向かった。

s i d e o u t

s i d e F W

「それでは、改めて任務を確認します。ガジェットを逃走させず  
に破壊すること、そしてレリックを安全に確保することです」

「スターズ分隊、ライトニング分隊はそれぞれ車両前後から7両目  
の重要貨物室を目指してください。先に到達したほうが確保するで  
すよ」

「私も現場に降りて、管制を担当します」

くると回るとバリアジャケットを展開する。

そのころ、遅れてきたフェイトとなのはが合流し、高速戦が展開さ

れている。二人の戦う姿は正しく戦乙女といったところだろう。

「さて、新人ども、隊長さん達が空を抑えてくれているおかげで、無事安全に降下ポイントに到着だ。準備はいいか？」

「はい」「大丈夫です」

「それじゃあ、がんばってこい!!」

スバルとティアナがハッチに向かう。二人は実戦は初めてではない分、落ち着いている。

「緊張しないでね、下で待ってるから。スターズ03スバル・ナカシマ」

「二人とも、先に行くわよ。スターズ04ティアナ・ランスター」

「「行きます」」

同時に降下を開始、そしてバリアジャケットを展開する。

「次、ライトニング。気を付けてな!」

「「はい」」

いつの間にか、二人とも手をつないでいる。やはり不安なんだろう。

「行こう、ライトニング03エリオ・モンディアル」

「うん、エリオ君、ライトニング04キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ」

「「行きます!!」」

そして降下すると同時にバリアジャケットを展開し、車両に降下する。

「うわーこれって、隊長のバリアジャケット?」

「そうです、参考に隊長さんたちを参考にしています。性能も凄いですよ!!」

バリアジャケットを見て、喜んでいると、目標にエンゲージ。戦闘が開始された。

リニアレールの天井が一部膨れ上がる。そこからエネルギー弾が飛び出してくる。

気持ち切り替え、ティアナはクロスミラージュを構える。そして魔力弾を現れたガジェットに発射する。

「シューート!!!」

着弾後、すぐさまガジェットは爆破、破壊される。

その穴を使い車両内にスバルが飛びこむ。

侵入直後、ガジェット目がけ右手を振り下ろす。

メキメキと装甲を貫通し、ガジェットは破壊される。さらに奥に居たガジェットを破壊するべく、接近を試みる。ガジェットはケープルの様なもので攻撃をしてくるが、持ち前の機動力でかわしていき、回し蹴りで、一体撃破、放たれたエネルギー弾をしゃがんで回避すると、その勢いで、壁を滑り…

「リボルバーシュート!!」

ガジェットは破壊できたが、車両内でこれだけスピードを出せば、当然外に飛び出してしまう。

「うわあああ」

空中に飛び出す形になったが、ウィングロードが展開され、無事に天井へ帰還する。

「マツハキヤリバーってかなり凄いや？うーんグリップとか加速とかさ…」

「私はあなたをより強く、速く走らせるために作りだされましたから」

「違うよ、お前はね、私と一緒に走るために生まれてきたんだよ。そんなこと言わないの!!」

コアの部分を眺めながら答える。

「そうなんですか？同じに感じますが」

「違うもんだよ、色々だね」

「考えておきます」

そんなやりとりをしていると、煙が上がる。

ティアナ、どうですか？

駄目です、ケーブル破壊効果なしです

ティアナが停止を試みたが、効果がなかったようだ。リインは少し考え、命令を飛ばす。

車両の停止は私が引き受けます。ティアナはスバルと合流してくださいです

了解

返事を返すとトゥーハンドからワンハンドに切り替える。

「しかし、さすが最新型。色々便利だし、魔力弾形成のサポートもしてくれる」

「不要でしたか？

「あんたみたいな優秀な子に頼り過ぎると、良くないんだけど、でも実戦では助かる」

「光荣です」

一方、ライトニングはガジェットを無事破壊しながら進んでいると、大型のガジェットと遭遇する。

アームを使い、二人に攻撃を行う。なんとか回避し、キャラはフリードに命じる。

「フリード、ブラストフレア!!」

火炎弾がフリードから放たれる。しかし新型はアームで易々と弾く。

「うおおおおお!!!!」

魔力を纏ったストラーダをで斬りかかる。しかし、傷一つつけることはできなかった。

「硬い…くう…」

キャラが援護しようと魔法陣を展開する。しかし急に魔方阵が消えていく。

「AMF!!こんな遠くまで…」

しかし、時間は待つてはくれない。エリオが押され始めている。

二人とも、大丈夫!?

ティアナとスバルから同時に念話が飛ぶ。援護に行きたいのは山々なのだが、ガジェットに押されている。こちらも手が離せないのだ。少し目を離しているとエリオがアームに掴まれている。

「うわぁーあああ」

苦しそうな声を上げるエリオ。だが声は急に聞こえなくなる。気絶してしまったようだ。ガジェットは無慈悲にも意識を失ったエリオを崖へと投げ捨てた。

「エリオ君！！！！」

それを見たキャラは同時に崖へと飛び出す。それを見たスバルとティアナは叫んでいた。だがここでも慌ててはいない人物が二人。なのはキャラだ。

大丈夫だよ。新型から離れば、AMFの効果が薄くなる。つまり魔法が使えるよ。キャラ、自信もっていいんだよ。みんなを守る、優しい力なんだから

なのはの通信を聞いていたかは分からない。だがキャラの眼は覚悟を決めた眼だ。

守りたい。私に笑いかけてくれる人たちを、自分の力で…守りたい！！

エリオに追いつき手を掴む。



ケリユケイオンが光それに答える。

「フリード、今まで不自由な思いをさせてごめんね。大丈夫、ちゃんと制御してみせるから」

その決意を無駄にしないように…フリードも答える。

「きゅくーー」

エリオもこの間になんとか意識を持ち直したようだ。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり天を駆け来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚!!」

魔方陣が展開され、一瞬光が強くなる。そこに現れたのは巨大な竜だった。そう、これこそがフリードの真の姿である。

「オオオオオオオ!!」

咆哮を上げると、新型を破壊すべく、リニアールへと戻って行く。

「フリード!ブラストレイ」

先ほどまでとは大きさがまるで違う。巨大な火炎弾は新型を飲み込んでいく。しかし、まだ破壊するまでにはいかない。しかしダメーシは確実に見えている。

「キャロ!、あいつは僕がやるよ!」

「うん！！エリオ君！！」

キャラが詠唱を開始する。

「我が乞うは、清銀の剣。若き槍騎士の刃に、祝福の光を」

さらに詠唱は続く

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

「ツインブースト。スラッシュ&ストライク」

詠唱が終わるとケリユケイオンからストラダに魔力が流れ込む。

「はああああ！！」

一気に、間合いを詰めると、ストラダを突き刺す。強化に加え、フリードによって装甲がもろくなっていた。

「でええええやああ！！！！」

下から上に切り上げるように、ストラダを振り上げる。見事に真つ二つに切り裂かれた新型はエリオの背後で爆散したのだった。

無事に任務を終えることができた。レリックも無事に回収することができた。

現在、ライティング分隊が引き継ぎのため残っている。

「二人とも、怪我はなかった？」

フェイトがエリオとキャロを抱きしめる。

そんなこんなで、引き継いでいる最中だった。

まがましいフィールドが形成される。

「これは・・・」

フェイトは気付いた様だ。これは、あの試験の日以来見ていなかったが…

幼いライトニングを引き連れ、戦いに臨まなくていけなくなった。

「二人は絶対守るから」

どこかの部屋でこれを眺める者がいた。

「さあ、見せてもらおうか。Fの残骸…くつつく」

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

## 決意（後書き）

うまく話を回収できるのか…

心配ですが、頑張ります。

よろしければ、感想やアドバイスお願いします。

## 悪戯（前書き）

閲覧前に一言

作者の独断と偏見がたっぷり詰まっています。ご注意ください。

## 悪戯

side フェイト

リニアレールガジェット襲撃の事後引き継ぎの最中、それは突如として訪れた。

ぞくぞくするような嫌悪感。これと同時に、異質のフィールドが形成された。

「エリオ、キャロ！！気を付けて」

「フェイトさん、これは・・・」

「フリードも怖がってます」

二人とも、まだ妖魔のことについての知識は、ほとんど無いと言っても間違いではない。ましてや、二人は今日が初陣でもあり、激戦があつたばかりだ。

「私も戦ったことないけど…やるしかないね…」

決意を固めると、愛機のバルディッシュを構える。先ほどから通信を試みるが連絡が付かないこともこの警戒の要因でもある。

増援はなし…

数分経っただろうか…実際にはほんの数十秒だろう。しかし、護りながら戦うことほど厳しいものはない。二人をかばいつつ、周囲に警戒を払っているときだった。

これが我の標的か…くっくっ…

「誰だ!？」

猟奇的な声に瞬時に反応する。直接頭に響くように、この声は聞こえるのだ。

!?

不意に後ろを振り向くが何も居ない。が…

どこを見ている…Fの残骸

正面から杖のようなものが振り下ろされる。

ぶうん

空気を切り裂く音と共に、頭部目がけて正確に振り下ろしてきている。



「はあああ」

そこにはもうフェイトはいなかった。杖を振りおろしてきた何かの背後に回り込み、バルディッシュを振り切っていた。

しかし…

手ごたえはまるでなかった。

「幻影!?!」

「フェイトさん、後ろです!!!」

エリオが対象を確認すると、ストラダを手に突撃する。しかし、これもまた手ごたえがなかった。

「!?!、キャロ、後ろ!!!」

すでに対象はキャロの頭部目がけ杖を振り下ろしている。

ブレインクラッシュ

当たってしまえば即死といっても過言ではない。実際、キャロは避けることは不得意であり、異端の存在に飲まれていた。

「きゃあああ」

「Protection」

悲鳴と同時に、ケリユケイオンがプロテクションにより防御を図る。

ぎしいiiiiii

訓練のおかげだろう。咄嗟の防御で、即死は免れた。

「キャラから離れなさい」

自分の持ちうる可能な限りの速度で突撃するが、それに気付いたのか、キャラから離れ、距離を置く。

これはこれは…くっくっくっ

紹介が遅れましたね。私は森の従騎士と呼ばれる者。以後、お見知りおきを…いや、ここでさようならですかね？

「妖魔！！！一体何が狙いの？」

それは、貴女とこの坊やですよ…プロジェクトFの残骸達。私も、

異界の技術には興味がありましてね…生体サンプルとして捕えよう  
と思いましてね。それに…邪魔者は消しておきましたよ。

ばちん

森の従騎士が指を鳴らすと、アセルス達が向かった廃墟が爆発する  
映像が映し出される。

餌を撒けば必ず食いつくと思っていましたよ。貴女方の司令官も大  
したことはないですね…

「はやてを馬鹿にするな！！それにアセルス達も生きてる。絶対  
に」

怒りの形相で、従騎士に突撃する。しかし距離が詰まるにつれて、  
身体が重くなる。

「まさか…AMF!？」

ほう、さすがですね…しかし、こんなもので、ここまで抑え込める  
とは。あの科学者も大したものですね…

おどけたように、話しかけるこの妖魔に怒りしか感じない。ただ、  
親友を侮辱したこと、エリオや私のことについて…許せない。

貴女にも人並みの感情があっただけですね。いやいや、これは驚きで

すよ…

「貴様、黙れ！！！」

久しぶりに激昂している。いついらいだろうか、この感情に支配されたのは。ただ、もうこいつを許すわけにはいかない。

「バルディツシュ、殺傷設定に」

「Yes , sir」

「フェイトさん…」

エリオから声が聞こえる。こんな私を見たことが無かったからかな…おびえてる。

「大丈夫。守るから、二人とも！」

二人に笑みを浮かべると、再び、怒りの形相へと変える。そして魔力を込めて、愛機を振り切る。

「H a k e n   S l a s h」

魔力斬撃が従騎士へと迫る。だが、目前で何かに接触し、爆散。

「AMFがこんなに強いなんて…ん！？」

周囲に何か粉のようなものが漂っている。そしてバリアジャケットに粉のようなものが触れると、触れた部分が溶けていた。

もう少し前に出ていれば、簡単に楽になれたものを…本当に貴女は運がいい。

「毒か…どこまで卑怯なんだ、貴様は！！！」

二度、三度、バルディッシュを振るい、斬撃を飛ばすも、すべて直前で消えてしまっている。

無駄ですよ…私の胞子には通用しない…

「毒、そして魔力を打ち消すこの能力…AMF!？」

ほう、気付いたようですね…だがもう遅いんですよ…

気が付けばこの空間の九割は胞子で満たされていた。どうやら、爆散したときに撒き散らしていたようだ。

大丈夫、生け捕りにしたいので、殺しませんよ…ただ、生きてると

は言える状態で留まるかは分かりませんがね。

くすっ…

「勝ったつもりなのかな？これくらいで」

胞子に気付いたときから、すでに時間は稼いでいた。そう、焔を扱う竜を召喚するために。

「フェイトさん！お待たせしました。フリード、ブラストレイ！！」

おおおっっ…

咆哮と共に、火球が放たれる。フェイトは気付いていた。焔ならば、この状況を打開できるはずと。

フリードは首を振りながら広範囲に焔を撒き散らし、胞子を焼却していく。

フェイトの予想通り、焔には弱かったようだ。

おやおや、そんなに苦しみたいのですか？くっくっ…ほんとに物好きな方々だ。

「おしゃべりはそこまでだ」

「S o n i c M o v e」

二つの雷鳴が両サイドから同時に斬りかかる。そう完全に不意を付いた形だ。

「消えなさい!!」

エリオと私は同時にデバイスを振り切る…しかし、急に身体が動かなくなってしまった。

「エリオ!!つく」

よく見てみると、網に絡まったようになっている。当然、エリオも同じ状態だ。

エクトプラスマネット

切り札は隠しておくものですよ…

やられた・・・警戒が足りかった。ましてやここまで策士じみた相手ならなおさらだ…

そしてこの後悔は最悪な形を迎えることとなる。

ここまで活きがいいと我も苦勞する…そこでだ。

狂気じみた声がこの空間を支配する。途轍もなく嫌な予感がする。

貴女の心を破壊させてもらいますよ…

もちろん、少年…君もだよ。ただ、君には働いてもらうがね…

従騎士は笑いを浮かべながら二人に近づいてくる。もちろんキャロもネットに捕らわれている。

そして、二人の横に達すると…頭に手を触れる…

つく…はあはあ…くはああは…

切り札つてのは一枚だけとは限らないんですよ……



「やめろ…触るな…！？いやああああー！！」

手が触れた瞬間、二人が急に苦しむように声をあげたのだった。

side out

side キャロ

「フェイトさん、エリオ君！！」

二人が急に苦しみ、叫んでいるのがよく見える。あの妖魔の手が触れたときからこうなっているのだ。

貴女は、さらに苦しんでください…貴女の犯してきた罪と後悔すべき過去に捕らわれて…

「いやあああ、やめて…あああああ」

「フェイトさん！！！！」

声は聞こえていない、ただフェイトはかなり苦しんでいるようだ。

そして、同様に・・・エリオも苦しんでいる。

「嫌だ・・・僕は・・・ああああ・・・」

二人ともがかなり苦しんでいる。そう肉体的に追い込めないなら、精神面から・・・そう考えたのだ。

くくく・・・やはりヒューマンはもろい・・・もろすぎる・・・

私の方にゆつくりと近づいてくる・・・

足音はしない・・・ゆつくり・・・ゆつくりと・・・近づいてくる・・・

「いや、来ないで・・・来ないでーーーー」

錯乱している、キャロ。当然フリードは口を封じられている。

貴女には興味はないので・・・

壊れて死んでください。

そう言って、頭に手を触れてくる。そうこれが従騎士のもう一枚の切り札。

カウンターファイアー

心の闇に漬け込み、錯乱させていくこの能力。二人が苦しんでいるのはこれが原因である。

さあ…逝きなさい…

しかし、何も起こらない。キャロは何も苦しんではいない。

馬鹿な・・・ヒューマン如きに破られるはずが…

相当な自信があつたのか、または人間如きに破られたことがショックだったのか、少し狼狽している。そして、これを防いだ原因が明らかとなる。

「温かい…」

キヤロが呟くと、胸のペンダントが光っている。それは朝、アセルスからもらったものだった。

何故、それを・・・命の結晶を何故貴様が…

アセルスさんにもらったペンダント。これのおかげで助かっているらしい。

トウテツパターン。まさしく命の結晶

どうやら、貴女にはこの方法は通用しないようだ・・・では、こういうのはどうでしょうか？

急に、身体が自由になる。急に開放されたことに、不快感を覚えつつ何とかして助け出す方法を考えていると・・・

「エリオ君!？」

エリオもまた開放される。そして、ゆっくりとこちらに向かってきている。

「エリオ君、大丈夫!？」

近づいて様子を伺おうとした時だった。ストラーダが真一文字に振り払われる。

「Protection」

またしてもケリュケイオンに助けられる形になった。が・・・エリオは間違いなく攻撃してきた。

「エリオ君!？私だよ、キャロだよ!？分からないの!？」

必死に呼びかけるも返事がない。眼も光を感じられない・・・

「操られてるの・・・!？」

その通りですよ...ははははは...くうくつつ...

あの小娘を殺りなさい。命令ですよ。

「はい・・・」

生気のない声で妖魔に対して返事を返すエリオ。完全に心が支配されているようだ。

「エリオ君、しっかりして!!」

私の声は届いていない。ゆっくり、ゆっくり近づいてくる。その手に握られているストラーダは殺傷設定のようだ。

「S o n i c M o v e」

突如、眼前に現れるエリオ。躊躇することなく、ストラーダは振りぬかれる。

「エリオ君!!」

「P r o t e c t i o n」

ぎしゃああああ

魔力とデバイスの激しいぶつかり合い。魔力が火花のように飛び散る。現在はなんとか均衡を保っているが・・・キャロの心は揺れている。

攻撃なんてできないよ…

3分ほど経ったところだ。徐々にだが状況に変化が見られた。

キャロが押されている。

防御に徹して、疲れを誘うつもりだったのだが、一向に攻めてが緩まない。むしろ増してきている。

「はあはあ・・・魔力が、もう持たない。それにエリオ君も限界を超えてるよ…」

無理やり動かされているようなものだ。エリオは自分で疲れを感じていない、ましては、魔力も無尽蔵に使っている。当然、身体に掛かる負担は・・・

必死に考えた。エリオ君を止める方法を。そして見つけたのだ。苦肉の策をひとつ。上手くいく確証なんて全然ない。でも…やらなきゃ。

おやおや、何かするみたいですね…ほら、貴女も見なさい。

隊長は伊達ではない。ここまでの精神汚染にも耐えている。意識もかろうじて残していた。

「はあはあ…」

しかし、喋る気力もない。過去の事件などを記憶の奥底からかき回されれば、こうなってしまうの当然だ。

「…め…て…二人…と…も…」

気力を振り絞りなんとか声を発するも、聞こえるわけもなく…

そして…

ぶしゅああ



肉を貫いた音が聞こえた。

ゆっくりと前を見てみると…

キャロを貫いた、エリオが立っていた。

「あ、あ、いやああああー」

そのときだった。なにか私のなかの何かが壊れてしまった…そんな感じだった。

「エ…り…君。。。ケホッ」

口から血を吐き、眼の前の男の子の名前を必死に呼ぶ。

まだ、無機質な表情を崩さないエリオ。しかし、これはキャロが賭けにでた苦肉の策だった。

力の入らない手でペンダントを握りしめる。そして。。。顔をゆっくりと近づけていく。

二人の唇は重なっていた。

「オ…君……きだよ…」

s i d e o u t

## 悪戯（後書き）

さて...どうなるのやら... orz

悪戯そして・・・（前書き）

今回も、作者の偏見が多いに入っています。

悪戯そして・・・

side ????

きいん…きいん…きいいいん

握られたペンダントが一段と光を放つ。命を賭けた願いに応え、紫紺のペンダントは光輝く。やがて二人を光は包んでいった。

そして…光が引くと…意識を取り戻した、エリオが居た。悪夢から解放された彼はホッとしていた。しかし、すぐに異変に気付いた。濡れている…それに、血のにおいがする。

「キャロ!? キャローーーー」

付きつけられた現実にはあまりにも辛いものだった。ストラードに貫かれたキャロが居たのだから。

くくくつつつ…愉快愉快

これで、目的は果たせましたよ。さて、回収しますか。

「ぱあ ああん、ぱあ ああん」

従騎士の身体の一部が爆ぜた。

小気味良い銃声とともに。そして、やってきた。紅き姫が。

「遅かった・・・っ キャロ!？」

血まみれになっているキャロ、そして、愕然としたエリオ、そして網に捕らわれたフェイトを見つけた。

「貴様!! 何をした!？」

現在の状態を把握した瞬間、激昂していた。許せなかった。仲間をここまで…

ルナとソルを構え、トリガーを引く。従騎士はA M Fがあることで油断していた。そう、マガジンに入っているのは、魔力ではない。実弾である。

放たれた弾丸は杖に着弾すると、易々と貫通し、爆ぜる。

貴様…こちらの世界で実弾を使用するとは…

「貴様らを葬ることにそんなルールは関係ないことだ」

杖は真つ二つになり、従騎士にもダメージはあったようだ。この隙に後退し、キャロとエリオの治療にかかる。

「ひどい…キャロ…我慢してね」

ストラーダを一気に引き抜く。それに伴う出血はなんとしても防ぐ必要があった。

ルナのマガジンを魔力弾へと入れ替える。そして3発分ロードする。

紅き法陣が展開される。A M Fの影響に気が付いたのか、余分にロードしているのだ。

陽術 スターライトヒール

暗く淀んだ空間に、太陽の光が舞い込んでくる。

そしてこの光は、傷ついた、少年、少女を優しく癒していった。

…駄目だ、止血程度にしかない…資質的なものあるし、このA M Fはかなり辛い。

「白薔薇が助けを呼んでるから…二人とも…もう少しの辛抱だよ」

治療が終わると同時に、イルドウンが駆けつけてきた。よく見えなかったが、衣服が少しボロボロになっていた。

「すまない、遅れた。二人は我に任せろ。貴様は奴を倒せ！」

「わかったよ、二人をお願い」

二人ともかなり危険な状態には変わらない。急いでこの外道を倒さなければ…



ほお…あの爆発でも生きていたか…

「訓練と比べればあんなもの、可愛いものだ。それより、貴様は生きては返さないから」

1分間…経ったのか

重苦しい、雰囲気次第に周囲を支配する。お互いが隙を窺っている。仕掛ければ…やられる。

微動だにせずに…ただ時間が流れる…はずだった。

貴様は、我らの敵だ。だから貴様も狂い死ぬがいい。

しまった…張りつめた空気が一瞬乱れた瞬間に仕掛けられた。完全に不意を突かれた形になってしまった。防御もい間に合うのかわからない。ただ心の中で私は叫んでいたのだが…

「ああ、同意見だ。だから、貴様が死ぬ」

暴力的で、無機質な声が響く。そして目の前の従騎士の頭が身体から離れ、地面に落ちる。

ぼとつ。

ひゃあああははは・・・一体何が・・・

私も何が起こっているのか、全く理解できなかった。急に、やつの頭が落ちたのだから。

妖魔の後ろ・・・よく見てみると・・・そこには、死神を思わせるようなフエイトが立っていた。

ただ、髪はほどかれ、髪の色、虹彩、バリアジャケット、魔力光など黒色になっている。

「フェイト…隊長…？」

今までにないプレッシャーを感じながら、私は問いかけた。しかし…答えは返ってこない。

我は死ぬのか…ひゃああはああは…

狂ったように叫びだす、従騎士。しかし、もう身体と頭は繋がっていない。

切り離された従騎士の頭にバルディッシュを振り下ろす。

「消えろ、屑が…」

そのまま、高速でバルディッシュを振るうと、妖魔は細切れになっていく。

「Plasma Smasher」

バルディッシュから濃密な魔力砲撃が行われる。それはこれまでに見たフェイトさんのものを遥かに凌駕していた。

何も、語る事もなく妖魔は消滅した。消滅と同時に、フィールドが解除される。

「あの…フェイトさん…？」

恐る恐る、声をかけるが…直ぐに回避行動を取った。

自分の首元にバルディッシュの鎌がかかっていたからだ。

「何をするんですか!？」

当たり前のことを当たり前に言う。しかし返ってきた言葉は違った。

「ふん、貴様はやつと同じだ。人間の形をしてるが、貴様も同じなんだよ」

言葉が消えるやいなや、またしても、首を刈り取るというわんばかりに、接近してくる。

「ちよつと、まって!!…速っ」

しゃがみ込みと同時に懷を走りぬけ、距離を取る。

が、距離を取ったのがいけなかった。視線の先では、地面に倒れ込む、イルドゥンが見えた。弱ったものから狩って行く。自然の摂理と同じだ。

「イルドウン！？フェイト隊長は？貴女は一体誰なの？」

事態が飲み込めず、思いつくままの言葉を投げかけていく。そして、返ってきた答えは意外なものだった。

「私は、アリシア。アリシア・テストロッサ。フェイトの姉だ」

s i d e   o u t

side アセルス

えっ！？お姉さん？？？

駄目だ、状況が全然理解できない。

「はっはっは…そりゃわかんねーだろうな。まあ、一応フェイトの仲間っぽいしな。説明してやるよ」

フェイトさんとは性格が全く違う・・・それに、凄い威圧感…

私はしばらくプロジェクトFについての話を聞いた。またフェイトの過去を。

「つまり、フェイトさんはアリシアさんのクローンだと…？」

「そうだ、しかし、私の人格が表立つことはなかった。そう、生まれるはずのないフェイトの人格があったからだ。だが、私もこんなことをして、現世に戻るほどの未練はなかった。だから、私は、フェイトの姉として、そして影として支えていくことにしたんだ。後は話した通り。過去に母親から受けていたことや、管理局からの扱い。ここでのストレスを私が代わり引き向けることで、人格の崩壊を防

いでいた」

そんなことがあるのか…

しかし話が続く。

「だが、今回はあまりにもストレスが集中しすぎた。そう、先ほど葬ったやつがのせいだ。やつは、フェイトの心の傷を抉った。だから心が崩壊する前に私が表に出てきた。それだけだ」

「つまり、フェイトさんは、今眠っている…」

「物分かりがよくて助かるよ。そういうことだ。ちなみに、フェイトのことは心配しなくてもいい。大丈夫だ」

「それとこの事は、他言はするな。フェイトにも言うんじゃないぞ」

「わかったよ…」

とりあえず、フェイトは無事のようなのだ。よかった…それなら次は、エリオとキャラだ。

「また、使うことになるなんてね」

カードを取り出し、力を解放する。

「秘められし力を解放せん。祖は癒しの象徴なり。出でよ」

カードをエリオとキャラの二人にかざす。するとカードから金色の

杯が現れた。

「二人とも…もう少し我慢して…」

杯から水がこぼれていく。こぼれた水は二人に沁みわたって行く。そしてうなされていた二人の表情が和らいだ。表情の変化に気付き、ようやく安堵の表情を浮かべる。

「後は、救助が来るのを待つだけ…イルドウンも気絶してるだけだし」

なんとか無事に事件を解決できたと…一息付いていた矢先だった。またしても首に鎌が掛けられている。

「っ！？アリシアさん、一体何のつもりなんですか？」

内心焦りは感じている。どうしてこうなっているのか分からないからだ。

「私達の敵は妖魔でした。それに私達は、仲間なんですよ？」

「ああ、そんなことぐらい分かっている。私は、お前から感じられる、その感じが嫌いなんだ。それにな…フェイトの負の感情を代わりに受けてんだ。私にも、ストレスのはけ口ぐらい欲しいんだよ」



「私が妖魔であることがそんなに気になるの？」

「貴様は妖魔とか呼ばれるものの気配が半分だ。後は、人間だろうか」

…？私は妖魔なはずなのに…何言ってるの…？

アリシアの言葉に疑問を浮かべる私。なにか違和感を感じる。なにか…

「つつう…」

突然訪れた、激しい頭痛に、思わず声を漏らしてしまう。痛い…頭が割れそうだ…

「苦しんではとて悪いんだけどさ…相手してくんない？飢えてんだよ。こっちはもう我慢できなくてうずうずしてんだ」

苦しむ私をよそに、アリシアはバルディッシュを突きだし、こちらに話しかけてくる。

「…一体、何の相手を…？」

返答を待たずして、アリシアは突っ込んできた。ご丁寧にフォトンランサーも同時に展開している。

「戦いに決まってるだろう！！それ以外になにがあるってんだよ」

side out

side アセルス

なんとか頭痛が収まってきた。

現在、アリシアと戦闘中だ。

ただ、状況は思わしくない。一方的に攻め続けられている。まず一つ目、攻撃が当たらないのだ。フェイトさんとの模擬戦は嫌というほどやってきた。でも、このスピードはそれをも軽く凌駕していた。

「くう、速い…」

モードブレイズで現在立ち回っている。しかし、飛んでくるランサーを回避、撃墜に手を焼いている状況だ。

それに二つ目。防御ができない。

これは私がプロテクションを使えないというわけではない。プロテクションの意味がないということだ。

それに気付いたのは、アリシアの斬撃を防御した時だった。プロテクションが斬られたのだ。

どうやら、防御を貫通する性質をもっているらしく、防ぐことができなくなった。

最期に…アリシアはデバイスを殺傷設定で使用している。そのために回避に今は全力を注いでいるのだ。

「逃げてばかりじゃ、面白くねーだろ。ほら攻めてこいよ」

ぎいっいいん

バルディッシュをルナとソルで受け止める。

だが…押し切られそうだ。ほんとに、フェイトとは違う。何もかもが数段上だからだ。

「強い…押し切られる…」

「私にリミッターなんて関係ない。そんなもので私は縛る事はできないんだよ」

つまり、フェイトに掛かっているリミッターを解除した状態ということである。そして、アリシアのセンスも加わって、一方的に押し込まれている。

状況はかなり不利であった。だが、これも訓練のおかげか、少しずつだが状況を押し返せるようになってきた。

ついに数十回の剣劇の後に、癖が分かってきた。アリシアは力を入れすぎる癖があるみたいだ。この癖を狙っていくしかない。そして、

また鎧迫り合いに持ち込んでいく。そして…実行へと移す。

「…はああ！！！」

アリシアが力をかけた瞬間に力を抜き、なんとかいなすことに成功した。そして、ここに生まれた一瞬の隙…姿勢が崩れるのをを狙っていた。

「もらった！！」

疾風迅雷

フェイト得意の高速攻撃。そしてアセルスが最初にマスターした閃光の一撃

稲妻突き

アリシアのデバイスを奪う為に狙うのは…手だ。もちろん非殺傷だが、まともに当たれば少なくとも今は、動かせなくなる。

だが…当たらなかった。

「惜しかったね。でもそんな速度じゃ止まって見えるよ。残念」

回避不能の技さえも回避するアリシア。そして…

笑みを浮かべながら、背後からバルディッシュを振り下ろす。

「消えちまいな……！！！」

「まだ……諦めない……！！！」

ルナで、バルディッシュを受け止めると、そのまま、回転し、魔力刃を滑らせる。そして回転を利用したまま、ソルを振りぬいた。

かすみ青眼

シグナムから教えてもらったカウンターだ。これなら、いける……！！

ソルは、バルディッシュを吹き飛ばすことに成功していた。弧を描きながら、後方へと飛び、地面に突き刺さる。

「……はあはあ」

張りつめた戦いで気付かなかったのか、ものすごい量の汗をかいている。身体も重い……命を賭けた戦いはこれほどにきついなんて……妖魔との戦いとは全く違う。人と戦うことがどんなに恐く、大変……！！

？。

「がはあっ」

・・・！？何が起こったか分からない…ただ強制的に息が吐き出される。腹部に痛みを感じる…どうやら殴られたようだ…

「なかなかいい線いってたけどよ、最期に油断したのはいけねえな・・・」

意識が飛ぶ瞬間に、理解できた。どうやら、アリシアにボディープローをくらっていた。

「そん・・・な・・・」

意識を失い、倒れ込んだ、私をアリシアが支える。

「面白かったぜ、お譲ちゃん。フェイトもお前のことが気になるらしいからな…」

そういつて、アリシアは頬に唇を落とす。

「私も気にいったよ…」

アリシアが何かに気付いた。どうやら、救護が来たようだ。

「そろそろ、フェイトも目が覚めるだろう。それじゃあ、私も眠るとしよう…ただ、フェイトを悲しませるなよ。その時は、私がお前を狩ってやるからな・・・」

そういつて、アリシアは眠りについたのであった。

それから数分も立たずに、白薔薇をはじめとした、救助部隊が駆けつけてきた。

すぐさま、搬送準備がなされ、搬送が始まった。

そして、私達4人はすぐに治療ポッド送りとなった。幸い、イルドゥンは軽い、打撲だけだったが…

side out

side ???

「ほう…やはり面白い。Fの残骸・・・ここまでとは」

博士のような青年が興味深そうに答える。隣には長身の女性が立っている。

「それにあの少女、アセルスとか言ってたかな？ 実に興味深い」

アセルスの写真を見ながら、にやりと笑みを浮かべる。

「彼もまた面白いものを持ってきてくれたものだ。彼に連絡を取ろう」

そう言い残すと、ドクターと呼ばれた男はそのまま部屋を後にした。

s i d e   o u t



悪戯そして・・・（後書き）

いかがだったでしょうか？

フェイトのなかに、アリシア…なんかありそうだと思ってやってみました。

ちなみに、アリシアのCVは豊口めぐみさんのイメージで考えています。

奈々さんでいこうと考えていましたが、レ○イのイメージで作りましたので。

不備や感想がありましたら、気軽にお願いします。

## それぞれの今（前書き）

話が少し短いです。

あと、最後はご注意ください。

## それぞれの今

リニアレールでの事件から一週間が経ちました。ガジェットがレリックを狙って、襲撃してきましたが、無事に六課前線部隊が撃退。しかし、その後、出現した三体目の妖魔によって、フェイトさん、アセルス、キャロ、エリオが治療の為に即入院。現在、4人の回復を待っている次第であると…

リンの日誌より。

「休憩半分、お仕事半分」

リンを見つけた、シャーリーが話しかける。どうやら、休憩を兼ねて、日誌を書いていたようだ。

「シャーリーは何してたですか？」

「私はフォワードのみんなとデバイスの調子を見に訓練所へ行っただんですよ」

「うわー みんなどうでしたか？」

リンが私も見に行きたかったと言わんばかりに目を輝かせて尋ねている。

「それはもう！絶対調です」

満面の笑みを浮かべて答えシャーリィ。どうやら皆頑張っているらしい。私も、見に行きたいですぅ…いや、訓練したいですぅ。

side out

side 訓練所

「おらっ！！いつくぞーー」

見かけとは不釣り合いなハンマー「グラーファイゼン」を振りかざし、突撃してくる少女がいた。

スターズ02ヴィータ副隊長

振り下ろされたハンマーには何か恨みに近いような何かが感じられた。

「スバル！なんで私の出番が無いんだよ！！！」

それは八つ当たり…なんじゃ…。しかし攻撃は待つてはくれない。私は防御訓練の真っ最中で…。さっきから、ぼこぼこに殴れてるわけで…

「痛いのは勘弁してくださいいいい」

「Protection」

マツハキヤリバーがプロテクションを展開する。今回は、なんとか防ぐことに成功している。が、じりじり押されている。

「くううううう」

じり・・じり・・・後退していく。そして、勢いを消すことができずに、グラーフアイゼンを振り切られた。

「きゃああああ」

そして、きれいに木にぶつかる。

「痛ったったた…」

「思った通り、強度は悪くねえな」

ヴィータ副隊長が感想を述べながら降りてきた。フロントアタッカーとしてはいい感じらしい。これから三種の防御方法をマスターしていけないといけないらしい。ふう…大変だ。

そんなこんなで、スバルは殴られ続けた。

一方、ティアナは…

「ほら、いちいち動いてちゃ駄目だよ！」

くっ…しかし、なのはさん…きついですがこれ…

種類の違う、シューターを次々に撃ち落としていく。が、癖でその場で対処することができなかった。

「ほら、アセルスを見て！動いてないでしょ。それにティアナだってできるはずだから」

アセルスを見れば、その場から一步も動くことなく次々と撃ち落としていく。…負けたくない。私も強くならなきゃ…

スイッチが入った。

次々に撃ち落としていく。しかし足は止まったまま。それに最適な弾丸をチョイスして対応している。

「そう！それ。相手に合わせて最適な弾丸を選択していく。そして、中距離を一番にを支配する。それが私達センターの役目」

「分かってます…」

少しづつ、ティアナが分かってきてくれたみたい。うん、いい感じ

嬉しくてつい、速度をアセルスと同じ程度まで上げてしまった。

「ちよっ・・・なのはさん、速過ぎです・・・きゃあー」

ティアナ撃墜完了

side out

side 病院

303号室 フェイト エリオ キャロ

フェイトさん一家は從騎士戦の後の怪我が酷く、まだ入院していた。  
三人とも心身ともにダメージが大きすぎた。

「エリオ、キャロ...二人とも」

「・・・」

「・・・」

沈黙だけが支配するこの病室。

「二人とも、ごめんね。私が弱いばかりに...」

すでに、涙ぐんでいるフェイトは二人を優しく包み込む。それに感  
化されるように、抑えていた涙が溢れだした。

「うつうつ・・・」

「・・・ぐす」

二人ともに今回の事は重すぎた。それを十分理解していたからこそ・

「ごめんね・・・ごめんね・・・」

ただ謝り続けることしかできなかった。

そして、しばらくのあいだ、二人を抱きしめていた。少しすると二人はまた寝てしまった。

二人が寝た数分後・・・シャーリーがやってきた。

「フェイトさん・・・大丈夫ですか・・・」

「シャーリー・・・心配かけたね。大丈夫だよ」

気丈に振舞っているものの、やはりどこか辛そうだった。しかし、時間は待つてはくれない。

「フェイトさんが休まれている間に、データを解析しておきました。これです」

データを開き、フェイトに見せる。

何枚かの写真を見ていくうちに、何かに気付いた。



「これは・・・ジェイル・スカリエツティ・・・」

「どこかで聞いたことがある名前ですね」

「広域次元犯罪者ジェイル・スカリエツティ。私が以前から追いかけていてね。それに、この蒼い宝石は・・・ジュエルシード!？」

管理局で保管してあるはずなのに・・・

「彼の技術力と、ロストログアがあれば、分からない話ではないね」

ふと、何かに気付く。なんだろう？何かの文字みたいだけど

「シャーリー、これ読める？」

「どこかで見たことがある気が・・・」

二人で、考えたが答えが出てこない。が、思い出したようだ

「これは、イルドウンさんが書いてましたよ。多分、アセルスさん達がいた世界の文字ですよ」

べきっ!!

なにかが握りつぶされた音が聞こえた。シャーリーがフェイトを見

てみると、フェイトが缶を握りつぶしていた。

「奴らが関わってるわけだ…」

もの凄い殺気が漂い始める。やばい・・・これはやばい。本能が危険だと告げている。

「くくくつ…シャーリー、行くよ。隊長達を集めて緊急会議。招集させるよ」

「はっ、はい」

テキパキと着替えを着替えると、そのまま六課へ向かうのだった。二人はまだ、夢の途中だ。

s i d e o u t

s i d e はやて

彼女はとても怒っている。非常に怒っている。それは何故か。その原因が前に立っている。

「だから我は何もしてはいない」

「あれだけ無茶はいかんっていつとるやろ！なんでまた無茶したん？」

「だから何もしていないと言っているだろう」

「嘘や。あの妖魔が作るフィールドについての解析は進んでる。中に入るには、移植したコアがないと入れんはずや。無理に入ろうとすれば、身体に傷を負うのは当然やろ!!」

そう、イルドウンがボロボロになっていたのは、無理にフィールドを突き破ったからだ。

「これくらいは、どうということはない」

「もう、ほとんど戦う力は残ってないんやで。そんな無茶したら死んでしまう!!」

「そんなことで死ぬほどヤワデハない。それにアセルスを残すわけにはいかんからな」

そう語るイルドウンに対して私は我慢ができなくなった。

ギョッ… / / /

「はやて・・・」

「私は嫌や…イルドウンが死ぬなんて、絶対嫌や!!!!」

彼女は泣いていた。組織のトップと言っても、まだまだ未成年でもある。彼女たちにも、弱い部分もある。

「泣くな、はやて。我は死なん。それは約束してやる。だから、お前も無茶はするな。わかったか？」

黙って頷くはやて。そして二人の視線は交差する。

「絶対や。イルドウン。約束や！」

「ああ、約束する」

月が照らすなか、二人は静かに重なるのだった。

s i d e   o u t

## それぞれの今（後書き）

もう少し推敲しないといけませんね…orz

アセルス×イルドウンが好きな方すみません。

私は今回はイルドウン×はやてがどうしても書きたくて…

アドバイスなどありましたら、お願いします。

## 焦燥（前書き）

またしても、遅くなりました。大変申し訳ありません。幾分が変更しておりますのでご注意ください。

20000PV ユニーク3500人達成。

私の中のひとつの目標でもありました。

ご覧になっていたただけの皆様に感謝いたします。

これからも生温かく見てください。

## 焦燥

本当にうまくなっているのか：毎日同じような訓練ばかり。この前の初出勤では、それなり上手くできていた。だけど：この部隊には：凡人なんていない。凡人は私だけだ。けど、私は証明しなければいけない。ランスターは通用するってことを。

ティアナの日誌。ホテル・アグスタ出勤前より。

現在、六課の前線メンバーに加え、はやて、シャマル、リン、ザフィーラは、ヴァイスの操縦するヘリの元、今回の現場へと移動している。

「ほんなら、あらためてここまでの任務のおさらいや。これまで謎やった、ガジェットドローンの制作者、及びレリックの収集者は・・・」

説明のため、ディスプレイには、ある男の写真と履歴が映し出されている。が、これをおとなく見ることができない方が一人。そうフェイトだ。だがフェイトもライトニング分隊隊長である。そのため、今は拳をぎりぎり握っている。

「現状ではこの男。違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者「ジェイル・スカリエッティ」の線を中心に操作を進める」

「こつちの操作は、主に私が進めるんだけど、みんなも一応覚えておいてね」・・・グシャっ！！

「はい!!」

フェイトちゃん・・・天井の一部、握り潰さないでね・・・ほら、エリオとキャロがびくついてるよ。

しかし、内心では、フェイトさんすごい。なんて思っている二人であるが。だが、ヴァイスだけは泣いていた。

「俺のへりが・・・」

そんなボヤキは誰にも聞こえるはずもなく、説明が続けられる。リインがはやての横に移動し、説明を始める。

「今日向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの開場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

なのはが続けて説明に入る。続けてフェイトが説明する。

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出て来ちゃう可能性が高いとのことで、私達が警備に呼ばれたです」

説明を聞きながらも、スバルは暇を持て余したのか、それとも犬ならぬ狼派なのか、ザフィーラを撫ではじめる。

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、色々と油断は禁物だよ」



「現場には昨夜から、シグナム副隊長とヴィータ副隊長と、アセルス、白薔薇姫、イルドウンがはってくれてる」

「私達は建物内の警護に回るから、前線は副隊長達の指示に従ってね」

「はい!!」

さきほどから、きよろきよろしていた、キャロはついに我慢できなくなっただのか、質問をすることにした。

「あの、シャル先生、さっきから気になってたんですけど、その箱って？」

「ああ、これ？隊長達のお仕事着」

満面の笑みを浮かべて答えるシャル先生。お仕事着ってなんなのかな？

side はやて

ホテル・アグスタ

「いらっしやいませ、ようこそ」

受付担当が来客に対していつも通りの挨拶を行っている。次々と客が流れていき、ある客がやってきた。

すっ・・・

受付に出されるのは、身分証明書。機動六課部隊長八神はやてのものだった。

受付が困惑するのも無理はない。三人ともが、誰が見ても墮ちるであろう、美貌と容姿を兼ね備えている。シャマルが準備していたドレスがなお美しさを引き立てている。

「どうも、機動六課ですう」

受付に挨拶を済ませると、そのままホテル内を見て回ることに。なのはとはやてはホール内を。フェイトはホールの周囲を確認することになった。

ホール三階付近から、開場内を確認している、なのはとはやて。そこに昨日から来ていたイルドウンが合流した。ただいつもと違って、正装だが・・・

「昨日からお疲れやな、イルドウン。なかなか決まってるやん」

「普段とあまり変わらんだろう。中を昨日から調べてみたが、特に変わったことはない。警備も問題なかるう」

「そうやな、六課のみんなが外を固めてるし、正面もシャッターがあるし、万が一でも、私たちでなんとかする」

「はやてちゃん、心配することないけど油断は禁物だよ。周りを見てるから、ちょっと行ってくるね」

言い終わるとホールの外へ。そしてなのはから念話が。

仕事中だから程々にね

あははは、なんのことかな

・・・流石はスターズ分隊隊長。色ごとに鈍感なフェイトちゃんの嫁だけあるわ。

一人で解釈を終えると、イルドウンの横へと移動し・・・

「なあ・・・イルドウン。その・・・なんや・・・あの・・・」

「何をまごついている。部隊長とあるものがそれくらいで狼狽するな」

「あう・・・」

なぜだろう。はやてが小さく見える。が、そこはイルドウンも分かっている。何を言いたいのか、そして欲しい言葉を・・・

「似合わない服を探すのも、お前なら難しいのではないか？」

少しの間、静寂が支配する。彼が言った言葉を理解することに時間が必要だった。そして、理解できたとき、彼女の胸には喜びが満ち溢れていた。

「イルドウン・・・ありがとうな」

「いつまで、惚ける気だ。はやて、お前はこの隊の隊長だろう。我は、我の役割を果たす。お前はお前に役目を果たせ」

そうして、手を取り、手の甲へkissを落とす。

「はやて。しつかりな」

「もちろんや、イルドウン／／」

そんなこんなでイルドウンはすうっと消えてしまふ。こればかりは私も慣れない。気持ちに一区切りつけると、すぐに切り替える。仕事はきっちりせなあかんから。

side out

side 白薔薇姫

「なかなかお似合いですよ／／アセルス様」

素直な感想を私は述べました。高貴でかつ美しい姿。深紅のドレスが映える。私の監修の元、シャル様のご助力もと完成させたこのドレス・・・紅い薔薇を携え、アセルス様にお似合いです。

「白薔薇／／なんか恥ずかしいな」

バリアジャケットや制服ではなく、このような正装をするのは久方ぶりでした。無理ありませんね。

すっと、アセルス様の手を取り、少し顔を赤らめ、お願いすること

にしました。

「アセルス様・・・お願いしますね」

言いたいことが分かったようで、アセルス様も、顔を赤らめているようだ。けれどすぐに答えてくださいました。

「もちろん、喜んで／＼／」

すぐに手を取ると、優しくエスコートしてくれました。すれ違う人達は、私達を眺めているようでしたが、私は気にしていません。もちろん、アセルス様も。

昨日一通り見回りましたが、再度確認ということで、建物内を見回っていると、向こうからフェイト様が来られました。フェイト様も黒を基調としたドレスがとてもお似合いです。

「アセルス、白薔薇姫！昨日からお疲れ様です。二人とも、凄く似合ってるよ」

「フェイト様こそ、凄くお似合いです」

「羨ましいな・・・胸とか」

アセルス様・・・少し感想がずれてませんか？

「二人ともいいなあ。ドレスもお揃いだし、アセルスと白薔薇姫も

なんかいい感じだし・・・私もなのはに・・・」

公私混同はやめましょう、機動六課。

「と、とにかく、もうすぐオークションだしね。お仕事がんばろうね」

「フェイト様も。頑張りましょう」

「むう…羨ましい」

アセルス様・・・夜は御覚悟を／／／／

「バルディツシュ、オークション開始まであとどれくらい？」

「3 hours and 27 minutes」

「うん」

残りの時間、私達はフェイト様と一緒に回ることになりました。途中、廊下で話をされていた二人の御仁の一人がなにか気付いたようでしたが、特に危険なこともなさそうなので、そのままスルーして見回りを続けることにしました。

side out

side ティアナ

しかし、今日は八神部隊長の守護騎士団全員集合か

スバルからこんな念話が飛んでくる。今は特に問題もないので警戒しつつ、会話を始めた。

そうね、あんたは結構詳しいわよね。八神部隊長の事とか、副隊長の事とか

うん、父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど

そこから、八神部隊長のデバイスのこと、副隊長とシャル先生とザフィーラ、リインを合わせた6人のことについて少し話が進む。だがレアスキル持ちは当然、秘匿事項が多い。

ティア？何か気になることでも？

別に。また後でね

気になるなんてもんじゃない。六課の戦力は無敵を通り越して異常だし、八神部隊長がどんな裏技を使ったか知らないけど隊長格はみんなオーバーS。副隊長もニアSランク。ほかの隊員達だって、前線から管制管まで未来のエリート達ばかり。あの歳でBランクを取っているエリオとレアで強力な竜召喚士のキャロはフェイトさん

の秘蔵っ子。それに危なつかしくはあっても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル。そしてまだ謎だらけだが、私と同じぐらいで、遙か上に行くアセルス。

「この部隊で凡人なのは私だけか・・・だけどそんなの関係ない。私は立ち止まるわけにはいかないから」

s i d e o u t

s i d e・・・

「どうした、何か気になる事でもあるのか」

「Dr.のおもちゃが近づいてるって・・・」

森の中で、親子にも見える男と少女の他愛もない会話をしていた。だが少女にもたらされた情報に間違いはない。

・・・!?



ホテルの屋上に待機していたシャマルのデバイス「クリアルヴィント」のセンサーに反応があった。どうやら、お客さんの来たようだが歓迎はだれもしないが。

「シャーリー!？」

ロングアーチのシャーリーに確認を取る。クリアルヴィントのセンサーの誤認ではないことも確認できた。

「来た来た・・・来ましたよ! ガジェットドローン陸戦? 型、機影三十・・・いや三十五。陸戦? 型、2、3、4!」

ホテルの三方からガジェットが襲来していることがディスプレイで確認できた。すぐさま情報は各隊員に通達される。

そこからは早かった。

副隊長やシャマルの指示のもと行動が開始される。新人FW4人はティアナの指揮下でホテル前に防衛ラインの設置。ウィータ、シグナム、ザフィーラは追撃に出ることになった。ただザフィーラが喋れたことに、エリオとキャロは少々驚いていたようだ。

「了解!!」

それぞれ内容を把握すると返事を返し、移動を開始した。ただ、ティアナは魔力アンカーを使い、シャマルの元に。状況を見たいとのこと、シャマルからデータを受け取っていた。

「副隊長のみなさん、デバイス、ロック解除。グラーフアイゼン、

レヴァンティン、レベル？起動承認」

「クラールヴィント、お願いね」

「グラーファイゼン」

「レヴァンティン」

それぞれのデバイスを掲げバリアジャケットを展開する。そこにはいつもの副隊長ではなく「八神はやての騎士達」の姿があった。

バリアジャケットの展開が終わるとヴィータ、シグナムは追撃へと赴く。

「新人達のところには、ぜってーやらねえ。一機たりとも通さねえ。即行でぶつつぶす」

それを聞いていたシグナムはやれやれといった感じで、話を聞いていた。

「お前も案外過保護だな」

「う、うつせーよ」

そんなやりとりをしながらも、目標のすぐそこまで迫っていた。木々をなぎ倒しながらもこちらへ一直線とあったところか。

「ヴィータ、私が大型をやる。お前は細かいのを叩いてくれ」

「あつ、ずるいぞシグナム！！遠距離が苦手だからってそれは卑怯だぞ！！」

「そんなもの早いもの勝ちだ！！」

子どものですかと言いたくなるようなこの二人。ただここ最近出番がなく暇を持て余していたのは事実である。

「今度、アイス奢れよな！！」

「分かった分かった」

そして二人と一匹は戦闘を開始した。

八神部隊長、私が防衛ラインに参加してもいいでしょうか？

外の状態を確認していると、アセルスから確認が飛んできた。

中の警備は十分やろうし、アセルスがFWに合流すれば、さらに安心だな。

了解や。アセルスはそのままFWに合流、ティアナ指揮下で防衛ラインの維持と遊撃。各ポジションのカバー頼むで

了解しました

確認を終えるとすぐさま、窓へと走り出す。白薔薇は中の警護を任

せて、私はラインの維持に専念することにした。

さて、いくよ。ルナ、ソル！！

両耳のピアスを触り、外へと飛び出す。同時に深紅のバリアジャケットが展開される。二階から勢いのままに飛び出してしまったが、なんなく着地。そのまま皆の元へ合流することにした。

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

ホテルから少し離れた場所から、ゼストと呼ばれる騎士と少女は眺めていた。そこにDr. から通信が来たのだ。

「ルーテシアはどうか？頼まれてくれないかな？」

「うん、いいよ」

ルーテシアと呼ばれる少女は断る事もなくDr. そうジェイル・スカリエッティの依頼を受けた。

依頼を受けてくれたことに彼は感謝しているようで、今度お茶とお菓子を御馳走すると言ってくれた。別にお菓子とかはいいんだけど・

依頼品のデータを受け取ると、ルーテシアは召喚を始める。そう、

彼女も召喚士なのだ。

「吾は乞う、小さき者、羽搏く者。言の葉に応え、我が名を果たせ。召喚インゼクトツーク」

紫の魔力陣から、卵のようなものが現れ、それが破裂するとそこから小さな羽虫が大量に召喚された。ルーテシアはオブジェクトコントロール、つまり無機物の操作を羽虫にさせるというのだ。だが、これは彼女の能力の一端にすぎないのだが。

「気を付けていつてらっしゃい・・・」

放たれた羽虫はガジェットに入り込み、コントロールを奪いとる。そして動きは格段に良くなり、シグナムや、ヴィータが一撃で落とせなくなった。

ヴィータがラインまで下がることになり、シグナムとザフィーラの二人で当たることでなんとかラインの維持を優先することにしたが、さらに相手は追い打ちをかけてくる。

「ブンターヴィヒト。オブジェクト11機、転送移動」

これには同タイプであるキャラがいち早く気付いた。

「遠隔召喚、来ます!!」

言葉と同じくして、眼前に召喚魔方陣が展開される。そこから転送された11機のカジエットが出現する。

「召喚つてこんなこともできるの？」

スバルやエリオが転送魔法により現れたガジェットを見て叫んでいる。だがキャロは知っていた。

「すぐれた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです」

三人のやり取りを聞いていたティアナだけは違っていた。彼女はすでに臨戦態勢に入っている。副隊長達のリミッター付きでの戦いを見せつけられ、さらに「やらなければ」の感情に飲まれかけている。

「なんでもいいわ、それより、迎撃いくわよ」

「おおお！！！」

今までと同じだ。証明すればいい。自分の能力と勇気を証明して。私はそれでいつだってやってきた。

クロスミラージュを正面に構え、魔方陣を展開し、迎撃の準備を整える。リイン曹長もこちらに合流することになったそうだ。ただ虫にやられたとかなんとか。

が……ルーテシア達の目的を知る者はいない。ガジェットは罔であり、本命の物を探している最中だった。そしてそれもついには見つかる。

「見つけた・・・ガリユー、お願いね」

右手を掲げると「アスクレピオス」から黒い塊が放出された。それこそが彼女の召喚虫で信頼を置くガリユーだった。すぐにガリユーは倉庫へと向かっていった。

「くっ!!」

足を止め、ガジェットに対して射撃を行うも、効果的なダメージを与えることができていない。避けられるし、当たっても破壊することできていない。

ガジェットから放たれたミサイルを撃墜することに気を取られ過ぎて、背後を完全に取りられていた。が、キャロの声でなんとかジャンプして回避し、二発打ち込むもAMFにより決定打にはならない。

「ティア!?大丈夫??」

ウイングロードを滑走し、ガジェットをかく乱しているスバルから声が飛ぶ。何とかの意味を込めて、左手を少しあげ、木に身を隠し、マガジンを交換していたとき、シャル先生から連絡がくる。

防衛ライン、もう少しだけ持ちこたえてね。すぐに、ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから。それに左舷はアセルスが抑えてくれるから、みんなは正面だけに注意して

アセルスも出てるの！？それにシャル先生、守ってばかりじゃ行きづまります。ちゃんと全機落とします

ちよつと、ティアナ大丈夫なの？無茶しないで

朝晩訓練してきてますから・・・大丈夫です。

「エリオ、センターに後退！スバル、クロスシフトAで行くわよ！！！」

「おおお！！！」

ティアナの意図とする動きを理解し、さらにガジェットをひきつける。それを確認するや、カートリッジ4発ロードする。

証明するんだ。特別な才能がなくなつて、一流の隊長達がいる部隊でだって、どんな危険な戦いだって・・・

一つ、また一つ。シューターが生成されていく。そして十数発のシューターがティアナの周りに漂っている。

「私は、ランスターの弾丸はちゃんと敵を撃ち抜けるんだって」

大丈夫。打てる。クロスミラージュも・・・私も。



スバルは準備が整ったことを確認すると、車線軸にガジェットを追い込んでいく。そしてティアナを確認すると、その場から急速に離脱した。それが合図となるのだ。

「クロスファイアーシュート!!!」

ガジェット目がけ、一斉に放たれるオレンジの弾丸。カートリッジのおかげか、易々とガジェットを貫通していく。

だが、彼女の技量では、この数を正確に制御することがそうそうできるはずもなく、さらに、精神的にも不安定なら尚更だ。一発だけ逸れてしまい、それが運悪くスバルの方へと飛んで行った。

背後に魔力を感じたスバルが振り返るもすでに眼前。防御するにも、魔力量が大きくて貫通されてしまう。

「ああっ・・・」

どうすることもできずに、ただ固まってしまふ。バリアを使うこともできずに直撃する寸前、目をつぶってしまふ。だが私には衝撃などとは何も来なかった。

「ティアナも無理しすぎだよ。スバルももう少し集中しないと、怪我だけじゃすまないよ」

目を開けると、深紅のバリアジャケットに身を包むアセルスが、シューターを受け止めていた。しかも、バリアとかじゃなくて、魔力の刃を使って受け止めているのだ。

## 十字留め

普段からの地獄のような訓練のおかげで、魔力弾も止めることができるようになった。さらにここから応用である。勢いを吸収すると同時に方向を変え、余ったガジェットに跳ね返した。

左舷のガジェットを全て切り裂き破壊してきた。？型であろうと、今のアセルスを止めることはできなかった。左舷を片づけ、急いで駆けつけた時、ちょうどスバルが誤射されるところだった。

「ふう・・・ティアナ、無茶は良くないよ。スバルもそうだよ。こくなるってくらい予想はついてたでしょ？ここは私に任せて、二人は休んで。ヴィータ副隊長も来てくれたみたいだし」

普段のティアナの事を考えると厳しく言うことは止めよう。今日の事で何か変わるかもしれないから。

ティアナの身体が震えてる。自分のやったことが招いた結果・・・フレンドリーファイアになりかけていたのだ。できると啖呵をきっておきながら、この結果だ。無理もない。

「アセルス、今は私がいけないんだよ、だから・・・」

聞きわけのない二人だねホント・・・前思考撤回。少し、イラッてしちゃったよ。

「引つこんで」

深紅の瞳が心を抉る。圧倒的な強者が弱者を眼だけで殺すような・・・深く、暗い眼で・・・

「何回も言わせないでね・・・それに、私の階級は4人より上・・・つまり上官命令だよ」

「は・・・い・・・」

こんな恐いアセルスみたことない・・・押しつぶされそうなプレッシャーを感じる。それにティアナも相当こたえてるみたい・・・

アセルスとヴィータ副隊長に任せて、私とティアナは後ろにさがった・・・。私はこの時気付かなかった。ティアは声を殺し、泣いていたことを。

s i d e   o u t

ガリユーは何も問題なく目的物を回収し、離脱を開始した。ルーテシアからのオーダーを受け、スカリエツィのもとへ向かっている最中だ。

だが、機動六課も簡単に終わる相手ではない。ノーマークだったガ

リユールの前後に影が現れた。

「はやてとアセルスの読みは当たっていたようだな」

「はい、イルドウン」

前後を挟むように、イルドウンと白薔薇姫が躍り出る。完全に気配を殺し、ガリユールを待ち伏せていた。妖魔の剣と妖魔の小手、具足を装備した状態で・・・

待ち伏せは上手くいったが、はたして抑えられるものか・・・が、やるしかないようだな。

だが、相手と殺りあうつもりのないガリユールは逃げることをだけを考えている。なので、二人を避けることだけに集中している。

至極簡単な方法をガリユールは選択した。そう、正面突破だ。

「・・・」

さらに加速し、そのまま抜き去ろうと試みる。だが、イルドウンも易々抜かれるわけにはいかない。

抜刀の構えをとり、相手を見据える。空気が変わった・・・

「一撃で決める」

ガリユーが通り過ぎようとしたその刹那・・・

きいいいいん！！！！

金属と金属がぶつかる音が鳴り響く。

・・・金属音だと！？一体何とぶつかったのだ！？

土煙りをあげた後、スピードを相殺するために、足でブレーキをかける。白薔薇姫が近づくも、そこにはイルドウンしかない。

「イルドウン・・・」

「すみません、逃しました・・・だが、一太刀は入ったが・・・がはあっ」

膝を付き、吐血するイルドウン・・・どうやら、すれ違いざまに貰ったようだ。

「まさかここまで、動けないとは。情けない」

膝を付きながら、少しあがった息を整えている。その目には悔しさがにじみ出ている。

「今は治療が先です。シャマル様を呼びます」

白薔薇姫から連絡を受けてシャルマがやってきた。前線はすでに全機撃墜していたので持ち場を離れることにも問題はなかった。

「二人とも、無理はしないでくださいと言ってるじゃないですか。本来の5割程度しか出せないんですから」

治療を受け、なんとか出血は止まった。治療が終わるとすぐに、イルドゥンは動きだす。

「迷惑をかけた。すぐにホテル内に戻る」

「待つて、まだ終わってないです・・・ってもう」

すでに、そこに姿はない。白薔薇姫はやれやれといった感じで笑っていた。

「何故、無茶をするんですか？二人とも」

治療データをまとめながら、白薔薇姫に問いかける。前にも話は聞いているのだが、どうしても納得ができないのだ。

誰だってそう思う。二人の力が落ちているのは分かっているのだから。

「シャルマ様、私達には時間がないのです。あの方が本腰を入れてくる前に・・・その時までには成さなければならぬことがあるのです」

成さなければならぬこと。それがなんなのかは二人にしか分からない。だが、命をかけるほどに、何か大事なことがあるのだろう。今は詮索せずに、私もホテルへと戻るのだった。

s i d e o u t

その後、オークションが開催され、はやては、アコース査察官となのはとフェイトはそれぞれユーノと再会することとなった。





## 焦燥（後書き）

作者の解釈が十二分に入っていますので、生温かく見ていただけたら幸いです。

## 再開

ホテル・アグスタの件の後、私は彼女達に言ったことを自分の中で反芻してみた。自分が同じ立場だったら・・・力が同じならば・・・どうしていたのだろうか。多分、同じことをしていただろう。彼女のことは分からないでもない。私も正直なところ焦っている。本当に強くなっているのか・・・分からない。けれど私には止まる事が許されない。守りたいから・・・これから、ずっとこの先も。

アセルスの日誌より。

side アセルス

ホテルでの一件が終わり、現場検証が行われている。オークションは無事に終わり、今は六課総出でガジェットの回収は現場での出来事をまとめている。私は黙っておこうと思ったのだが、ヴィータ副隊長に問い詰められ、喋ってしまった。当然、私も怒られたのだが、ティアナにスバルも一緒だった。このことは当然、なのはさんにも伝わり、今はティアナと二人で散歩というなお話の最中だ。

「私も、言い過ぎたかな・・・」

ぼつりとでた言葉は誰にも届かずに消えていく。誰もそれが正しいのかなんて分かりはしない。ただ、事態が進むことを待つほかに道はない。

ティアナはなのはさんと、散歩という形の話し合いに行っているとこ

るだし・・・

しばらく、六課スタッフと現場での出来事について話をしていると、フェイトさんが誰かと話しているのに気づく。親しげに話をしているのが気になったので、近くに行ってみることにした。あくまでも興味があるからということとは宣言しておこう

「フェイトさん、検証はほとんど終わりましたよ」

「うん、ありがとう。これで、スカリエッティに近づくことができるかもしれないね。そうそう、アセルスに紹介しておくね。私となのはの幼馴染でユーノ・スクライア司書長。今回のオークションの鑑定を担当してたんだ」

「初めまして、アセルス准陸尉です」

一応、形式的な挨拶を行う。初対面なら尚更である。

「あはは、そんなに硬くされると困っちゃうな。普通でいいよ。僕はユーノ・スクライア。無限書庫の司書長をやってます。よろしく」

そんなこんなで簡単な挨拶を終えると、フェイトさが気になっていたことを話始める。どうやら、前回のミーティングに出ていたロストロギアについてのようだ。

キヤロ、気になるなら一緒に聞けば？

気付いてたんですか！？私はただ、ユーノ先生とフェイトさんがどんな関係なのか知りたかっただけで・・・

エリオにキャラ。二人ともフェイトさんに引き取られ、一緒に生活を始めてまだ長くはない。そのため色々と気にもなるのだろう。

色々聞いといてあげるから、後でゆっくりお茶でもしようか。ね、キャラ

はい！！お願いします

凄く喜んでるな・・・妖魔との一件以来、凄く仲良くなっている。キャラにあげたペンダントに助けられましたとか、なんとかで。でも、女の子同士で、お茶するのも楽しいからね。

「そう・・・ジュエルシードが」

「うん、局の保管庫から地方の施設に貸し出されてて、そこで盗まれちゃったみたい」

コンソールを操作しながら、ガジェットから発見されたジュエルシードについての説明をフェイトが行っている。あまり詳しい話は聞いていないが、フェイトさんはジュエルシードと何か関係があったらしい。

「そっか・・・」

顔を曇らせながら、ユーノ司書長は答えていた。ユーノ司書長の反応、フェイトとの関係を踏まえるとどうしても気になることがある。聞いてもいいものか分からないが、キャラとの約束もあることだし、ここは思いきって聞いてみることにした。

「フェイトさん。フェイトさんとジュエルシードとはどのような関係があったのですか？お二人を見ていると、過去に何かあったように思えるのですが・・・」

聞いているいけないことだったのだろうか。二人とも一瞬顔を濁したが、フェイトはすぐに普段通りの優しい笑みを浮かべ、話してくれた。

「アセルス、なんか真面目すぎだよ。みんなの前じゃないんだからね」

くすくすと笑いながら、フェイトさんは答える。どうやら私の形式ばった感じはフェイトさんから見るととても可笑しいらしい。

「アセルスは真面目だからね。仕方ないよ、うん」

反論の余地なく、完封されてしまった。恐るべし…

ユーノ司書長は、相変わらずだなんて感じで見ていて、話を戻そうと、咳払いをしていた。

「少しずれちゃったけど、10年前、私は、なのはとユーノ司書長の二人とジュエルシードを集める為に戦ってたんだ。その事件はPT事件って呼ばれてね。母さんや、姉さんと悲しい分かれがあったけど、なのはや、みんなと出会うことができ、今は感謝してるよ」

・・・姉さん???

「あの・・・そのお姉さんの、名前は・・・」

「アリシア・テストロッサって言うんだ。私の大切な姉さんなんだ」

ドキッ！！！！

本当だったんだ。あの戦った相手が、フェイトの姉である、アリシアであることがここに証明されてしまった。

「アセルスどうかしたの・・・???」

優しく尋ねてくれたフェイトさんに眼を合わすことができない。瞳の奥からアリシアに見られている気がしてならないからだ。

「迂闊に話すと・・・次は・・・殺られる」

背中にもものすごい量の冷や汗をかきながらも、情報はしっかりまとめていた。が、内心はすっかり喋ってしまわないかと冷や冷やしていたのだが。

フェイトさんの過去の話に区切りが付いたちようどその時、もう一人の幼馴染ことなのはさんがやってきた。どうやら、ティアナとの話を終わったようだ。

「ちようど良かった。アコース査察官が戻られるまで、ユーノ先生

の護衛を任せれてるんだけど、後退お願いできる？」

「うん、了解」

やっぱり久しぶりに会うのだから色々話したいこともあるのだろう。フェイトさんはなのはさんと交代して、調査に戻ることにした。

「エリオ、キャロ、それにアセルス、現場検分手伝ってくれるかな？」

気を利かせたら、多分、フェイトさんに勝てる人はいないんじゃないかな・・・了解です。

なのはさんと、ユーノ先生を残して検分に移った。それからしばらく検分が続いていると、シャーリーから撤収準備完了の報告が全体に伝わった。

各員、撤収を開始。六課に帰還することとなった。

なのはや、はやても、今回久しぶりに出会えた人々との話はこれらの活力にもなるだろう。

side out

side ティアナ

六課に戻ってくるころには、もう夕刻。あたりはすっかり茜色に染まっている。

「みんな、お疲れさま。今日の訓練はお休みにします。しっかり休んで、また明日からがんばろう」

「はい！！お疲れさまでした」

一同解散し、隊舎の方へと向かって歩きはじめる。みんな、疲労の色は隠せないようだ。だが・・・簡単に休むことをよしとしない人物が一人。ティアナである。

「私はもう少し練習してくるから。みんなは先戻ってて」

「あ、それなら私も一緒に」

「僕も！！」

「私も手伝います」

仲間として本当に恵まれているのでないだろうか。だれもミス責めるわけでもなく、さらには疲れているのにも関わらず私に付き合うというのだ。

だが、素直になれない。ましてや、今日のミスはランスターを証明すると誓った私にとって、致命的な失敗だ。弱い私なんて誰にも見せたくない。

「ありがと。でも、みんな疲れてるでしょ。今日の私は、ほとんど疲れてないから。みんなは先に帰ってて」

皮肉のつもりかな・・・自分で言ってる馬鹿みたい。みんなもそれ



以上食い下がる事もなく、隊舎に戻ってくれたみたい。これ以上みんなに迷惑をかけるわけにはいけない。だから・・・凡人である私は努力するしかないんだ。

それから数時間の間、練習用のポインターを相手に、トレーニングを行った。集中していて気付かなかったが、すでに外は真っ暗だ。

「はあはあはあ・・・」

休憩も入れずに無理をしていれば当然こうなるのは、誰の目から見ても明らかだった。流石に見かねたのか、この空気を変える男が現れる。

「ご苦労なこった。任務終わりで自主トレとは恐れ入るね。だけどお前らは身体が資本だから無茶し過ぎるのはな。ほれ、これでも飲みな」

整備服で現れたのは、ヴァイス陸曹だ。両手には缶ジュースを持っている。どうやら見かねたようで休憩の口実を作るために持ってきたようだ。

「ありがとうございます。ずっと覗いてたんですか？」

「整備の合間にスコープでちらちらとね」

「それは、御心配かけました。缶ジュースありがとうございました」  
時間にすればわずか数分といったところか。これだけでは休憩とは呼べる時間ではないが、今のティアナに対しては幾分かの休憩には

なつたのではないか。

「私は凡人なんで人一倍努力しないといけないので。それでは、失礼します」

「俺に言わせりゃ、十分すぎるぐらいなんだがな・・・」

その場にはティアナはもう居ない。ヴァイス陸曹が言いたかったこと・・・その真意をくみ取る事は、今のティアナには不可能だろう。だから今は、外から見守ることしかできないのだ。

「私は・・・凡人だから・・・」

side out

そのころ隊舎では

お風呂から上がった、アセルス、キャロ、スバル、エリオ、白薔薇姫がティアナのことについて話していた。アセルスとキャロは今度の休みにでもお茶しよっかとか言っているが気にしないでおこう。

「ティード・ランスターってティアナのお兄さん？」

アセルスもティアナのことについて気になっていたらしく、スバルの話にさつきとは違い真剣になって聞いている。当然、この場にいるみんなもそうなのだが。

「みんなには詳しく言っていなかったからね。この際だしみんなにも知ってもらおうかな。ティアナのお兄さん、ティーダさんのこと」

それから半時間程、スバルは知っていることを全て話してくれた。ティーダさんのこと、ティーダさんに対する上司の事、そしてティアナのことを。どうしてそこまでして、結果に拘っていたのかその理由がスバル以外に明るみになった。だがそれを聞いたが故に、一人の少女は許せなかった。

「ティアナどうしてここまで無茶なことをするのかは、よく分かったよ。でも、このままなら私は許せない。絶対に」

「アセルス、それはどういうこと!!」

そう言うなり、アセルスは部屋に戻って行った。それに付きそう形で白薔薇姫も戻って行った。去り際に「アセルス様にも何か思うところがあるのだと思います」と残して。

分からない。私にはアセルスが思っていることが全然・・・それになんだか空気も冷めてきたみたいだし、この場は解散になった。各々が部屋に戻り、スバルもデバイスの整備をして寝ることにした。

「もうこんな時間・・・」

そこにシャワーを終えたティアナが戻ってきた。さすがに私が起き

ていないと思つていたのか多少は驚いている。

「あんた、まだ起きてたの？明日もあるんだから早く寝なさいよ。それに明日4時から朝練するからアラームうるさかったらごめん。それじゃ、おやすみ」

布団に入るなり即睡眠。よつぱど疲れていたんだろう。私も早く寝なきゃ。さりげなく自分の時計のアラームを4時にセットした。絶対ティアナ起きないだろうし、私の体力を侮ってもらっちゃ困る。

「おやすみ、ティア」

明日も頑張ろう！！

こうして、新人たちの一日が幕を閉じた。しかし、まだ終わらない人たちもいた。

「シャーリー、頼んであつた物はできたか？」

「なんとか間に合いそうです。それにしても……いいんですか、本当に？」

「いいですよ、シャーリー様。時間は待つてはくれませんか。それに、アセルス様も成長されてます」

三人の会話には色々と思うところがあるのだろう。だが、時が歩みを止めることは決してない。だから歩み続けるしかないのだ。

「後は、キツカケだけか……」

そして、案の定起きることができなかった、ティアナをスバルが起こし、それから朝練をスバルが手伝うこととなった。訓練以外で考えたシフトの練習などなど。そして普段の訓練や教導など、日は一日、一日と過ぎていく。そして、ティアナの焦りも確実に増していく。誰かが止めることもできず。

そして、運命の日が訪れる・・・

## 再開（後書き）

この小説における、アセルス、イルドウン、白薔薇姫のCVを考えているんですが・・・なかなか難しいですね。何か良い案がある方はよろしければ感想の方にいただけると嬉しく思います。

## 絆・出会い

- - - 屋外訓練場 - - -

ついに始まってしまったあの模擬戦。私達が怒り、悲しみ、悔い、惑い、そして歩き始めたあの日。

今思えば懐かしく、絆を深めることにも繋がったあの日。ただあのころの私達にはその時の意味を知ることにはなかった。そして時間は動きだす。

「どうして二人ともこんなことするのかな・・・」

下を向きたただ言葉を紡ぐのは、スターズ分隊長・高町なのは。その手からは赤い血が流れ落ちる。素手でスバルの拳を受け止め、ティアナの魔力刃を受け止めているからだ・・・

「教導の時だけちゃんと話を聞いてるふりをして、模擬戦で危ないことをしたら意味ないよ・・・私の教導何か間違ってる？遊びじゃないんだよ」

二人ともから何も返事は返ってこない。スバルは完全にテンパっている。ティアナもそうだ。だが彼女は止まれない。ただ自分の思いを吐露しながら・・・泣いていた。

「私は・・・もう迷惑を掛けたくないんです。もう・・・失敗して、誰かの足を引っ張りたくないんです。だから・・・だから・・・私

はッ……」

魔力弾を形成し、なおも攻撃を続けようとするティアナ。だが、今回の模擬戦……いや模擬戦と呼べるのだろうか……終わっていた。

なんで……分かってくれないの……私が体験したあんな辛いことを味わってほしくないから……だから……

なのはの目にも涙が見えた。二人の思いはまだ交差することはない。ベクトルは完全に逆を向いたままで……

ティアナは意識を手放した。なのはの砲撃が直撃……シールドも展開することもなく圧倒的な力で意識を刈り取られた。

「ティアア!!!!??」

バインドで縛られていたスバルがウイングロード上に落下したティアナに駆け寄る。当然なのはに対して怒りを覚え、なのはを睨みつけている。だが、なのはは冷たく言い切った。

「ティアナにスバル、両者とも撃墜で模擬戦は終了。今日はスターズはこれまでとします。では解散」

それ以上は何も告げることにはなかった。その背中からは悔しさと、悲しみが溢れていた……



side アセルス

フェイトさんの仕事を手伝っていたため、模擬戦はライトニングに参加することになっていた。そして今起こった事を、フェイトさんやエリオ、キャロとともに見ていた。

「なのはさんの思うことは分かる。私も・・・自分の事は大事にできているのか怪しいところだが、仲間を思うことは決して負けていない。何より、仲間を危険に晒してまでの勝利なんて・・・」

私の考えを口に出した後、フェイトさんは私の唇に指をあてた・・・

「アセルス・・・今は私達の出番じゃないよ。待つことだって大事なんだよ。それになのはだって分かってると思うんだ。だから三人とも、なのはやスバル、ティアナのことは責めないでね」

「分かっています・・・フェイトさん」

「はい！もちろんです」

「私もです」

フェイトも微笑を浮かべている。機動六課の絆を改めて感じていたのだろう。その後、ライトニングの模擬戦が行われた。フェイトさんと私はタイマン。キャロとエリオはコンビでフェイトさんとの勝負だった。

最近までの模擬戦ではフェイトさんの速さにもかなり慣れていたのだが、アリスアと戦って以来、フェイトさんは強くなっていた。本人いわく、身体が軽くなったとか・・・

その為か、今回も速度で完全に圧倒され終始防戦だった。ここぞといった時に魔力量と強さが足りずに、攻防に決め手を欠いている状態だった。魔力が早々成長するわけでもなく……今は技術を鍛えているだけだ。

キャロもエリオもあの日以来、トレーニングに必死だ。自分の弱さが許せなかったのだろう……。エリオ、キャロもティアナのように早朝や深夜までトレーニングを続けている。フェイトさんも、止めたいのだが、理由を実際の現場で体験しているからこそ何も言えなかった。

六課の前線部隊はかなり追い込まれている状況といっても間違いない。それぞれの思いが交錯し、反発している。誰もが誰も完璧ではない。ましてや完璧などないのだから。

side out

side はやて

このままでは部隊はFWは機能しなくなる。何か……。静まりかえった水面に波紋を起こす、石を投げ込まなければ……

ここに決断を下す三人が居た。機動六課部隊長・八神はやて。そしてイルダウン、白薔薇姫である。今回の模擬戦での一見を受けて決断を迫られていた。

「このままやと……スターズにライトニング、どちらも潰れてしまふ。そろそろ、みんなに話す必要がありそうやな」

「アセルスの件についてもだ。これまでを見てきた限り、心身の成長を感じられる。はやて、白薔薇姫、第二段階に移ろうと考えているのだが」

「私も同意見です。今のアセルス様ならばきつと大丈夫です」

「せや、アセルスの件も頃合いやろうし、何より、なのはちゃんのこと、そして妖魔のことについて詳しく話す必要がある。バラバラになってる場合じゃなくなってきたるのは事実。だからこそ教導の真意をみんなに知ってもらわんと」

今回のことを重く見ていた首脳陣『イルドゥンと白薔薇はアセルスのだが』は手をうつことを決めた。機動六課が新たな一步を刻むためにこの決断は遅かれ早かれ必要なのだ。

「もう入ってもいいか？はやて」

ドアが開くとそこには制服姿のヴィータがいた。なのはの教導の真意を理解している中でも一番といっても過言ではない。そのヴィータを呼んだのは・・・

「ヴィータ、お願いがあるんやけど」

「分かってるよ。今からなのはのどこに行ってくる。しぶつても無理やり許可をとってくるからな。シャーリーにも準備させといてくれよ」

そういうなり、部屋から出て行った。流石というべきか・・・考えていたことは同じだった。来るべきときに備えみんな考えていたのだ。

「はやてよ、優秀な部下を持っているものだな」

「イルドウン、それは違うで。部下とかやない。ここはみんなが家族なんや。だから誰一人として、家族の事を考えてない者はおらんよ！！」

はやては嬉しそうだ。志を同じくもった家族同然の仲間が仲間を思い、力を貸してくれる。はやてもまた絆を感じている。が・・・

「あつ！！！！大事なこと忘れとった」

急に焦りだす、はやてを不審に思ったイルドウンが問いただす。

「はやてよ、何をそんなに慌てている？」

「実は数日後に、六課に新隊員が加わるんやけどな・・・すっかり忘れとったんよ。あははは・・・」

完全に棒読みで汗を流しているはやて。完全にだれが見ても何かを隠している事はバレバレである。

「まあ・・・準備は私のほうがしとくから、二人も、みんなとアセルスに話すことをまとめておいてな。それとシャーリーにも連絡しといてな」

勢いそのままに二人を追い出すと机に突っ伏すはやて。彼女を悩ますのは新加入の新人FWなのだが・・・

「私は反対したんやけどな・・・中央の連中の手が掛かってそうやな。本間にいらんことしてくれるで・・・」

ぶつくさ文句を呟きつつも、書類の製作にかかる。腐っても部隊長とはまさしくこのことである。

「腐ってないわ！！！！」

あさつての方向に吠える部隊長を尻目に、一日の終わりが告げられる。そして、数日が経過し、奇しくも全ての出来事が重なることとなった。

s i d e   o u t

数日後、海上にガジェットドローン？型が出現。機動六課の出勤にあたり、なのはから、ティアナへの待機命令が下った。もちろんなのはは、ティアナを思つてのことだが、ティアナはそれに当然食い下がる。それにしびれを切らしたのはシグナムだった。

「隊長の命令に駄々をこねるな馬鹿ものが。何もお前は見えていないのだから、待機命令をするのは当然だろうが」

ティアナを殴り飛ばしたあと、斬って捨てるように言葉を吐く。彼女も我慢の限界を迎えていたようだ。その様子をなのはは心配そうに見ていた。すぐに帰ってくるから・・・そうしたらきちんとお話ししようって。それにヴィータちゃんにも押し切られる形だけとお願ひしてあるし。

そこにスバル、そしてエリオ、キャロが食い下がる。思いは違えど、ティアナが強くなるために努力している姿を知ってたからこそ、シグナムに食い下がったのだ。

「強くなるってそんなにいけないことなんですか？誰かを傷つけたくないから、強くなろうと努力してるんじゃないですか！！」

「ならお前らはなのはの教導の意味を考えたことはあるのか？」

不意に投げかけられた言葉に4人ともが固まる。シグナムはやれやれといったように4人を見ている。

準備をしていたシャーリーとともに現れたヴィータのこの発言により、この場を鎮静化することができた。

「なのはの悪い癖だな。ちゃんと話してないから、こんなにも面倒くさいことになってやがる」

呆れながらも、ヴィータもやれやれといったポーズを取っている。シャーリーは少し表情が暗い。

「会議室にFWは集合。今から見せたいものがある」

・・・会議室・・・

「これは、なのはさん・・・それにフェイトさん!？」

エリオにキャロが呟く。この映像を見たことはなく当然知らなかつ

たのだから。アセルスを除いては。

「まだ9歳のときから、魔法を使うことになって戦ってきた。それにこんな小さいときから、収束砲まで使って」

ちょうどスターライト・ブレイカーが放たれている映像が映し出されている。収束砲は身体に負担が掛かるが躊躇うことなく何度となく使用してきたのだ。成長しきっていない身体に無茶を加え続け、急速が与えられることもなく、幾度となく身体を酷使したのだ・・・

「そして酷使してきた結果がこれだ」

ヴィータは涙を隠しきれなかった。あの日現れたUNKNOWNにより疲れがピークに達していたのはは撃墜されたのだ。そしてヴィータは守れなかった。

ガンッ！！！！

ヴィータが我慢できず壁を殴っていた。この映像を見るたびに、あの日の自分の不甲斐なさを思い知らされる。

「なのははな、今までの疲労とこの重傷で、二度と空を飛ぶことができなくなるところだったんだ。けどあいつは諦めなかった。まだ小さい身体で必死にリハビリをして・・・また空に帰ってきたんだ！！この辛さがお前たちに分かるのか！？！？？」

修羅の如く詰めよるヴィータをシグナムが止める。ヴィータも落ち着きまた話始める。FW4人は涙が止まる気配がない。

「あいつの教導はな、どんなことがあっても、どんなに苦しい状況でも、生きて、無事に帰ってこれる力をお前たちに付けるためなんだ。だから毎日考えて・・・お前たちが一人前のFWになれる教導をしてきたんだよ!!!」

あの日以来、なのはを守ると誓ったヴィータにとってやはり今回の事は許せなかったのだろう。若干怒りが全面に出始めているが、そこに手が差し伸べられる。

「ありがとう、ヴィータちゃん」

任務を終えたなのはとフェイトが会議室に来たところだ。さらに、はやて、イルドウン、白薔薇姫もやってきた。

「本当は私からちゃんと伝えればよかったんだけどね・・・私の教導って、地味で力が付いてるって分かりにくいから・・・」

誰も言葉を発せない。なのはの教導の意味を知ったからこそ、悔いているのだろう。

「ティアナ・・・ちよつと外で話しようか」

ティアナを連れて、隊舎の前の海へ。腰をおろし海を眺めながら、二人は再度向き合った。

二人のベクトルの向きはすでに同じになっていた。何も心配することはない。ティアナは素直に謝り・・・なのはの胸で泣いた・・・



絆

目に見えないが人と人その間にある確かなもの。その力が大きいほど、数が多いほど・・・人は強くなれるのだろう。

なのはちゃん、落ち着いたら会議室に戻ってきてくれる？

了解。今回がタイミング的にはベストだね

念話を終わると、二人は会議室へと戻った。

「みんな揃ったようやな。みんなに伝えないかんことが3つあるんや。まず一つ目はのは隊長から」

その場にいるFWは姿勢をただして、話を聞いている。

「まずは、明日からみんなのデバイスのリミッターを一段階解除します」

それを聞いた4人は喜んでいる。ティアナは先ほど一足先に話を聞いていたが。

「明日からセカンドモードで教導だから、覚悟しとけよ」

ヴィータの言葉にも4人は元気に返事を返す。憑き物が落ちたように、みんなの表情は明るかった。

「次に二つ目。これは妖魔についてや」

エリオ、キャロは当然のごとく反応したが、スバルとティアナはまだピンっと来ていない。まだ妖魔との戦闘経験がないからだ。

「それについては資料をまとめてある。各自、読んでおいてくれ」

イルドゥンから資料が配られる。妖魔とはなんなのか。特徴、出現について等等。

「これをみんなに話したのには理由があるんや」

そう言っ、はやてがデータを展開する。

「以前、屋外の訓練スペースに現れた新型。それに昇格試験の時の大型スフィア一台に異常があったんよ。それらを調べてみると機械のはずなんやけど、生体反応の痕跡が微かにあった」

「つまり、妖魔との何らかの関係性があるかもしれないと考えているわけですね」

アセルスの答えに頷いて答える。断定までには至らないが、可能性としては考えられる。

「そう、考えるとスカリエッティは妖魔と手を組んでいることになる。我らとしては、あの方が手を組むなど考えなかったが・・・」

「ねえ、そのいつも言っている「あの方」て誰のことなの？」

イルドゥンと白薔薇姫は覚悟を決めた。アセルスならば耐えてくれるだろうと。

「ファシナトゥールの針の城の主。オルロワージュ様だ」

5人揃ってポカーンとしている。アセルスはそのことを知らなかった。いや・・・忘れていただけだが・・・

「ちなみに、我と白薔薇姫も妖魔だ」

ここであえてアセルスのことはふれなかった。アセルスも自分が妖魔だとはいわない。白薔薇姫から言われていたからだ。

4人はさらに驚いている。エリオに、キャラは警戒しているようだ。

「大丈夫だよ。私達はみんなの仲間なんだから」

アセルスが4人に声をかける。4人も普段のアセルスやイルドゥン、白薔薇姫を知っているからこそ、納得したようだ。

「・・・っ痛」

また頭痛が・・・しかも今回は、頭が割れそうなほどの痛みだ。何

だろう・・・何も考えられない・・・ただ・・・何か大事なことを忘れてる気がする・・・

けど・・・思いだしたこともある・・・

私は逃げ出したんだ。あの城から。でもなんで逃げ出したんだろう？それに何があつたのかも全然思いだせない・・・

「・・・様、ア・・・ス様」

ぼんやりと白薔薇の顔が視界に入る。どうやら少し気絶していたようだ。

「ごめん、心配かけて。もう大丈夫だから」

「アセルス様、何か変わったことはございませんか？」

心配そうに尋ねてくる白薔薇を撫で、少しだけ忘れていたこと思ひだしたことを伝えた。それを聞いた瞬間、白薔薇の表情が少し明るくなっていったように感じた。

「それで急なんやけどな、アセルスのデバイスのルナとソルなんやけど、試作機のためか、かなりのメンテナンスが必要なんよ。ただ機能をストップして置けば自己修理機能があるから、勝手に治るから。だから一回シャリーに預けてくれるか？」

本人も無茶をしたことには覚えがあるらしく、シャーリーにルナとソルを預けた。

「アセルスさん。自己修理にどれくらいの時間がかかるかは分かりませんが、待機状態で持つておく分には問題ありませんので。直ぐに調整します」

受け取るやいなや、調整を開始するシャーリー。流石といったところか物の数分で調整を終えた。

「できましたよ。またいつものように、耳に付けてあげてくださいね」

シャーリーに感謝しつつ、受け取ったルナとソルを耳に付ける。しばらくの間はお別れだけど、ゆっくり休んでね・・・

「となると、しばらくはフォートレスを使うことになるね」

昇格試験時に作ってもらったデバイスを見る。現在は待機状態の指輪だが。

「それはもちろん考えてます。ただし今回のデバイスは特注で、かなり珍しいんです」

そういつて、待機状態のデバイスをアセルス渡した。ネックレスで剣のような形をしている。

「セットアップ」

受け取ると直ぐに起動し、確かめることにした。

「これって・・・刀？」

黒と銀を基調にした鞘。そして一振りの刀。直刃の波紋で、もはや芸術品である。

「そういえば、カートリッジシステムは？」

そう、カートリッジシステムがないのだ。

「実は、今回のこのデバイスは、もともとあつた刀をデバイスとしているんです。もちろん非殺傷設定はできますよ。繊細な刀をベースにしているので、カートリッジシステムを付けることができませんでした。一応インテリジェント型なんですが・・・この子全然しやべらないんです」

そうなんだと、納得して、話しかけてみるが返事も特にない。まあ、これくらいのほうが逆に頼もしいかも。

「このデバイスには名前がないので、付けてあげてくださいね。それとこのデバイスにカートリッジシステムを付けなかった理由ももう一つあります。アセルスさんのレアスキルを前提に作ってますので」

またしても事情を知らない5人は???状態である。ティアナはアセルスに、レアスキルもちだったのと詰め寄っているが。

「イルドウンさんが内緒にしてたんですよ。魔法と縁が浅い状態で、このレアスキルは危険だからって」

一応納得して話を聞く5人。当然内容は気になるところで・・・

「アセルスのレアスキルと呼ばれるものは、自己強化ブーストと呼ばれるものだ。使用中は体力を消費するが、魔力量に威力、それに身体能力が強化される。また何故かはわからんが容姿に変化が見られるらしい」

こんなのがレアスキルなのかと思われそうだが、あくまでもこれは外見上そう思ってもらうためだが。当然アセルスにも・・・

「なのはにも、これを使用した教導メニューを考えてもらっている」

実際に使ってみないと分からないが話を聞く限りでは便利そうだ。カートリッジシステムがないのも頷ける。それに容姿が変わるなら使ってることも直ぐに分かる。とりあえず体力と刀に慣れないとだね・・・

会議室が宴もたけなわ状態だが、まだ話が残っている。

「最後に三つめなんやけど・・・」

はやてがしぶっている間に会議室のドアが開いた。そこには六課の制服を着た、女性が立っていた。身長は170cmはあるだろうか。長身でかつ、締まっており、出るところは出るといったナイスな体型である。グレーの髪は肩まで伸びており、黒い瞳が印象的だ。がそれ以上に左目の眼帯が一際目立っている。

「失礼します。本日付で機動六課に出向となりました、エリステイ

ン・カルヴィン二等陸士であります。エリスとお呼びください。若輩の身でありますがよろしくお願いいたします」

敬礼を終えると、姿勢を正したまま、はやてを見ている。みんなはもちろん、そのはやては溜め息である。

「エリス二等陸士。あれほど来てはいけないと言っておいたはずです。なのになぜ機動六課へ？」

「はっ！はやて部隊長のもとでは是非仕事をしてみたいと思ひまして志願しました」

この会話を見ている大半の人はこう思っているだろう。どこの軍隊あがりですかと・・・

しばらく、はやてとエリスの会話が続いているがなにやらエリスのほうがか何かを我慢しているようである。

「だから、しっかりゲンヤさんのところで勉強してくるよう伝えてあつたはずですが」

この会話を聞く限りでは二人は知り合いの様だ。だがどんな関係までかは分からない。だがそれもつかの間だった。

わなわなと震えるエリスが我慢できなくなったのか、ついにこの均衡を打ち破った。

「母上！！私が嫌いなのですか！？」

「嫌いなわけちゃう。ただ、巻き込みたくなかっただけなんや。そ



れは分かってほしい」

・・・????

「母上！！！！！！！！！」

はやては、しまったと頭を抱えている。エリスは何をそんなに驚いているといった感じだ。しかしこの二人を除いて、機動六課スタッフは腰を抜かしている。

「主、こんなことは聞いていないですよ！！！！」

「はやてちゃん、いつのまにこんな大きな子どもが！？」

完全にパニックになってしまった。隠していたのは悪いとおもっていたのだが、まさかこんな形ではれるとは思ってもいなかったのだ。

「みんな落ち着いて！！！！」

が、治まる気配がない。仕方ない場合の最終手段を取るしかないようだ。

「今度から食堂でシャルを働かせるで」

「すみませんでした」

一同が謝罪の後、はやてに注目している。どうやらエリスのことを話さなければならぬようだ。シャルが何か言っているが気にし

ないでおこつ。

「5年ほど前にな、任務中に記憶喪失の女の子を保護したんよ。それがエリスなんやけど、そのときの一件で、私のことを母親と思ってるんよ。まあ要するに養子になつたてことなんやけど・・・二歳しか変わらない娘つてのは、なんとも・・・」

「私の母上は母上だけです」

「こんな感じなんよ。それに魔導師としての資質もあつてな、ゲンヤさんと共に預かってもらつてたんよ。最初は少し施設におつたんやけど、一緒にいいって押し切られて、一人暮らしをさせて、たまに泊まりにいつてたんよ。事情が事情なだけに、ゲンヤさんくらいにしか言えんくてな」

「しかし、これからは毎日一緒です。それに八神・エリスティンといつになつたら変えていいのですか!？」

「まだ駄目や!!この部隊はできたばかりで色々と風当たりは厳しいのに、部隊長のスキャンダルみたいなものはもつての外や!!だから落ち着くまで我慢してや」

ヴォルケンリッターにさえ隠していたせいか、はやてはもみくちやにされている。しかし、エリスがそこに割って入り、なんやかかanyaでまたモメテいる。

こんな感じで、起動六課の絆は深まり、新たな仲間と力が加わりました。ただ、はやては奥様となのはとフェイトにしばらく遊ばれることになるのだが。

和やかな起動六課。そして、また近づく影が・・・

s  
i  
d  
e  
  
o  
u  
t

## 絆・出会い（後書き）

ヴィータって・・・カッコイイよね

なんか内容が多くてぐだぐだしていますが、初登場のエリスもこれから大きな役目を多分？担っていくことでしょう。

ラ〇ラに似てるなんて決してございませんので、悪しからずwww

それと、新デバイスの名前もよければ募集しております。  
よろしければお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7590q/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS 紺碧の姫

2011年10月10日13時57分発行